

平安京右京四条一坊七町
(朱雀院) 跡

2 0 1 3

有限会社 京都平安文化財

例 言

1. 本書は京都市中京区壬生天池町 23-1 において老人健康福祉施設建設に伴う発掘調査報告書である。
[文化財保護課受付番号 12H341]
2. 本調査は丸清木材株式会社(代表取締役 松尾清三)の委託により有限会社京都平安文化財が実施した。
3. 発掘調査の面積は、266.59㎡(本調査 220.24㎡、確認調査 46.35㎡)である。
4. 発掘調査は平成 25 年 4 月 5 日から 平成 25 年 5 月 31 日まで実施した。整理・報告書作成は平成 25 年 6 月 1 日から平成 25 年 8 月 31 日まで実施した。
5. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。
指導機関：京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課
調査主体：有限会社 京都平安文化財
主任調査員 ト田健司
調査員 河野凡洋
補助員 浅川永子、井上真紀、内川博之、小林雅幸、田中 侑、吉岡真史
作業員 有限会社 京都平安文化財
6. 本書の執筆は第 1 章はト田、第 2 章以下は河野が担当した。報告書の編集は河野が行った。
7. 遺構・遺物の写真撮影は河野が行った。
8. 基準点測量は財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。種子鑑定はパリノサーヴェイ株式会社に委託し、その成果を附編に掲載した。樹種鑑定は竜子正彦氏からご教示を頂いた。
9. 調査検証委員会として下記の方々のご指導を頂いた。
京都外国語大学外国語学部英米語学科 教授 南 博史
同志社女子大学現代社会学部社会システム学科 教授 山田邦和
10. 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。
網 伸也、家原圭太、井戸竜太、内田好昭、宇野隆志、馬瀬智光、奥井智子、柏田有香、木村理恵、國下多美樹、小泉裕司、小檜山一良、小森俊寛、近藤奈央、鈴木久史、大洞真白、高橋 潔、辻 純一、西森正晃、長谷川行孝、平尾政幸、堀 大輔、本田憲三、前田義明、松尾清三、南 孝雄、宮原健吾、村井伸也、村尾政人、百瀬正恒、吉川義彦、吉崎 伸、竜子正彦(五十音順、敬称略)
京都府教育庁指導部 文化財保護課、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、株式会社 京都建築事務所、株式会社 高塚工務店、丸清木材株式会社、株式会社 ユニマツトそよ風、NPO 法人文化財支援センター

凡 例

1. 調査に使用した座標値は、世界測地系(国土地標第Ⅵ系)に基づいている。水準点は T. P. 値(東京湾平均海面値)を使用し、本文中では「T. P.」と略称している。
2. 使用した地図は京都市都市計画局発行の 1:2500「壬生」を参考にし編集した。
3. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄、1994)を使用した。
4. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 40・50・100・150・200 分の 1 とした。
5. 遺構名は柱穴、掘立柱建物、柵、土坑、溝と表記し、その後に遺構の種別に関係なく一連の通し番号を付加した。ただし、建物番号は遺構とは別の番号を付加した。
6. 遺物実測図は各図スケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。
7. 遺物番号は遺構別に通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
8. 本書に収録した各資料の図は本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
9. 本書に収録した図資料等の引用、参考文献、索引は、文末に註として掲載した。



調査地位置図

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
1. 発掘調査の概要	2
2. 日誌抄	2
第2章 位置と歴史的環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 朱雀院の沿革	5
第3節 周辺の調査	10
第3章 調査の方法	13
第4章 遺 構	15
第1節 基本層序	15
第2節 遺構	15
1. 平安時代前期以前の遺構	
2. 平安時代前期の遺構	21
3. 中世の遺構	26
4. 近世から現代の遺構	30
第5章 遺 物	31
第1節 平安時代の土器類	31
1. 掘立柱建物跡1 柱穴出土土器	31
2. 整地層出土土器	32
第2節 中世の土器類	41
第3節 平安時代の瓦類	41
1. 掘立柱建物跡1 柱穴出土瓦	41
2. 整地層出土瓦	41
第6章 総 括	49
第1節 掘立柱建物跡について	49
1. 遺構	49
2. 遺物	49
第2節 遺構の変遷	50
第3節 まとめ	54
附編 平安京右京四条一坊七町跡の種実分析	57

挿図目次

図 1	平安京における調査地位置図.....	1	図 25	整地層上層出土土器.....	35
図 2	溝状落込み土器集中部.....	3	図 26	溝状落込み出土土器 (1).....	37
図 3	遺構検出作業.....	3	図 27	溝状落込み出土土器 (2).....	39
図 4	調査地位置図 (1 : 2500).....	4	図 28	整地層下層出土土器.....	40
図 5	朱雀院推定復元図.....	6	図 29	土坑 52 出土土器.....	41
図 6	周辺調査 (1 : 5000).....	10	図 30	溝 47 出土土器.....	41
図 7	調査地配置・地区割り図 (1 : 1000).....	13	図 31	柱穴 43 出土瓦.....	41
図 8	四条一坊七町と座標.....	14	図 32	整地層上層出土瓦 (1).....	42
図 9	調査地土層断面 SP 位置図.....	16	図 33	整地層上層出土瓦 (2).....	43
図 10	調査地北・東壁土層断面図.....	17	図 34	整地層上層出土瓦 (3).....	44
図 11	調査地南・西壁土層断面図.....	18	図 35	溝状落込み出土瓦 (1).....	45
図 12	1-1 平安時代前期以前遺構平面図.....	19	図 36	溝状落込み出土瓦 (2).....	46
図 13	1-2 朱雀院 (平安時代前期) 遺構平面図.....	20	図 37	整地層下層出土瓦 (1).....	46
図 14	掘立柱建物 1 平面・土層断面図.....	23	図 38	整地層下層出土瓦 (2).....	47
図 15	掘立柱建物 1 完掘平面・エレベーション図.....	24	図 39	整地層下層出土瓦 (3).....	48
図 16	溝状落込み平面・土層断面図.....	25	図 40	掘立柱建物跡 1 (1 : 200).....	51
図 17	整地層土層断面図.....	26	図 41	史跡紫香楽宮 (宮町遺跡第 40 次) 建物Ⅳ (1 : 200).....	51
図 18	1-3 中世遺構平面図.....	27	図 42	長岡京跡左京二条二坊十町「離宮跡」 S B 26500 (1 : 200).....	52
図 19	土坑 42 平面・土層断面図.....	28	図 43	平安京内裏「紫宸殿」.....	52
図 20	土坑 52 平面・土層断面図.....	28	図 44	調査地遺構変遷図 (1 : 500).....	53
図 21	溝 47・48 平面・土層断面図.....	29	図 45	朱雀院関連遺構位置図 (1 : 1000).....	56
図 22	1-4 近世から現代遺構平面図.....	30			
図 23	掘立柱建物跡出土土器.....	33			
図 24	整地層模式図.....	34			

表目次

表 1	朱雀院沿革 (1).....	7	表 6	遺構一覧表.....	15
表 2	朱雀院沿革 (2).....	8	表 7	柱穴一覧表.....	21
表 3	朱雀院沿革 (3).....	9	表 8	出土遺物の概略表.....	31
表 4	周辺発掘調査地.....	11	表 9 ~ 17	遺物観察表.....	62 ~ 70
表 5	周辺試掘・立会調査地.....	12			

図版目次

図版 1 遺構	1 調査前全景（南から） 2 近世～現代耕作溝検出状況（北から）	図版 12 土器類	柱穴 43 柱穴 45 整地土上層 溝状落込み
図版 2 遺構	1 近世～現代耕作溝完掘状況（北から） 2 土坑 42 土層断面（西から）	図版 13 土器類	溝状落込み
図版 3 遺構	1 土坑 42 種子検出状況 2 土坑 42 完掘状況（南から）	図版 14 土器類	溝状落込み 整地土下層 柱穴 40 柱穴 41 柱穴 43
図版 4 遺構	1 土坑 52 土層断面 2 土坑 52 完掘状況（北から）	図版 15 土器類	柱穴 44 柱穴 45 整地土上層
図版 5 遺構	1 溝 47・溝 48 検出状況（北東から） 2 溝 47・溝 48 完掘状況（東南から）	図版 16 土器類	整地土上層 溝状落込み
図版 6 遺構	1 掘立柱建物跡 1 検出状況（北東から） 2 掘立柱建物跡 1 検出状況（南から）	図版 17 土器類 図版 18 土器類	溝状落込み 溝状落込み 土坑 51 整地土下層 溝 47
図版 7 遺構	1 柱穴 38 根固め石（東から） 2 柱穴 40 根固め石（南から） 3 柱穴 43 柱根片・根固め石（南から）	図版 19 瓦類 図版 20 瓦類	柱穴 48 整地層上層 溝状落込み 整地層下層
図版 8 遺構	1 柱穴 44 柱根検出状況（南から） 2 溝状落込み土器検出状況（東南から）	図版 21 瓦類	整地層下層
図版 9 遺構	1 溝状落込み土器検出状況（北西から） 2 掘立柱建物跡 1 完掘検出状況（北東から）		
図版 10 遺構	1 完掘状況（南から） 2 北側拡張部分遺構検出状況（北西から）		
図版 11 遺構	1 北側拡張部分遺構検出状況（南から） 2 東側拡張部分遺構検出状況（西から）		

平安京右京四条一坊七町（朱雀院）跡

第 1 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

経 緯 2012 年、京都市中京区壬生天池町 23-1 に丸清木材株式会社及び株式会社ユニマツトそよ風による老人健康福祉施設の建設が計画され、当地が「平安京跡」に該当することから、2012 年 10 月 3 日付けで、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出が行われた。

これに対し、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、京都市と略す）は 2013 年 1 月 23 日に試掘調査を実施し、平安時代前期の大型柱穴遺構や遺物を検出したことから、

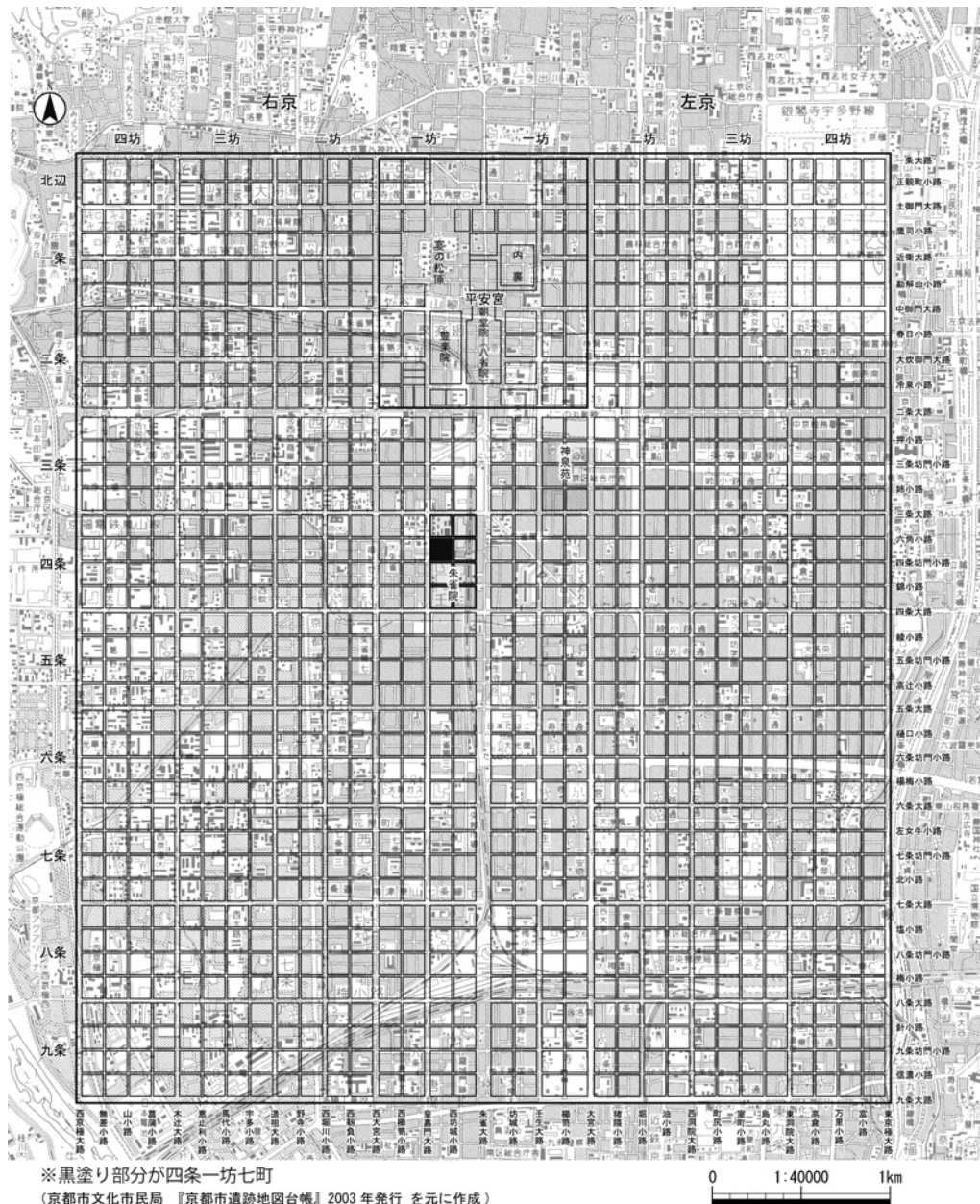


図 1 平安京における調査地位置図

発掘調査の指導を行った結果、京都市の指導のもと、有限会社京都平安文化財が発掘調査の委託を受け実施することとなり、文化財保護法 92 条に基づき、3 月 25 日に京都府教育委員会に発掘調査の届出を行った。

目 的 当調査地は平安京右京四条一坊七町の中央部よりやや東寄りに位置する。また、累代の後院として知られる朱雀院の推定敷地内にあたる。今回の調査では、試掘調査で検出された大型柱穴遺構の展開、朱雀院との関連性及び検出遺構の構造・配置に重点を置き、周辺の調査と合わせて当地の変遷及び朱雀院の実態を解明することを目的とした。

第 2 節 発掘調査の経過

1. 発掘調査の概要

調査は 2013 年 4 月 5 日から開始した。重機掘削後の精査作業で、地山及び平安時代整地層上面にて近世から現代の耕作溝、中世の土坑・溝、平安時代前期の掘立柱建物跡を検出した。

一面で各時期の遺構が確認されたため、遺物により遺構の時期を確認しながら発掘調査を進めた。まず近世から現代耕作溝を対象とし調査を開始した。その後、中世の遺構を対象として調査をしたが、調査地南壁土層断面で、調査開始時には検出できなかった土坑を 1 基確認したため、南壁を一部拡張して全体を検出した。

最後に平安時代の遺構を対象に調査した。遺構は掘立柱建物跡を 1 棟検出したが、建物南東隅のみを検出ただけであった。掘立柱建物の身舎は南北 3 間、東西 3 間以上ではあるが、主軸が不明であったため、今回の対象範囲の調査終了後に北側を拡張し、確認調査をすることにした。

5 月 24 日に調査終了、5 月 25 日に近隣住民に向けての現地説明会を開催した。

5 月 27 日に拡張作業を開始、柱穴 3 基などを確認し、建物跡身舎の主軸が東西棟であることが確定できた。5 月 31 日にすべての作業を終了した。

尚、各遺構の土層断面、平面実測は適宜行った。

2. 日誌抄

表土掘削	4 月 5 日	調査区設定 京都市来訪
	4 月 8 日	資材搬入 重機掘削開始 検証委員 南博史氏来訪 京都市検査
	4 月 9 日	重機掘削 耕作土掘削作業 GPS 測量により基準点設置 検証委員 南博史氏来訪
	4 月 10 日	重機掘削作業 耕作土掘削作業遺構検出作業 壁面精査
	4 月 11 日	重機掘削作業 耕作土掘削作業 壁面精査 京都市検査
	4 月 12 日	重機掘削終了 耕作土掘削作業 遺構検出作業
近世～現代	4 月 15 日	遺構検出作業 近世から現代遺構検出写真撮影後、掘削開始 検証委員 南博史氏来訪
	4 月 16 日	遺構掘削
	4 月 17 日	遺構掘削 清掃作業 京都市検査
	4 月 18 日	清掃作業 完掘写真撮影 京都市検査
	4 月 19 日	遺構検出作業 実測作業
	4 月 22 日	整地層上層掘削 実測作業 検証委員 南博史氏来訪 京都市検査

中世	4月23日	遺構検出作業
	4月25日	遺構検出作業 中世溝検出
	4月26日	中世溝検出状況写真撮影 遺構掘削開始 京都市検査
	5月1日	遺構掘削作業 遺物洗浄作業開始
	5月2日	中世溝完掘状況写真撮影 遺物洗浄作業
	5月7日	遺構検出作業 京都市検査、(財)京都市埋蔵文化財研究所来訪
	5月8日	中世土坑掘削 下層から種子出土 遺物洗浄作業 小森俊寛氏来訪
	5月9日	中世土坑完掘状況写真撮影 整地層掘削 遺物洗浄作業 (財)京都市埋蔵文化財研究所来訪 京都市検査
平安時代	5月10日	整地層掘削 遺物洗浄作業 (財)京都市埋蔵文化財研究所、小泉裕司氏来訪
	5月11日	土器集中部検出作業 遺物洗浄作業
	5月13日	土器集中部検出作業、写真撮影 整地層掘削 検証委員 南博史氏来訪
	5月14日	土器集中部遺物取り上げ 遺物洗浄作業 (財)京都市埋蔵文化財研究所来訪 京都市検査
	5月15日	平安時代建物跡検出状況写真撮影 遺物洗浄作業 近畿大学准教授 網伸也氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所来訪
	5月16日	遺構掘削 整地層掘削 遺物洗浄作業 検証委員 南博史氏、吉川義彦氏来訪
	5月17日	整地層掘削 遺物洗浄作業 小森俊寛氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所来訪
	5月18日	遺構土層断面実測 遺物洗浄作業
	5月20日	遺構掘削 遺物洗浄作業 検証委員 南博史氏来訪
	5月21日	遺構掘削 清掃作業 遺物洗浄作業
	5月22日	清掃作業 遺物洗浄作業 平安時代遺構完掘状況写真撮影 龍谷大学教授 國下多美樹氏、(財)京都市埋蔵文化財研究所来訪 京都市検査
確認調査	5月23日	断割作業 遺物洗浄作業 百瀬正恒氏来訪
	5月24日	調査地壁面土層断面実測作業 中世土坑検出、掘削 遺物洗浄作業
	5月25日	現地説明会開催、60名来場 検証委員 山田邦和氏来訪 京都市視察
埋め戻し	5月27日	拡張作業 遺構検出後、写真撮影 遺物洗浄作業 埋め戻し
	5月28日	遺物洗浄作業 埋め戻し 検証委員 南博史氏来訪
	5月29日	遺物洗浄作業、埋め戻し終了
	5月31日	撤収
	6月3日	遺物整理作業開始
	8月13日	遺物整理作業終了



図2 溝状落込み土器集中部



図3 遺構検出作業

第2章 位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

本調査地は平安京右京四条一坊七町内に位置する。

京都市中心部は東山連峰と西山連峰、北山連峰に囲まれた盆地であり、南西に向かい地形が低くなる扇状地形をなしている。また、調査地周辺や右京域内の発掘調査で湿地状の堆積が多く確認されており、平安京造営前後には平安京右京域、中でも三～五条の一・二坊に湿地が集中していたことが明らかになって来ている¹⁾。

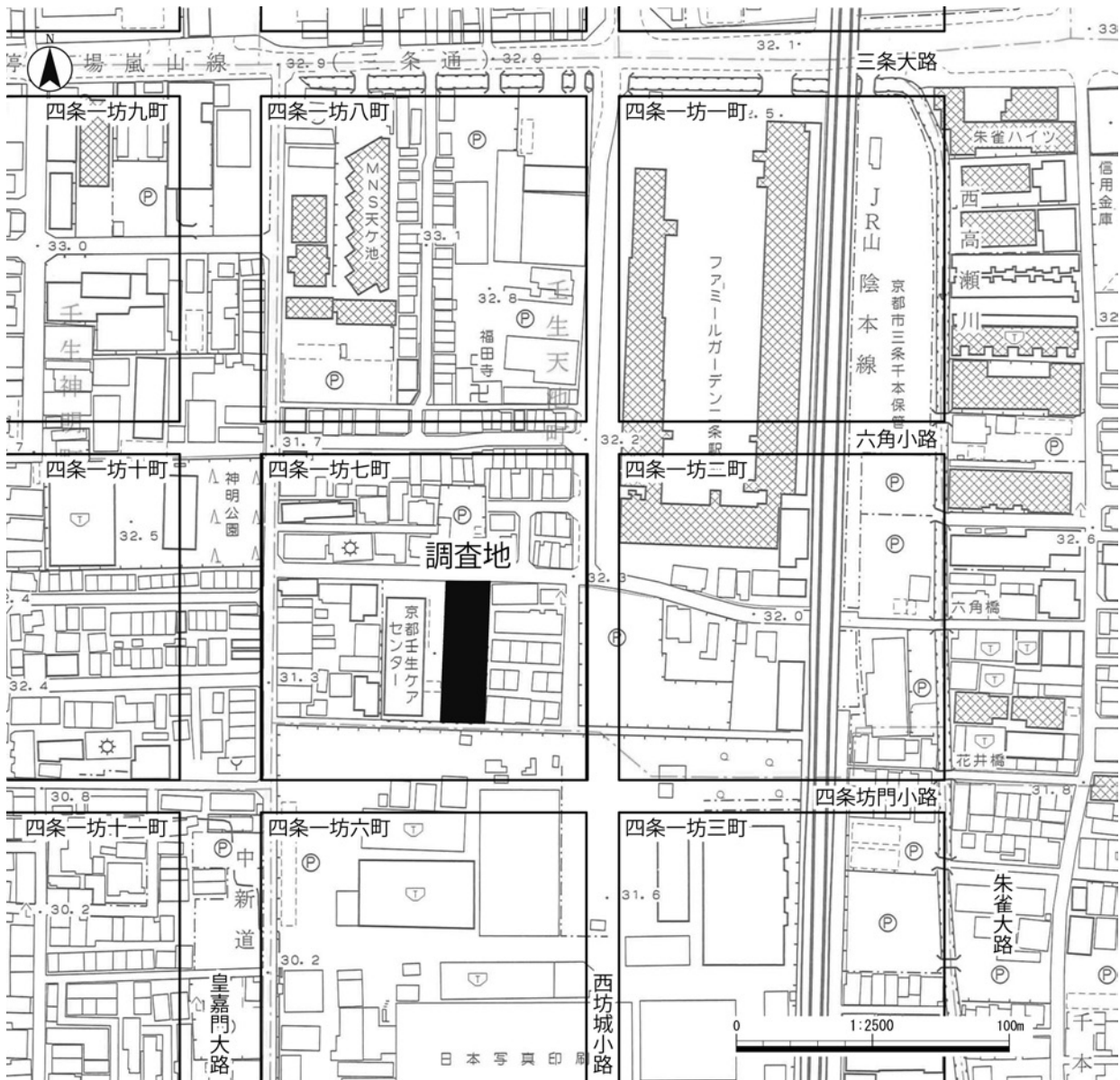


図4 調査地位置図 (1:2500)

天池町内には主として古墳時代の遺物の散布地である壬生遺跡²⁾も存在しているが、調査地はその南東側にあるため周知の埋蔵文化財包蔵地からは外れている。

右京四条一坊一～八町には東西二町、南北四町の「累代の後院」である朱雀院と、右京四条一坊十一・十二町には源高明の邸宅である西宮と右京四条一坊十町、十三～十五町にその源高明の所領である「西宮領」が存在していた³⁾と推定されている。調査地は右京四条一坊七町内の中央東寄り、朱雀院の中央に位置している。

朱雀院は左京三条一坊九～十六町を占める神泉苑と同規模であったようである。しかし、神泉苑は平安京造営当初から禁苑として利用されていたのに対し、朱雀院は嵯峨上皇の時に造営されたと考えられている⁴⁾。当初は主に嵯峨上皇の皇后 橘嘉智子（檀林皇后）の御所となり、それ以降は上皇や皇太后の御所として、また天皇の詩宴の場などに利用されていた。

第2節 朱雀院の沿革

文献上では『続日本後紀』仁明天皇 承和三（836）年五月癸亥（二五日）条「以平城京内空閑地二百卅町奉充太皇太后朱雀院」が朱雀院の初見である。この太皇太后は仁明天皇の母で、嵯峨上皇の皇后の橘嘉智子（檀林皇后）である。この記載から、嵯峨上皇の時にはすでに朱雀院が存在していたと考えられている⁵⁾。

その後、『日本紀略』宇多天皇 寛平八（896）年正月廿五日丁未「天皇幸朱雀院。覽諸工造作。」とあり、朱雀院内に建物を新たに造営して、後院としての朱雀院が拡大整備されたとみられる。

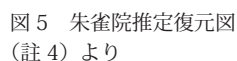
続く、醍醐天皇、朱雀天皇、村上天皇と宇多天皇から四代にわたり、在位中に詩宴等を催す地として、また退位後の後院として利用されている。村上天皇在位中の天曆四（950）年十月十五日に「朱雀院失火、嶋町雜舍悉焼亡、」『園太曆』とあるが、翌天曆五（951）年正月四日には「行幸朱雀院」『近衛家文書』とされており、大規模な火災ではなかったと考えられている⁶⁾。

村上天皇以降、朱雀院は後院としての重要性が薄れたのか、朱雀院への行幸の記事や詩宴の記事が格段に減少する。しかしながら、『小右記』後一条天皇 長元元（1028）年八月十九日辛巳条「……、午後與中將同車見、穀倉院、……、續見朱雀院、頗加修造、保相朝臣之勤云々、」、また、『明月記』土御門天皇 元久二（1205）年閏七月六日「朱雀院築築垣、可為御遊獵之地、神泉無便宜之由、始有沙汰云々。」とあり、平安時代中期以降衰退する右京域の中にあつて、少なくとも、敷地は朱雀院として鎌倉時代初期までは残されていたと考えられる。文献上の朱雀院の沿革についての詳細は表1～3にて示している。

醍醐天皇在位時の朱雀院の建物の状況についての細かい記述は『新儀式』「天皇奉賀上皇御事」にある。これは延喜十六(916)年に宇多法皇の五十算奉賀をした際の記録である。ここには、「(中略) 當日早旦行寢殿御装束其儀母屋第三間立太上皇大床子三脚 (中略) 當上皇御座南廂鋪地敷二枚其上敷四幅帛備舞蹈所 (中略) 東廂當母屋二間曲折立棚厨子四基 (中略) 庭中去南階二丈立舞臺中邊設舞童樂人座也、以東臺為今上御休息所 (中略) 以西臺為上皇御座、栢殿為親王已下侍從

また、『新儀式』には延喜十六年に擬文章生試をした際のことが「行幸朱雀院召文人并試擬文章生事」に記されている。ここには「前一日上卿奉仰召仰可有行幸之事、并召仰明日可参文人并擬文章生之事、所司装束馬場殿并栢殿、馬場殿儀同上、又栢殿母屋北邊立度御屏風中央間立大床子御座、南廂從東第三柱下北折至第四柱下敷疊、為親王公卿座親王大臣西上北面納言宰相南上北面、南廂西戶外為采女候所、東池上橋以東敷疊為文人座南上西面、南池中堤上鋪疊為擬文章生座北面西上、當日行幸之儀皆同上条、先馬場殿近衛次將執御劔璽、置御座邊鈴等候（中略）一々馳畢、召腰輿御栢殿宸儀御座之後、左近衛陣殿良方、右近衛陣坤方、大臣依召参上自東階侍座（中略）次上卿奉仰召第一儒士應召参上自東階候（以下略）」とあり、ここでも、数多くの施設がみられる。

これらを総合し考察をされているのが太田静六氏で、「朱雀院の考察」において詳しく論述されている⁷⁾。その中で宇多天皇在位時に『新儀式』にみられるような朱雀院が整ったとしている。また、上皇の御所である寝殿と太后の御所である栢梁殿の2つの建物群があり、寝殿南に池があり、栢梁殿は池の中島にあるとしている。そして、敷地東側には馬場殿や馬場の存在を指摘している。それらは宇多天皇～村上天皇の時期の朱雀院推定復元図(図5)として「朱雀院の考察」中に示されている。



天皇	元号（西曆）	日 付	内 容	文 献
仁明	承和三年 (836)	五月 癸亥	以平城京内空閑地二百卅町 奉充太皇太后朱雀院	『続日本後記』
	承和五年 (838)	十一月 甲申	嵯峨太皇太后御朱雀院。宴五位已上。 賜祿有差。	『続日本後記』
宇多	寛平八年 (896)	正月 廿五日 丁未	天皇幸朱雀院。覽諸工造作。	『日本紀略』
		十月 十三日 庚申	已剋。天皇幸朱雀院有小鷹之興。……	『日本紀略』
	寛平九年 (897)	五月 十七日 辛卯	天皇幸朱雀院。……	『日本紀略』
		九月 十日 壬午	後太上天皇於朱雀院喚詩人。令賦閑居寒秋水之詩。令権大納言 菅原朝臣作序。	『日本紀略』
醍醐	寛平十年 (898)	二月 十三日 癸丑	皇太后設宴於東院。太上天皇餞別之興也。上皇避位。御東院皇后 宮別寢。今月十七日。初欲移 御於朱雀院也。	『日本紀略』
	昌泰元年 (898)	四月 廿五日 甲子	中宮自五條宮遷御於朱雀院。	『日本紀略』
		九月 十日 丁丑	後太上天皇召文人於朱雀院。 令賦秋思入寒松詩。	『日本紀略』
		十月 廿日 丙辰	太上皇遊獵。……。上皇騎御馬。出自朱雀院。……	『日本紀略』
		閏十月 一日 丁辰	太上皇獵罷入京。遷御朱雀院。	『日本紀略』
	昌泰二年 (899)	正月 三日 丁酉	天皇朝覲太上皇於朱雀院。以入新年也。賦庭中梅花之詩	『日本紀略』
		三月 三日 丙申	太上皇賜詩宴於朱雀院柏梁殿。 令賦惜殘春之詩。右大臣作序。	『日本紀略』
		七月 七日	太上皇召文人於朱雀院。 令賦浮雲動別衣之詩。	『日本紀略』
		七月 卅日 辛酉	於朱雀院有相撲。	『日本紀略』
	延喜六年 (906)	十一月 七日	行幸朱雀院。法皇院司中納言源貞恒以下加爵。 依御賀之慶也。	『日本紀略』
	延喜十年 (910)	十一月 七日	天皇、依法皇御賀、幸朱雀院、宴畢間、法皇、令仲平朝臣脱横被奉、 今上、拜舞後遷宮。	『西宮記』
	延喜十六年 (916)	三月 七日 辛酉	辰時。天皇幸朱雀院。奉賀太上法皇五十算。 諸司獻物。童親王。及五位以上子為舞人。	『日本紀略』
		九月 廿七日 庚辰	天皇幸朱雀院。有競馬事。召諸儒文章生命宴席。 題云。木落洞庭波。有擬文章生試。題云。高風送秋。	『日本紀略』
	延喜十七年 (917)	九月 九日 乙卯	……。天皇幸朱雀院。命詩宴。題云。林池秋景。	『日本紀略』
	延喜十八年 (918)	十月 八日	幸朱雀院、至馬埦云、次移栢殿云々。王卿下殿、持右京職贊侍從 太夫職官同持之。立庭中、覽了召膳部下給云々、左右衛門官人率 門部、令昇納參入令取前池魚、於御前調候云々、了雅樂池上奏音 聲云々、	『西宮記』

表 1 朱雀院沿革（1）

天皇	元号(西曆)	日 付	内 容	文 献
醍醐	延長二年 (924)	十月 廿一日	天皇幸朱雀院。覽競馬。泛舟池中。奏音樂。	『日本紀略』
	延長五年 (927)	八月 卅日 戊申	行幸朱雀院、御覽信濃駒、其儀如例、令馳御覽、	『貞信公記抄』
	延長六年 (928)	十一月 廿一日	朱雀院行幸御栢殿、先是按察大納言奏、令放御鵜太池、乘輿過池邊、鵜人寄舟池濱、以太毛盛魚令覽云々	『柱史抄』
朱雀	天慶八年 (945)	二月 廿九日	藏人遠規蒙仰事云、朱雀院申造院米、以院返抄、……	『貞信公記抄』
村上	天慶九年 (946)	七月 十日 戊戌	戌刻。太上皇太皇太后出禁中。遷御朱雀院。出禁中。假御主殿寮。	『日本紀略』
		八月 十七日 乙亥	天皇幸朱雀院。謁上皇。	『日本紀略』
		八月 廿七日	右大臣參入朱雀院、上皇御池舟、有管絃興、祿侍臣云々	『貞信公記抄』
	天曆元年 (947)	正月 一日 戊子	王卿參太上天皇朱雀院栢梁殿。拜禮。……。今夜。於仁壽殿有太 后太饗。	『日本紀略』
		正月 四日	行幸朱雀院、朝太后於栢殿、而後太上皇謁於寢殿	『貞信公記抄』
		三月 九日 甲午	天皇幸朱雀院。謁見太后上皇。有絃歌御遊	『日本紀略』
		三月 十五日 庚子	天皇幸朱雀院。	『日本紀略』
		三月 十六日 辛丑	太皇太后於朱雀院栢梁殿始修八講。	『日本紀略』
		四月 十四日 己巳	皇太后重病惱給。仍今日。天皇可朱雀院。然而依無殊事延引。	『日本紀略』
		四月 十五日 庚午	天皇幸朱雀院。依太后病惱也。皇輦出宮之間。雨脚不休。入夜遷宮。	『日本紀略』
		五月 九日 癸巳	……。此日。上皇於朱雀院馬場召左右近衛。令騎射。又覽競馬。 右大臣始着宣陽殿。	『日本紀略』
		十一月 廿八日 戊寅	天皇幸朱雀院。	『日本紀略』
	天曆二年 (948)	正月 二日 壬子	於朱雀院儲太后大饗。	『日本紀略』
		正月 三日 癸丑	天皇幸朱雀院。先拜太后。次謁太上天皇。	『日本紀略』
		三月 九日 戊午	天皇幸朱雀院。謁見太后上皇。有御遊。奏音樂。 公卿已下賜祿有差。	『日本紀略』
		五月 廿五日 癸酉	……。昨夜。朱雀院西對南又廂一間無故破壞。 是中宮御在所也。	『日本紀略』
		六月 七日 甲申	……。是日。日二見。又朱雀院南池中見如龍頭物。	『日本紀略』
		八月 十七日 癸巳	幸朱雀院。	『日本紀略』

表 2 朱雀院沿革 (2)

天皇	元号(西暦)	日 付	内 容	文 献
村上	天曆三年 (949)	三月 七日 庚戌	朱雀院有歌舞。可有行幸之故也。	『日本紀略』
		四月 十二日 乙酉	……。今日。太上皇幸朱雀院。仰御厩司。 取分御馬。為來月競馬所分預也。	『日本紀略』
		五月 廿日 癸亥	太上皇於朱雀院馬埦亭觀競馬十番。騎射。左右奏東遊。	『日本紀略』
		十一月 廿五日 甲子	明日。中宮可遷御朱雀院。仍召仰諸司。是日。 於朱雀院島町以僧廿口令轉讀仁王經。	『日本紀略』
	天曆四年 (950)	十月 十五日	朱雀院失火、嶋町雜舍悉燒亡、	『園太曆』
	天曆五年 (951)	正月 四日 丙寅	行幸朱雀院。	『近衛家文書』
	天曆六年 (952)	三月 廿九日	中納言藤原師尹卿宣、史生美努眞香、來月許宜令候朱雀院御經所、 但准見仕給上。	『類聚符宣抄』
	天德三年 (959)	正月 三日 己酉	皇太子朱雀院參。拜觀中宮。中宮大饗。	『日本紀略』
	応和三年 (963)	五月 十四日 乙丑	天皇幸朱雀院。有競馬事。號小五月節代。後朝臣召舞人尾張安居。 茨田助平。給勅祿。	『日本紀略』
	康保二年 (965)	五月 十四日 癸巳	行幸朱雀院。有競馬騎射事。左右近衛射者各十八人。着打懸。 帶刀四人着小松摺衫。	『日本紀略』
		十月 廿三日 己未	天皇御朱雀院柏梁殿。皇太子侍焉。馳左右御馬。召文人卅人。獻詩。 題云。霜葉滿林紅。召擬文章生於池頭奉試。題云。飛葉共舟輕。 親王大臣以下。給祿有差。	『日本紀略』
圓融	天祿元年 (970)	四月 二日 壬申	……。今日。夜半。冷然院燒亡。太上天皇遷御朱雀院。	『日本紀略』
花山	永觀二年 (984)	十月 五日 辛巳	依召參殿、即參院、院為御覽朱雀院渡御之、……。 先御寢殿、此間左大臣參入、次御柏殿、……。、	『小右記』
後一条	長元元年 (1028)	八月 十九日 辛巳	……。午後與中將同車見、穀倉院、……。、 續見朱雀院、頗加修造、保相朝臣之勤云々、	『小右記』
	長元九年 (1036)	三月 十六日 乙未	舞人着朱雀院。使等參内。着弓場殿。	『日本紀略』
白河	承暦三年 (1079)	四月 三日 辛丑	晴、今日於朱雀院可被走馬足等是來十三可有賀茂競馬之故也、	『水左記』
高倉	治承元年 (1177)	正月 卅日	朱雀院鎮守石神明神燒亡	『百練抄』
土御門	元久二年 (1205)	閏七月 六日	朱雀院築築垣、可為御遊獵之地、神泉無便宜之由、始有沙汰云々。	『明月記』

表 3 朱雀院沿革 (3)

第3節 周辺の調査

朱雀院推定敷地内において、実際の発掘調査事例は少ない。まず、1974年の四条一坊六町内で、朱雀院推定敷地内の南東やや中央よりに位置する地点での発掘調査においては2もしくは3棟⁹⁾の建物跡が検出している。柱穴底部には木材の礎板が置かれており、柱穴掘形も大半が1.0m以上のものである。これらの建物は10世紀の厩舎跡と推定されている。先の推定復元図や『日本紀略』醍醐天皇延喜一六（916）年九月条「廿八日庚辰。天皇幸朱雀院。有競馬事。……」が朱雀院における馬に関する記述の初見であるからとしている⁹⁾。しかし、礎板に使われた木材や瓦が平城京もしくは長岡京から運ばれたことが推定できるとし、橘嘉智子（檀林皇后）時の朱雀院と関連する可能性を指摘している¹⁰⁾。

1997年の四条一坊一町内で、朱雀院推定敷地内の北東やや中央よりに位置する地点での発掘調査では、平安時代前期の建物跡が6棟、柵列が1条、溝が2条、門跡が1棟、西坊城小路西側溝、東側溝などが検出されている¹¹⁾。建物跡の柱穴には根固めの石が入られているものがある。

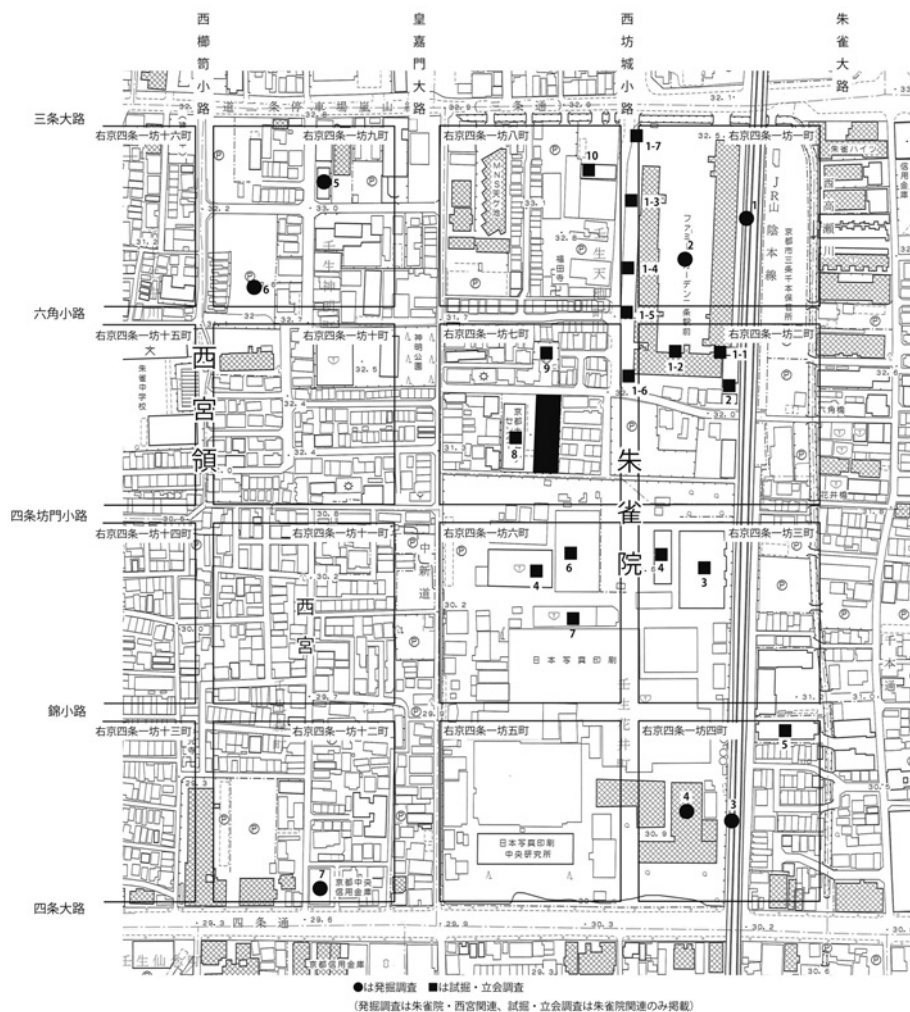


図6 周辺調査（1：5000）

その他の発掘調査や試掘調査では平安時代の遺構はほとんど確認されていないが、その中で2012年の四条一坊七町内の試掘調査¹²⁾では園池の可能性のある東西に走る幅約5.7mの溝状遺構を検出している。遺物は9世紀後半から10世紀初頭に属するものであり、溝状遺構は10世紀初頭に埋められた可能性が高いようである。したがって溝状遺構は嵯峨上皇の造営時に成立し、宇多天皇時に埋められたものと推測されている。

番号	条 坊	所 在 地	調 査 概 要	参 考 文 献
1	四条一坊一町	中京区壬生天池町 J R 軌道内	平安時代後期の湿地最下層の溜りと考えられる土坑1基を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1995年
2	四条一坊一町	中京区壬生天池町 1	平安時代前期の朱雀院に関連する建物6棟、柵列1条、溝1条、門跡1棟、西坊城小路西側溝、東側溝、地鎮遺構1基を検出。	関西文化財調査会 「発掘調査終了届」1997年
3	四条一坊四町	中京区壬生花井町	平安時代の遺構は検出されず。 室町時代の柱穴1基、溝1条を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-18 平安京跡・御土居跡』 「平安京右京四条一坊四(朱雀院)跡」2006年
4	四条一坊四町	中京区壬生花井町	平安時代前期の建物2棟を検出。	平安京調査会『平安京研究 No.1』1974年 位置は鈴木久男「一九七八年発見の朱雀院跡掘立柱建物」西山良平 藤田勝也編 『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会 2012年
5	四条一坊九町	中京区壬生神明町 1-7	平安時代前期の柱穴3基を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 2011年
6	四条一坊九町	中京区壬生神明町 1-48 他	平安時代前期の建物1棟、室町時代の土坑群3基、溝状遺構1条、江戸時代の建物2棟を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-08 平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡』 2012年
7	四条一坊一二町	中京区壬生森町 26-8	平安時代から中世の池の堆積、その他中世から近世の井戸1基、土坑3基、溝2条を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 2011年

表4 周辺発掘調査地

番号	条 坊	所 在 地	調 査 概 要	参 考 文 献
1	四条一坊一町・ 二町・七町・ 八町	中京区壬生天池町	(試掘) 1-3～1-5, 1-7 平安時代の遺構面を確認。1-5 にて平安時代前期のピット、土壌、溝を検出。1-7 にて中世から近世にかけての土壌あるいは井戸、溝状遺構、杭列を確認。1-2、1-6 にて近世の池を検出。	(財)京都市埋蔵文化財研究所 『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1997年
2	四条一坊二町	中京区壬生天池町 1-5	(立会) GL-0.72m にて江戸の包含層。	京都市文化観光局 『昭和62年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』1988年
3	四条一坊三町	中京区壬生花井町 3	(試掘) GL-0.8m にて江戸の包含層。	京都市文化観光局 『昭和60年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』1986年
4	四条一坊三町・ 六町	中京区壬生花井町 3	(試掘) A区 GL-1.1m の地山で近世の土壌、溝などを検出。B区 GL-1.17m 以下池状堆積。	京都市文化観光局 『平成3年度 京都市内遺跡試掘調査概報』 1992年
5	四条一坊四町	中京区壬生花井町 15、16-2	(試掘) GL-0.75 にて室町後期の土壌。	京都市文化観光局 『昭和60年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』1986年
6	四条一坊六町	中京区壬生花井町 3	(試掘) 設計 GL-1.3m 以下で湿地状堆積。 設計 GL-1.6m 以下で砂礫地山。	京都市文化市民局 『平成11年度 京都市内遺跡試掘調査概報』 2000年
7	四条一坊六町	中京区壬生花井町 3	(試掘) 1T: GL-1.2m で時期不明の南北溝・井戸状遺構を検出。2T: GL-1.2m、 近世の池状遺構。	京都市文化市民局 『平成7年度 京都市内遺跡試掘調査概報』 1996年
8	四条一坊七町	中京区壬生天池町	(試掘) GL-1.2m で平安時代と思われる整地層。	京都市文化市民局 『平成18年度 京都市内遺跡試掘調査報告』 2007年
9	四条一坊七町	中京区壬生天池町	(試掘) 平安時代前期の溝状遺構 1 状を検出。	京都市文化市民局 『平成24年度 京都市内遺跡試掘調査報告』 2013年
10	四条一坊八町	中京区壬生天池町 35-1	(立会) №1 GL-0.8m 以下で時期不明の 流れ堆積。№2 GL-0.67m にて時期不明 の土壌 1。	京都市文化観光局 『昭和61年度 京都市内遺跡試掘立会調査概報』1987年

表5 周辺試掘・立会調査地

註

- 1) 久世康博「『平安京』域の‘水’関係堆積の分布」『古代文化』第61巻第1号 (財)古代学協会 2009年
- 2) 京都市文化市民局『京都市遺跡地図台帳【第8版】』2007年
- 3) 山田邦和「右京全町の概要」(財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店 1994年
- 4) 太田静六「朱雀院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987年
- 5) 註4に同じ
- 6) 註4に同じ
- 7) 註4に同じ
- 8) 永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究№1』平安京調査会 1974年
- 9) 井上満郎「朱雀院について」『平安京研究№1』平安京調査会 1974年
- 10) 田辺昭三「朱雀院跡発掘調査の成果について」『平安京研究№1』平安京調査会 1974年
- 11) 吉川義彦『発掘調査終了届』関西文化財調査会 1997年
- 12) 鈴木久史「平安京四条一坊七町跡」『京都市内試掘調査報告』京都市文化市民局 2013年

第3章 調査の方法

試掘調査の結果により調査地は、老人健康福祉施設建設予定範囲の北側半分と決定した。重機掘削が終了した後、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、調査地内に GPS 測量により基準点を設置した。その後、調査地内を世界測地系 平面直角座標系 VI により 4 × 4m メッシュで地区割りし、東西を A ～ D、南北を 1 ～ 6 とした。北側拡張部分については調査終了後の遺構確認作業のみであったため地区割りはしていない。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所による平安京条坊復元モデル¹³⁾によると、調査地は、平安京右京四条一坊七町内の東二行北四門、東二行北五門の境界にも位置している。平安京右京四条一坊七町の MODEL60 は図 8 にて示す。

試掘調査の結果から、遺構は同一面ではほぼ検出でき、大型の柱穴をもつ建物跡の検出が予想されたため現地表面から遺構面直上までの重機掘削はせず、人力により掘削できる厚さで表土を残した。それから遺構面検出まで掘削した。掘削作業時の排土運搬はすべて人力にて行った。

検出した遺構は遺物や埋土により時期を確認しながら、時期ごとに掘り分けるように努め、また、整地層は層位や遺物の時期に注意しながら掘削した。遺構完掘後は適所を選び断割りして地山面であることの確認を行った。遺構以外の遺物は地区単位で取り上げた。調査地内の遺構全体平面図、壁面土層断面、整地層土層断面図はトータルステーション及び電子平板、写真計測により行い、遺構の平面図、土層断面図は適宜、遺方実測によった。

今回、土坑埋土から検出した種子は種実特定のため分析を実施、また、柱穴から検出した柱材は、当調査地内の建物跡に利用された木材を理解するため樹種同定を行った。その結果は後述する。

註

- 13) 辻純一「条坊制とその復元」
(財)古代学協会・古代学研究所編
『平安京提要』 角川書店 1994 年

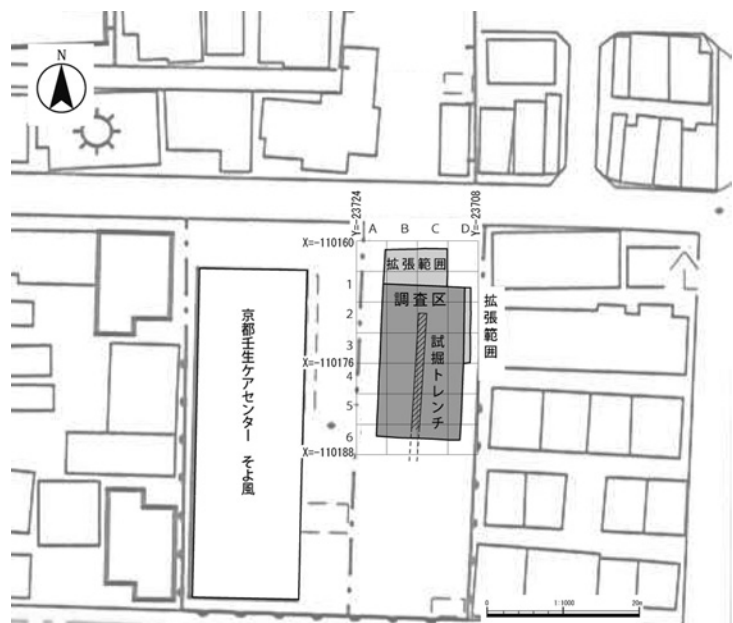
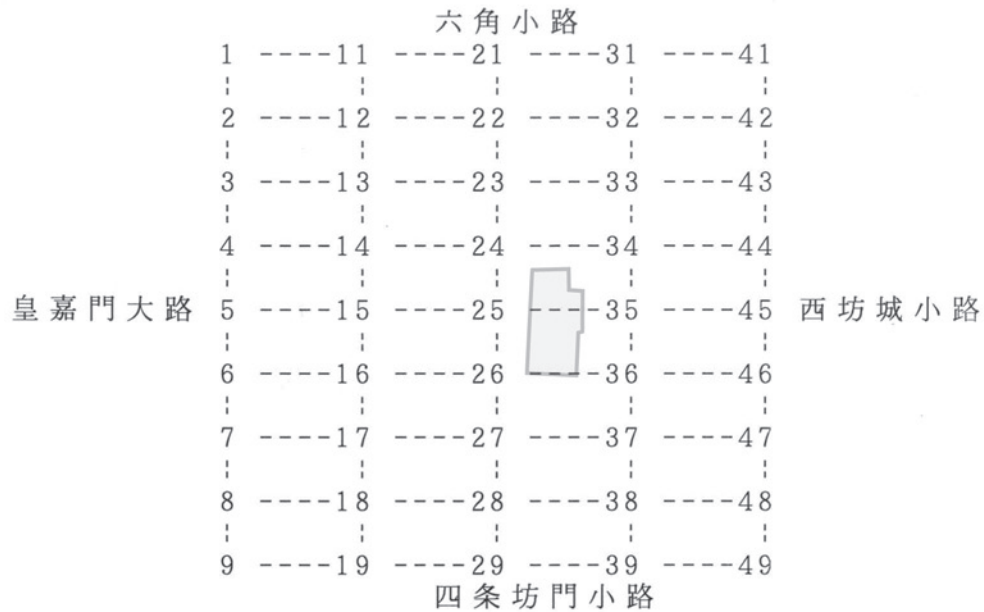


図7 調査地配置・地区割り図 (1 : 1000)

M O D E L 60
 造 営 尺 = 29.84708cm
 造 営 の 振 れ = - 0°14'03''
 原 点 X = -109441.34m
 原 点 Y = - 23498.40m
 座 標 値 は 世 界 測 地 系 (新 測 地 系)
 X, Y は 朱 雀 の 中 心 と 二 条 南 築 地 の 中 心



1.X=-110111.11m 11.X=-110110.99m 21.X=-110110.86m 31.X=-110110.74m 41.X=-110110.62m
 Y= -23788.17m Y= -23758.32m Y= -23728.47m Y= -23698.63m Y= -23668.78m
 2.X=-110126.03m 12.X=-110125.91m 22.X=-110125.79m 32.X=-110125.66m 42.X=-110125.54m
 Y= -23788.11m Y= -23758.26m Y= -23728.41m Y= -23698.57m Y= -23668.72m
 3.X=-110140.95m 13.X=-110140.83m 23.X=-110140.71m 33.X=-110140.59m 43.X=-110140.47m
 Y= -23788.05m Y= -23758.20m Y= -23728.35m Y= -23698.51m Y= -23668.66m
 4.X=-110155.88m 14.X=-110155.76m 24.X=-110155.63m 34.X=-110155.51m 44.X=-110155.39m
 Y= -23787.98m Y= -23758.14m Y= -23728.29m Y= -23698.44m Y= -23668.60m
 5.X=-110170.80m 15.X=-110170.68m 25.X=-110170.56m 35.X=-110170.44m 45.X=-110170.31m
 Y= -23787.92m Y= -23758.08m Y= -23728.23m Y= -23698.38m Y= -23668.54m
 6.X=-110185.72m 16.X=-110185.60m 26.X=-110185.48m 36.X=-110185.36m 46.X=-110185.24m
 Y= -23787.86m Y= -23758.02m Y= -23728.17m Y= -23698.32m Y= -23668.48m
 7.X=-110200.65m 17.X=-110200.53m 27.X=-110200.40m 37.X=-110200.28m 47.X=-110200.16m
 Y= -23787.80m Y= -23757.95m Y= -23728.11m Y= -23698.26m Y= -23668.41m
 8.X=-110215.57m 18.X=-110215.45m 28.X=-110215.33m 38.X=-110215.21m 48.X=-110215.08m
 Y= -23787.74m Y= -23757.89m Y= -23728.05m Y= -23698.20m Y= -23668.35m
 9.X=-110230.49m 19.X=-110230.37m 29.X=-110230.25m 39.X=-110230.13m 49.X=-110230.01m
 Y= -23787.68m Y= -23757.83m Y= -23727.99m Y= -23698.14m Y= -23668.29m

図 8 四 条 一 坊 七 町 と 座 標

第4章 遺構

第1節 基本層序

調査地の基本層序は北側で現代整地層、近世から現代の耕作土層、地山層、南側で現代整地層、近世から現代の耕作土層、平安時代整地層、地山層となる。地山層は扇状地を形成する青灰色の砂礫層と黄灰色と青灰色のシルト層からなる。

調査前の標高は 32.00m 前後で、最近まで駐車場として利用されていた現代整地層が 0.8 ～ 1.2m ある。この整地層にはアスファルトやコンクリートを多く含み調査地全体に広がる。

その下層の耕作土層は 0.4m 程あり、黒褐色土の畝がよく残る。朱雀院廃絶後は平安京右京の他の地域同様に敷地内は耕作地化したと考えられ、全体的に大きく削平され、平坦にされている。近世の陶器や磁器、現代の磁器やガラス製品、金属製品を含むが、平安時代の土師器や須恵器なども多く含んでいる。下層の平安時代整地層を耕作時に巻き込んだためと考えられる。その後は、現代まで耕作地となっていたとみられる。

遺構面は北側で地山層、南側で平安時代整地層となり、調査地全体で 30.80m 前後となる。この面で、平安時代前期の遺構、中世の遺構、近世から現代の遺構を検出した。整地層は検出面で床土と混ざった可能性のある層を上層とし、その下層で北側部分では炭を多く含む黒褐色土が調査地東西に溝状に広がる。それに切られる形で南側に整地層が続き、これを下層とした（図 24）。平安時代整地層下層の地山面は 30.68 ～ 30.50m で中央付近から南東が高く、東西に低くなり窪み状になっている。東壁の一部・西壁・南壁土層断面の最下層には水性の黒色土が薄く堆積していた。

第2節 遺構

検出した遺構は、近世から現代の耕作溝、中世の土坑・溝、平安時代の掘立柱建物である。遺構は耕作土掘削後の北側は地山面、南側は平安時代整地層の上面でほぼ検出できたため、ここでは時期ごとに記述する。また、同一平面上で遺構を検出したため、平面図は全体を 1 とし、平安時代前期以前を 1-1、平安時代前期を 1-2、中世を 1-3、近世から現代を 1-4 として図示した。

時 代	遺 構	備 考
現代	溝 37 条	耕作に伴う畝溝
中世～近世	土坑 2 基、溝 2 条	耕作に伴う水路
平安時代前期	掘立柱建物 1 基	梁行 3 間×桁行 3 間以上、東西棟南庇付

表 6 遺構一覧表

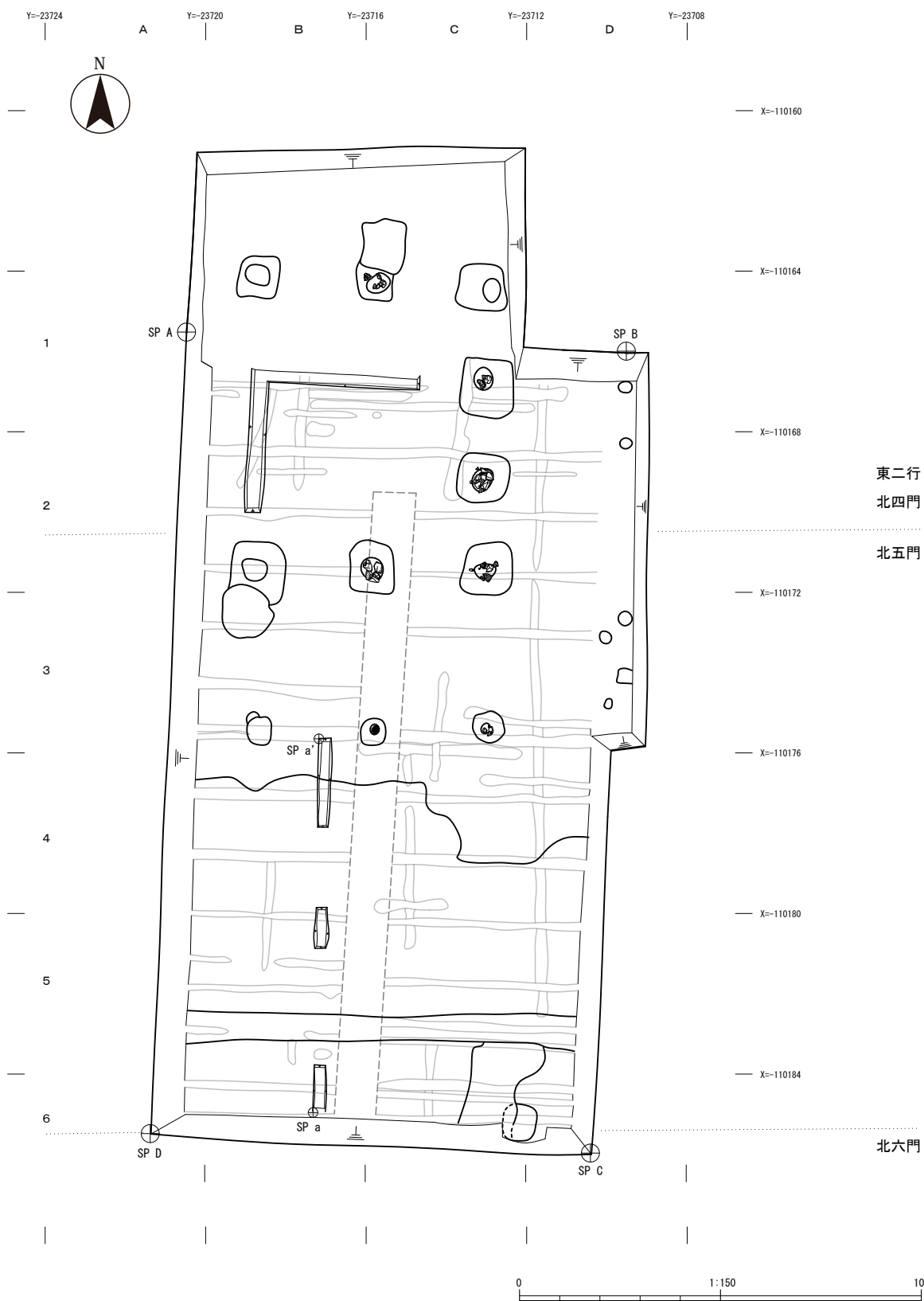


図9 調査地土層断面 SP 位置図



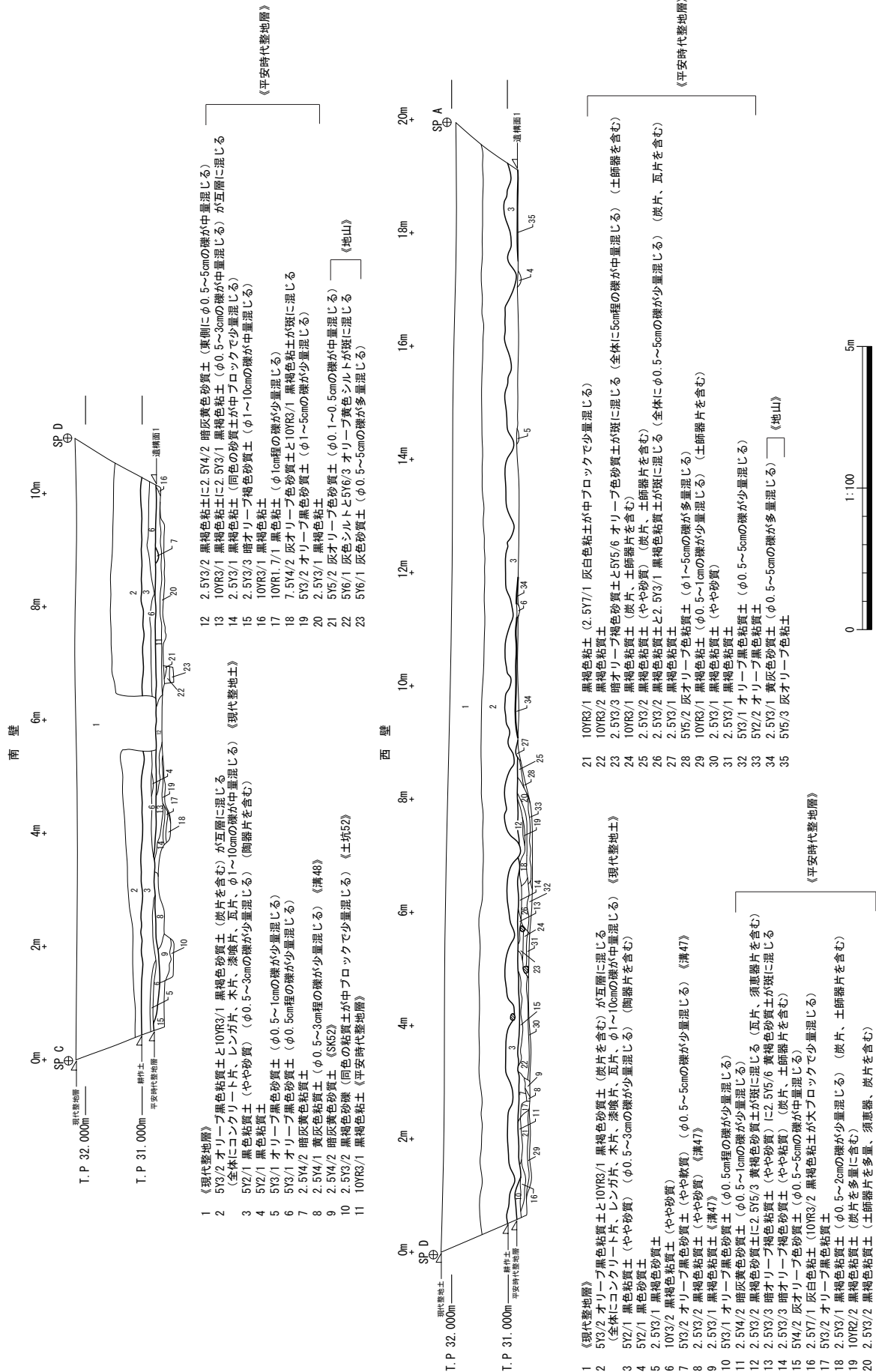


図 11 調査地南・西壁土層断面図

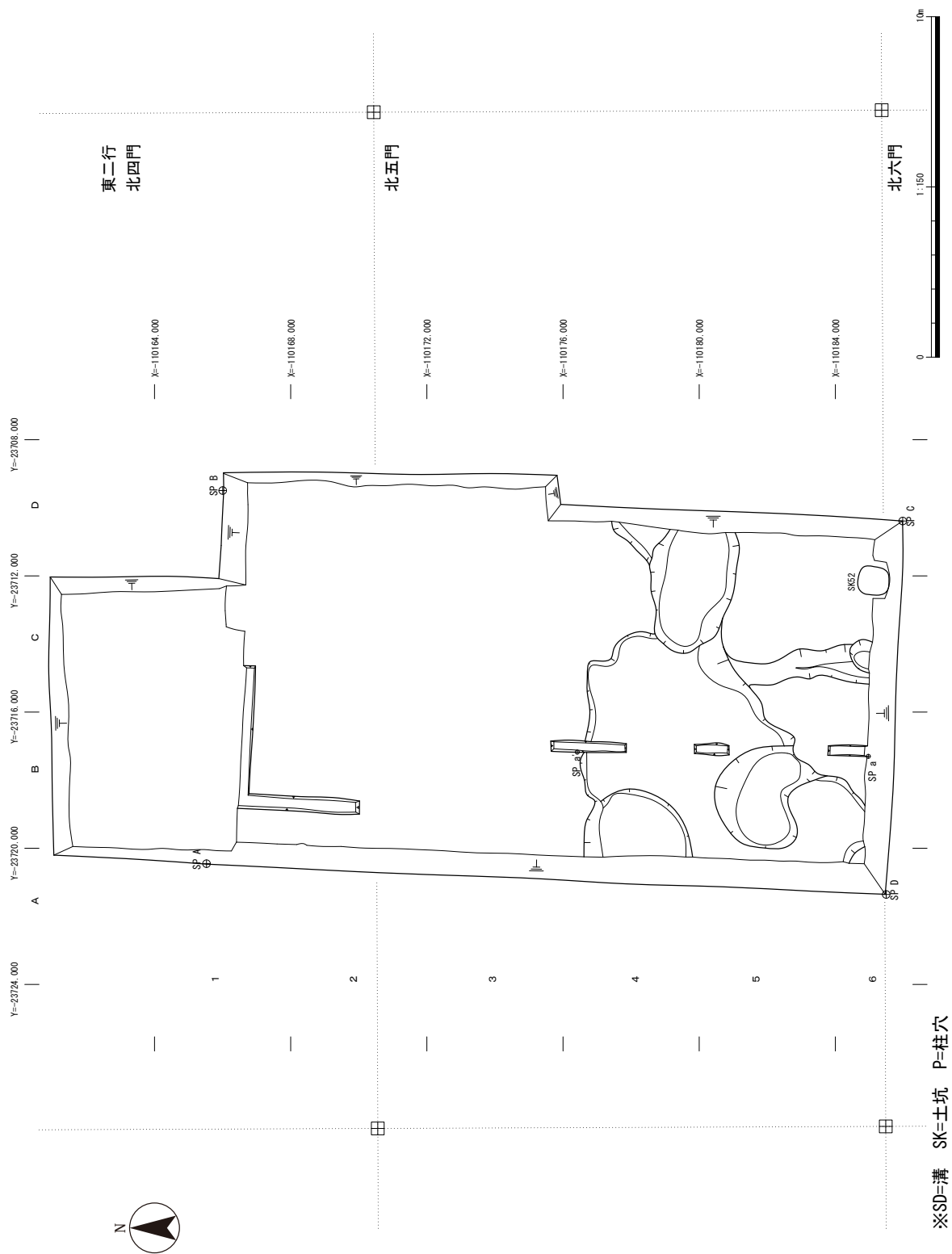


図 12 1-1 平安時代前期以前遺構平面図

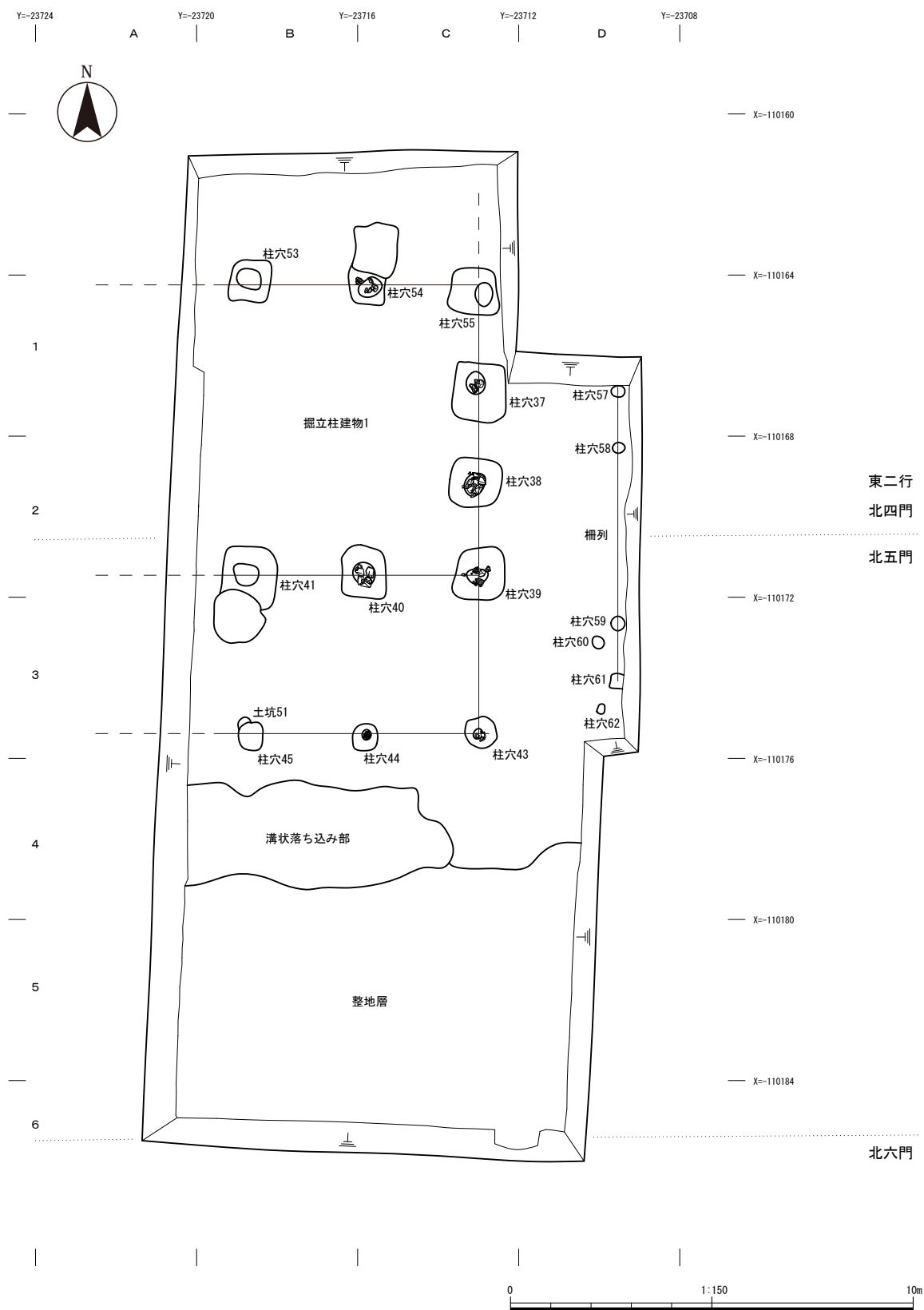


図13 1-2 朱雀院（平安時代前期）遺構平面図

1. 平安時代前期以前の遺構

平安時代前期以前の遺構は建物跡等の人為的なものではなく、調査地南側の整地層掘削後、自然地形として湿地 1 のみがある。

湿地 1（図 12） 調査区南側の B・C・D，4・5・6 地区で整地層掘削後、西壁及び南壁の最下層と、東壁の一部には堆水していたとみられる黒色の粘質土が薄く堆積していた。また、東南にはは島状に地形が残り、その周囲には水の対流でできた窪みが残る。そのため、平安時代前期の整地以前は水があったと考えられ、湿地であったと判断した。

2. 平安時代前期の遺構

平安時代前期の遺構には、平安時代前期の大型の掘立柱建物跡と小型の柱穴がある。

掘立柱建物跡 1（図 13～15・図版 6～11） 調査区北側の B・C，1・2・3 地区と調査地北側の拡張区で検出した東西 3 間以上、南北 3 間の身舎で南側に 1 間の庇が付く東西棟の掘立柱建物跡である。調査開始時に検出したのは南東隅だけであったため、本調査終了後に調査地北側を拡張し、柱穴 53・柱穴 54・柱穴 55 を検出して東西棟であることは確認できたが、北側の庇の有無は拡張範囲外となるため確認できていない。東側に関しては隣地との境を考慮して拡張はせず未確認である。

	遺構番号	掘方 長軸×短軸 (m)	柱痕跡 長径×短径 (m)	深さ (m)	備考
身 舎	柱穴 37	1.40 × 1.22	0.60 × 0.40	0.28	長さ 0.25m の根固めの石 土師器・須恵器・柱材の破片有
	柱穴 38	1.20 × 1.12	0.60 × 0.46	0.22	長さ 0.12 ～ 0.28m の根固めの石 土師器・須恵器・柱材の破片有
	柱穴 39	1.28 × 1.26	0.54 × 0.40	0.20	長さ 0.14 ～ 0.22m の根固めの石 土師器有
	柱穴 40	1.30 × 1.03	0.60 × 0.54	0.30	長さ 0.12 ～ 0.28m の根固めの石 土師器・須恵器・柱材の破片有
	柱穴 41	1.50 (推定) × 1.20	0.64 × 0.40	0.50	柱穴 42 に切られる土師器・須恵器・瓦・柱材の破片 有
	柱穴 53	1.00 × 1.00	0.60 × 0.48	—	調査対象地外で、確認調査のため検出のみ
	柱穴 54	1.00 (推定) × 0.90	0.60 × 0.42	—	調査対象地外で、確認調査のため検出のみ 長さ 0.12 ～ 0.20m の根固めの石
	柱穴 55	1.20 × 1.15	0.58 × 0.42	—	調査対象地外で、確認調査のため検出のみ 土師器・須恵器・瓦有
庇	柱穴 43	0.76 × 0.74	0.32 × 2.40 (径は底の痕跡から)	0.40	長さ 0.12 ～ 0.20m の根固めの石 土師器・黒色土器 A 類・須恵器・瓦・緑釉陶器・ 灰釉陶器・柱材の破片有
	柱穴 44	0.60 × 0.55	0.28 × 0.20	0.26	土師器・須恵器・瓦・径 0.2m の柱根有
	柱穴 45	0.60 × 0.58	0.32 × 0.30 (径は底の痕跡から)	0.14	土師器・須恵器・瓦有

表 7 柱穴一覧表

身舎は東西 5.6m 以上で柱間は 2.7 ～ 2.9m、南北 7.0m で柱間は 2.3 ～ 2.5m で、南庇は身舎南側柱列との柱間は 4.0m である。建物の規模は不明なため建物身舎の東側柱穴列の柱心からみて 1 町の西側推定築地心まで約 44m、北側柱穴列の柱心からみて 1 町の北側推定築地心まで約 54m、南側柱穴列の柱心からみて 1 町の南側推定築地心まで約 59m となり、1 町の中心よりやや東北にずれて位置している。また身舎の南側柱穴列のすぐ北側には東二行北四門と東二行北五門の境があり、それに平行して柱穴は東西に並んでいる。

身舎を構成する柱穴は柱穴 37・柱穴 38・柱穴 39・柱穴 40・柱穴 41・柱穴 53・柱穴 54・柱穴 55 である。柱穴掘方は方形に近いものがほとんどで、検出面で長径 1.0 ～ 1.5m、短径 0.9 ～ 1.3m、深さ 0.2 ～ 0.5m である。柱痕跡は長径 0.54 ～ 0.60m、短径 0.40 ～ 0.54m である。掘方埋土の主体は赤みの強い黒褐色粘質土に灰黄褐色粘質土のブロックが混ざったものである。柱痕跡の埋土は掘方埋土とほぼ同様な土であり、痕跡が不明瞭であったため、一段下げて土層断面も確認しながら柱痕跡の平面形を検出した。柱材は抜き取られたと考えられ、柱穴 41 以外には 0.12 ～ 0.28m 程の根固めの石が残っていた。柱穴 39・柱穴 40・柱穴 41 の柱痕跡の下面には底部を整えたとみられる土が埋められており、掘削した柱穴は 30.48 ～ 30.62m の深さで柱が置かれていた。柱穴 37・38・40・41 には柱（ヒノキ材）の破片が出土している。遺物には土師器・須恵器・瓦があり、時期は 9 世紀前半、京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期新段階¹²⁾である。尚、柱穴 53・柱穴 54・柱穴 55 は調査対象地外の確認調査であるため検出のみである。

庇を構成する柱穴は柱穴 43・柱穴 44・柱穴 45 である。柱穴掘方は円形に近く、径約 0.75m と径約 0.6m で身舎の柱穴に比べると規模は小さいものである。深さ 0.14 ～ 0.4m である。柱穴 43 は根固めの石が残っていたが、柱は抜き取られたとみられる。柱穴 44 では径 0.2m で柱根（ヒノキ材）が残っており、平面径で確認した柱痕跡の短径に近い径であった。柱穴 45 の柱痕跡は、平面形では確認できなかったため、土層断面から柱は抜き取られたと判断した。完掘後の底に柱が置かれていたとみられる痕跡を確認した。掘方埋土は身舎を構成する柱穴 37 ～ 41 の埋土と比べてやや黒味があり遺物を多く含む。また、炭や小礫が比較的多く混ざったものであった。柱穴の深さは差異が大きく、30.40 ～ 30.64m で柱が置かれていた。遺物には土師器・須恵器・瓦があり、柱穴 43 には柱の破片がある。

整地層・溝状落込み（図 16・17・図版 8・9） 調査地南半から東西と南に調査地外に広がっている。整地層は後の耕地化に伴い上部は削平されていると考えられる。基本的に北から南に向かって埋めて整地していた。北西側の地山との境付近の下層は整地層の他の部分の土とは異なった様子であり、炭を多く含んだ土が東西に広がり、廃棄されたとみられる土器が多く出土した。土器集中部分は土層断面から溝状の落込みみであると判断した。溝状の落込みは、一旦北端の落込みを少し残し整地し、その後そこを埋める際に土器も廃棄したと考えられる。整地層・溝状落込み共に遺物は土師器・黒色土器 A 類・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦があり、時期は 9 世紀前半、京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期新段に属するものが主として出土している。

その他の遺構（図 13・図版 11） 他に、柱穴 45 に切られる土坑 51 がある。径は 0.35m 程の円形になると考えられ、深さは 0.05m である。

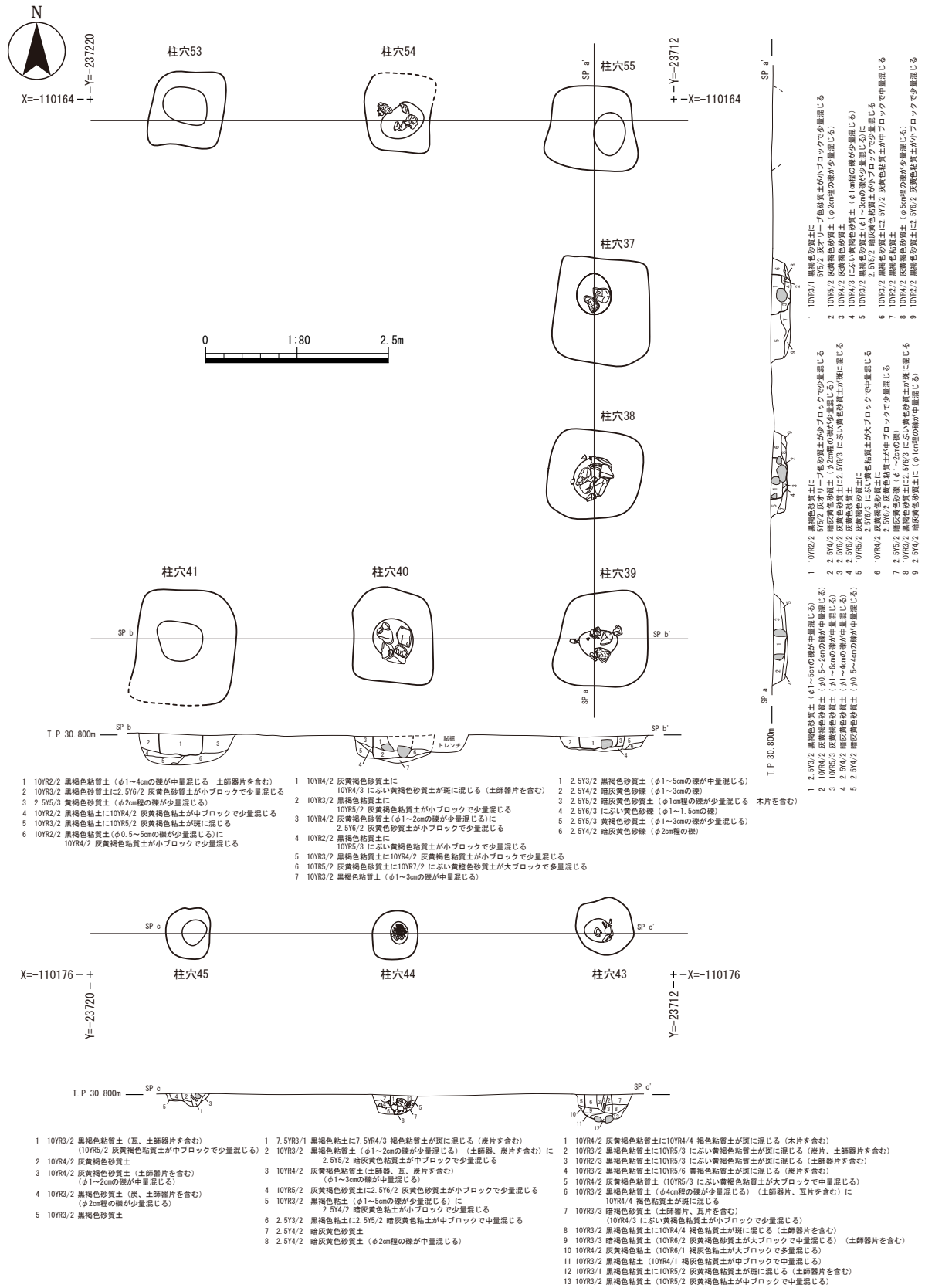


図 14 掘立柱建物跡 1 平面・土層断面図

東庇の有無を確認するために調査地東側を拡張したが、東庇となる柱穴はなく、柱穴列と小型の柱穴を検出した。柱穴列は北側に2基、南側に2基検出した。おそらく南北7.2m以上の柵になると考えられる。建物身舎の南北柱穴列の東約3.5mでほぼ平行する。径0.2～0.3m程の円形(柱穴57・柱穴58・柱穴59)と1辺0.35mとみられる方形(柱穴61)のものがあ、埋土は建物身舎の柱穴掘方埋土と同様のものである。他に、柱穴と考えられる60と62がある。

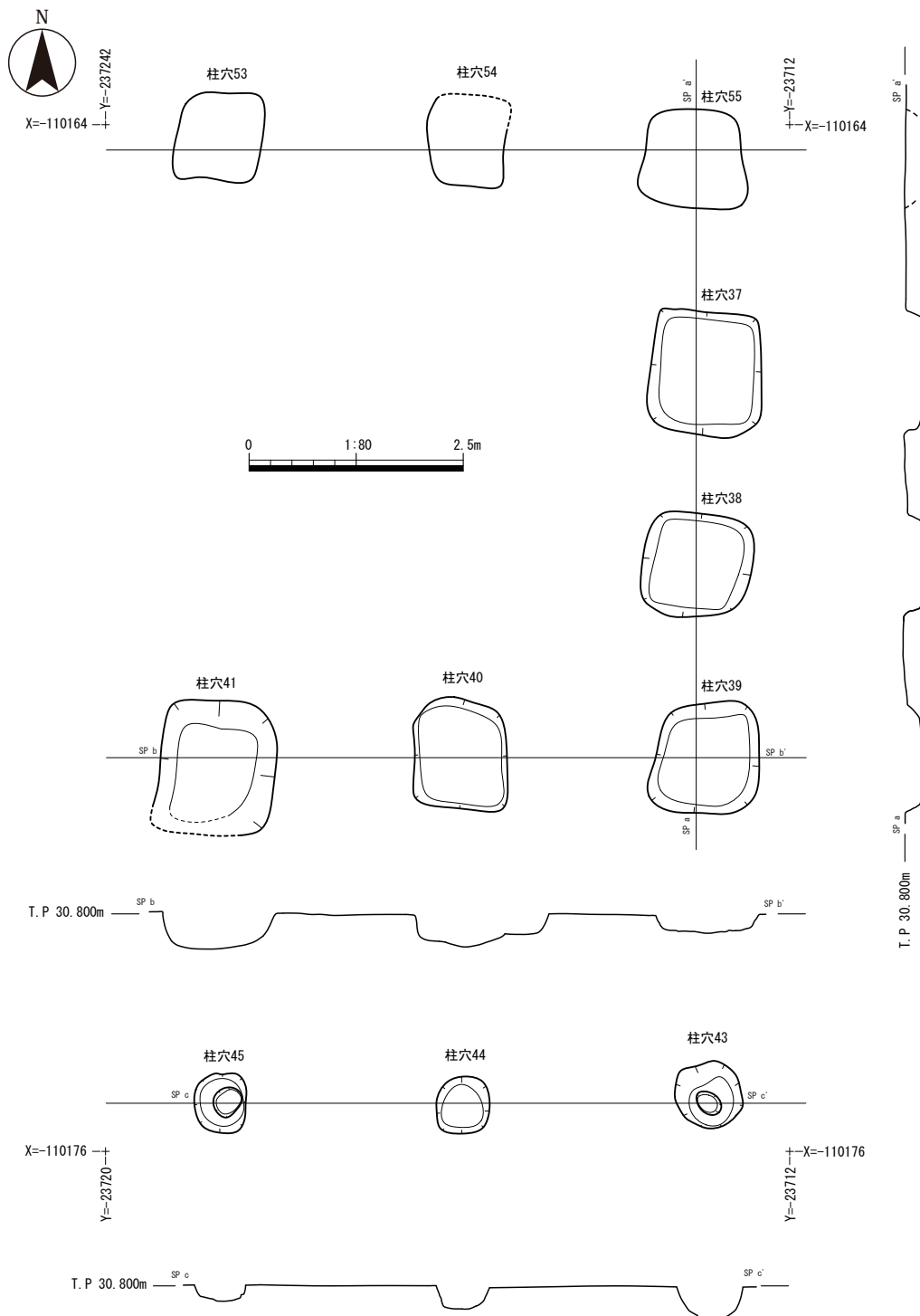


図 15 掘立柱建物跡 1 完掘平面・エレベーション図



- 1 2. 5Y3/2 黒褐色粘質土に7. 5YR4/4 褐色粘質土が斑に混じる
- 2 10YR2/2 黒褐色粘質土（炭片を多量に含む）
- 3 2. 5Y2/2 黒褐色粘質土に2. 5Y4/2 暗灰黄色粘質土が斑に混じる

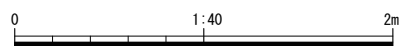


図 16 溝状落込み平面・土層断面図

3. 中世の遺構

中世の遺構には土坑・溝がある。いずれの遺構からも平安時代の土師器・須恵器が出土しているが、耕作過程で混ざっていたものが入り込んだと考えられる。

土坑 42 (図 18・19・図版 2・3) 調査地西側の B2 地区で検出した掘立柱建物跡 1 の柱穴 41 を切る土坑である。長径 1.36m、短径 1.28m、深さ 0.48m の不整形な楕円である。埋土は黒色粘質土が主体で、下層には植物の種子を含んでいた。この種子はイネ・ナス・ゴマなどの栽培植物及び落葉低木のサンショウやオヒシバ等の草木類であった。おそらく耕作地関連の廃棄土坑と考えられる。遺物は、土師器・須恵器・種子がある。

土坑 52 (図 18・20・図版 4) 調査地東側の C・D、6 地区で検出した土坑である。土坑の西側上部は溝 48 に切られる。長径 0.96m、短径 0.8m、深さ 0.18m の隅丸方形に近いものである。当初は溝 48 掘削後に現れた整地層と考えていたが、最終の整地層掘削時に南壁にて確認した。そのため、本調査終了後に南壁を一部拡張して全体を検出した。この土坑は整地層を切って造られている。性格は不明であるが耕作地関連のものと考えられる。遺物には土師器・須恵器・瓦がある。

土坑 56 (図 18・図版 10・11) 調査地北側拡張部分で検出した柱穴 54 を切る土坑である。確認調査のため掘削はしていないが長径 1.3m、短径 1.0m である。性格は不明であるが、埋土は土坑 52 と同様なものであった。

溝 47 (図 18・21・図版 5) 調査地南側の A・B・C・D、5 地区を東西に走る溝である。長さ 9.2m で調査地の東と西に延びる。幅 0.6～0.85m、深さ 0.13～0.2m で西壁付近では深くなる。東側の埋土は黒褐

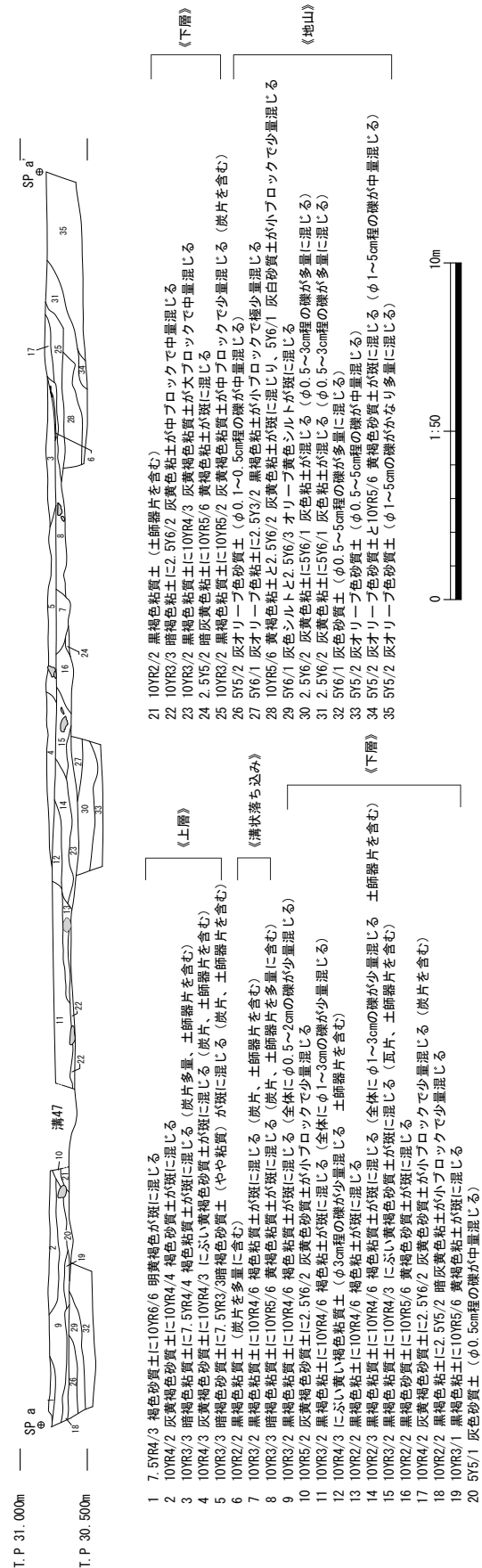


図 17 整地層土層断面図

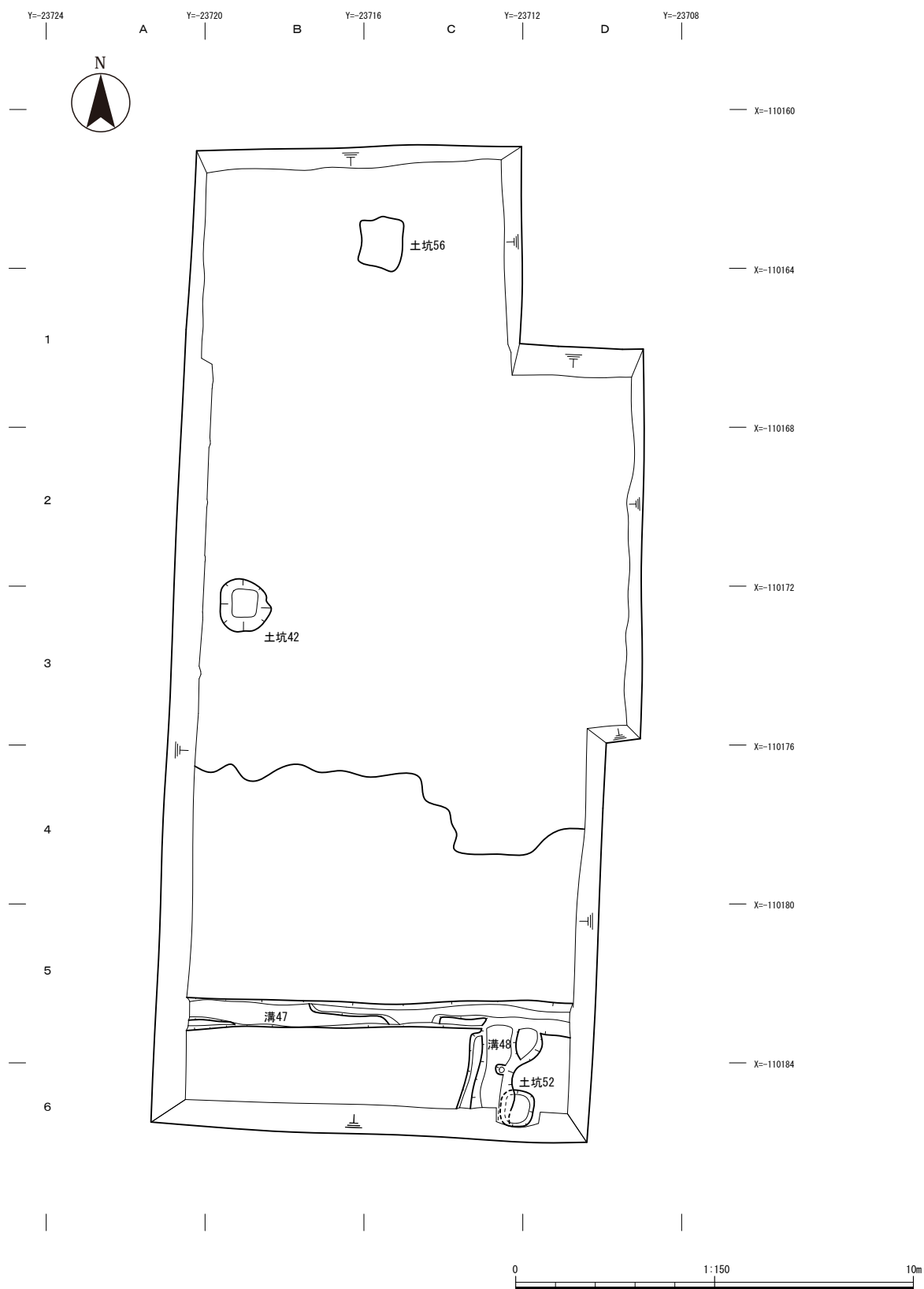


图 18 1-3 中世遺構平面图

色粘質土の単一層である。西側の土層の埋土は東側と同様な土であるが、東側に比べ深くなっているために溜りの様なものがあつたと考えられ、下層の埋土はやや赤みの強い黒褐色粘質土である。東西方向にほぼ直線に延びているため、灌漑用の水路と考えられる。遺物には平安時代の土師器・須恵器などがあるが、平安時代の整地層を掘り込んで造られているため、周辺のもので流れ込んだと考えられる。

溝 48 (図 18・21・図版 5) 調査地南側の C, 5・6 地区で検出した溝である。長さ 2.0m で調査地南側に延びる。幅は 1.2 ～ 1.6m、深さ 0.04 ～ 0.14m である。水が溢れたものか遺構の肩の輪郭は不整形である。埋土は黄灰色粘質土が主体で下層には礫を多く含んでいる。底は南北に直線に延びているため耕作地関連の溝で、北端は溝 47 に切られていた状態ではあるが、実際には取り付くものと考えられる。遺物には溝 47 同様に流れ込んだと考えられる平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器がある。

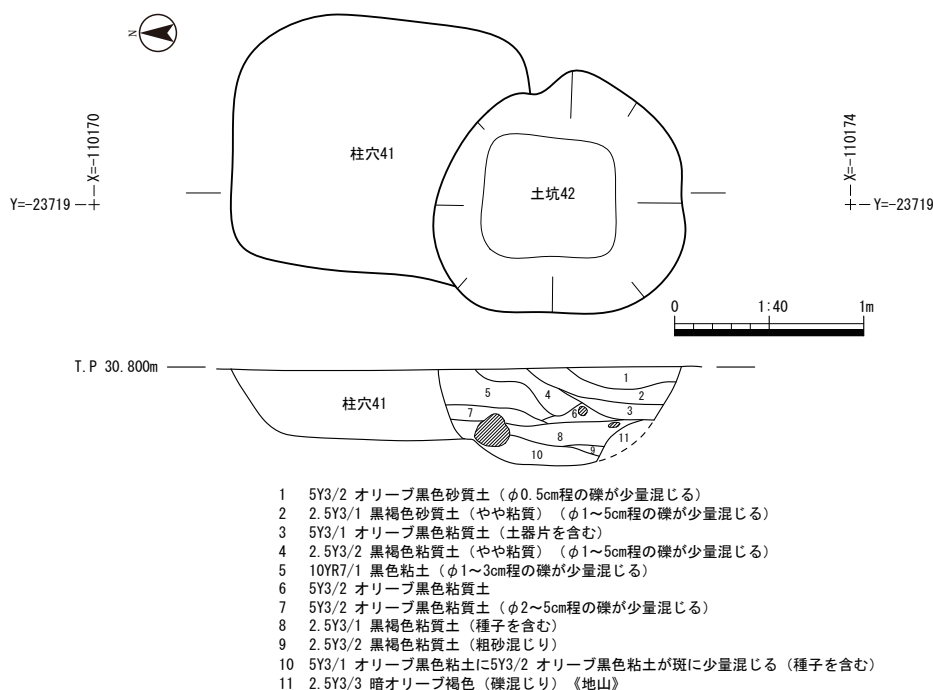


図 19 土坑 42 平面・土層断面図

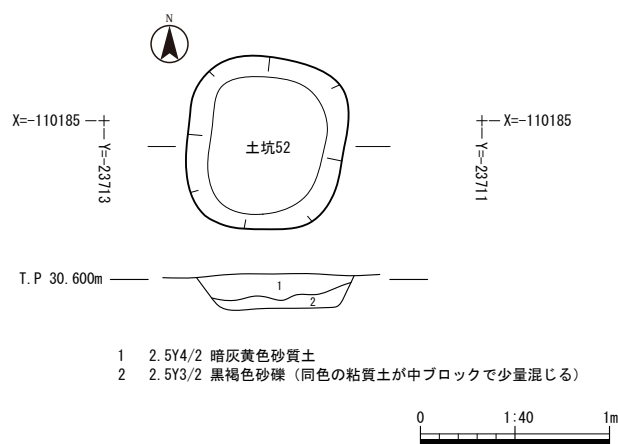


図 20 土坑 52 平面・土層断面図

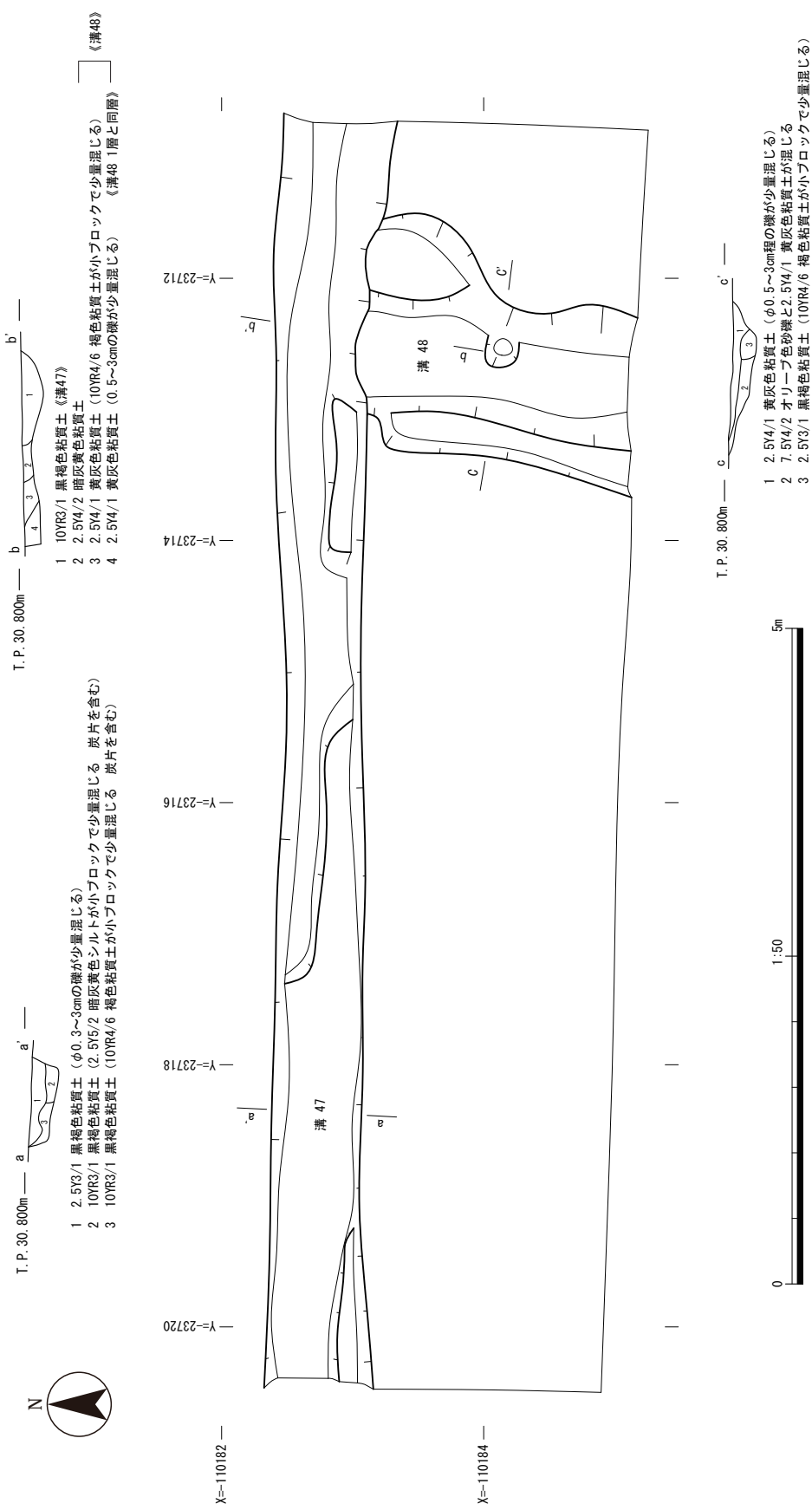


図 21 溝 47・48 平面・土層断面図

4. 近世から現代の遺構

耕作溝（図22・図版1・2） 近世から現代の遺構には耕作関連の溝がある。調査地内をほぼ1.1m間隔で東西に走るものとそれに合わせて28条、南北に9条ある。東西の耕作溝は幅0.1～0.3m程で、長さは1.6～9.7m程で大半が調査地の東と南に延びる。南北の耕作溝は幅0.18～0.3m程で北側の3条は調査地の北に延びる。埋土は黒褐色粘質土で耕作土と同様なものである。溝の時期は近世から現代である。遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品・ガラス製品・金属製品がある。土師器、須恵器は平安時代のものであり耕作による掘り返しの過程で混ざり込んだと考えられる。

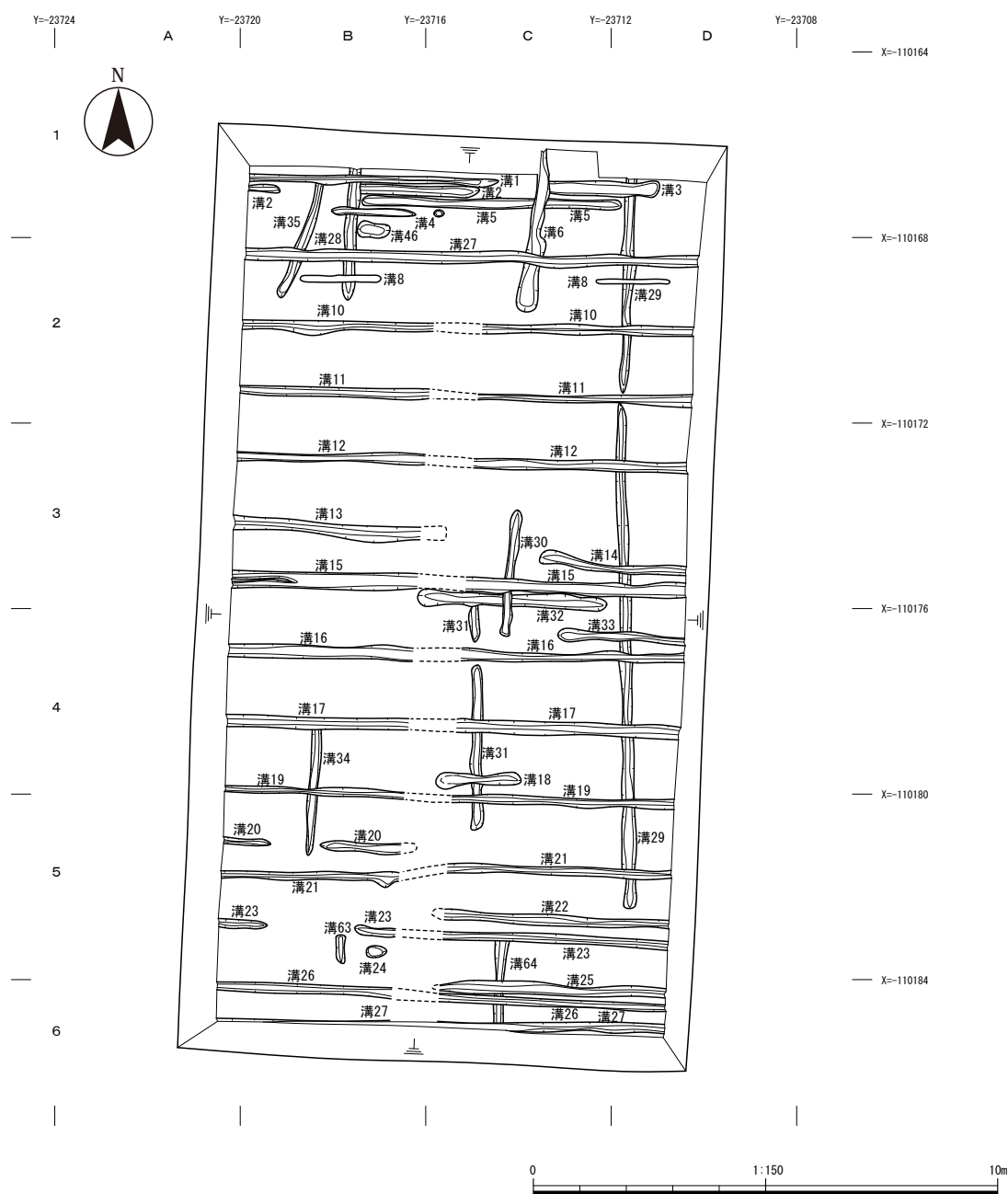


図22 1-4 近世から現代遺構平面図

第5章 遺物

今回出土した遺物はコンテナ総数 39 箱で、土器類・瓦類・土製品・木製品・ガラス製品・金属製品・植物種子が出土している。この内、土師器・瓦類以外は近世から現代の遺物である。中世の遺物は土師器・須恵器・磁器・植物種子がある。平安時代の遺物は土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・土製品がある。

遺物は平安時代の土器が中心で、9 世紀前半、土器編年では京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属するものが主として多く出土している。中には 9 世紀後半、京Ⅲ [京都Ⅱ] 期古～中段階に属するものも出土している。全体の割合的には整地層から出土したものが多くを占める。また、小破片が多く、土師器は表面が磨滅しているものが多かった。近世以降の遺物は耕作土及び耕作溝から出土したものであり、平安時代の遺物と近世・近代の遺物は混在するものであった。今回は調査地における建物跡と整地層の時期と関連、建物廃絶後の利用状況を示すため中世の遺物も図示した。その中には小破片のもので口径復元した土器も含まれる。

時 代	内 容	コンテナ 箱総数	A ランク点数	B ランク 箱数	C ランク 箱数
平安時代前期	土師器、黒色土器、須恵器、瓦、 緑釉陶器、灰釉陶器、木材	35 箱	土師器 111 点、黒色土器 7 点、須恵器 42 点、 緑釉陶器 12 点、灰釉陶器 8 点、瓦 22 点、 土製品 1 点 平安・中世総箱数 13 箱	15 箱	7 箱
中世	土師器、須恵器、輸入陶磁器		土師器 2 点、須恵器 1 点 輸入陶磁 1 点 平安・中世総箱数 13 箱		
近世～現代	陶器、磁器、土製品、ガラス製品、 金属製品	4 箱		2 箱	2 箱

表 8 出土遺物の概略表

第 1 節 平安時代の土器

1. 掘立柱建物跡 1 柱穴出土土器

柱穴 40 (図 23・図版 14) 1 は柱穴検出時に出土した。土師器杯で、体部外面から口縁部外面にかけてヘラケズリされるものである。口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。2・9 は掘方で出土した。2 は土師器杯で、体部外面はヘラケズリされる。口縁は外反し、端部は内側上方へ引き上げられる。9 は土師器杯もしくは皿の底部で、底部外面から体部外面はヘラケズリされる。3～8 は柱痕跡で出土した。いずれも土師器皿で底部外面から口縁外面にかけてヘラケズリされ、口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。5・6 は体部外面までヘラケズリされる。

柱穴 40 出土の土器は土師器碗・杯・皿、須恵器杯の小型食器類の破片がほとんどで、少数ながら土師器甕片も出土している。時期は京Ⅱ [京都Ⅰ] 期中～新段階に属するものが出土しており、京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属する土器が多数を占める。

柱穴 41 (図 23・図版 14) 10 は柱痕跡で出土した。土師器皿で、底部外面から体部外面にかけてヘラケズリされる。口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。

柱穴 41 出土の土器は柱穴 40 同様な出土傾向で、京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属するものが多数を占める。

柱穴 43 (図 23・図版 14) 12～15 は掘方で出土した。12～14 は土師器杯である。12・13 の体部外面はヘラケズリされており、12 のヘラケズリは口縁部外面にまで及び、口縁端部は内側上方に引き上げられる。13 の口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。14 の体部外面はナデ調整され、指押さえの痕跡を残す。15 は杯釉陶器皿で、施釉は内面のみで断面台形状の高台が付くもので、愛知県猿投山西南麓古窯跡群の黒笹 14 号窯形式に属するものである。11 は土師器杯で、体部外面はナデ調整されている。

柱穴 43 出土の土器は土師器の小型食器類が中心であるが、須恵器の他に黒色土器 A 類・緑釉陶器・灰釉陶器が混ざる。基本的には京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属するものが主体となるが、土師器の中には京Ⅲ [京都Ⅱ] 期古段階～中段階に属するものが出土している。

柱穴 44 (図 23・図版 15) 20 は一段下げ時に出土した。土師器皿で、体部外面はヘラケズリされる。16～19・21・22 は掘方で出土した。16～19 は土師器杯で、体部外面ヘラケズリされる。22 の口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。21 は須恵器鉢で口縁端部は外側に傾斜する面を持つ。

柱穴 44 出土の土器は土師器の小型食器類が多数を占め、高杯片や甕片、須恵器が少数混じる。時期は京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属する。

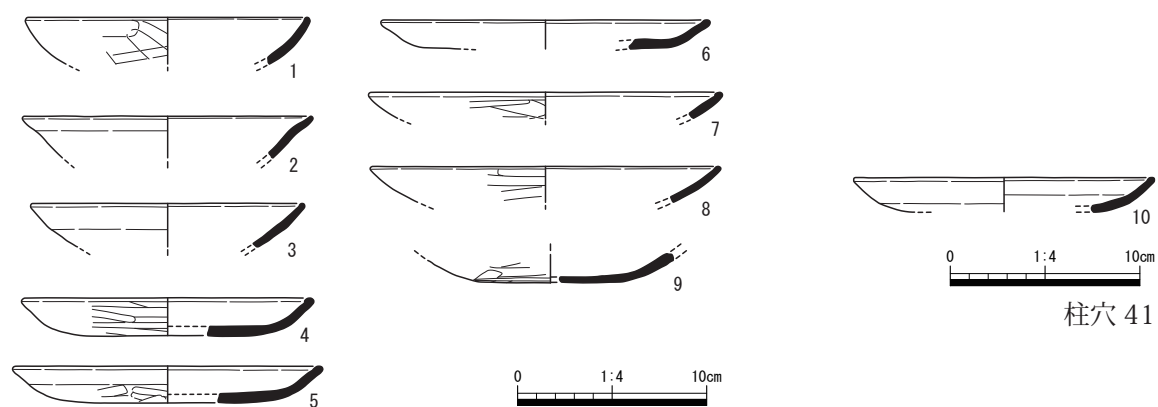
柱穴 45 (図 23・図版 12・15) 25 は一段下げ時に出土した。土師器杯で、体部外面はヘラケズリされる。口縁端部は内側上方に引き上げられる。23・24・26～31 は抜取痕跡で出土した。23 は土師器碗で体部外面はヘラケズリされる。26 は土師器杯で、体部外面はヘラケズリされ、口縁端部は内側に丸く収め肥厚する。また、立ち上がりの外面にナデ調整がみられるため高台の付く杯 B とみられる。26～30 は土師器皿で、27・28 は体部はナデ調整され、口縁部が屈曲するものである。29・30 は体部外面はヘラケズリされ、口縁端部は内側上方に引き上げられる。32 は須恵器皿で、体部は口縁端部にかけて外反して立ち上がる。

柱穴 45 出土の土器は他と同様に土師器の小型食器類を中心に甕片、須恵器片が少数混じる。京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属するものが多数出しているが、中には柱穴 43 同様に京Ⅲ [京都Ⅱ] 期古段階～中段階に属するものが出土している。また、土師器甕片に煤付着するものがあることから、煮沸に使用されたことが窺えるものも出土している。

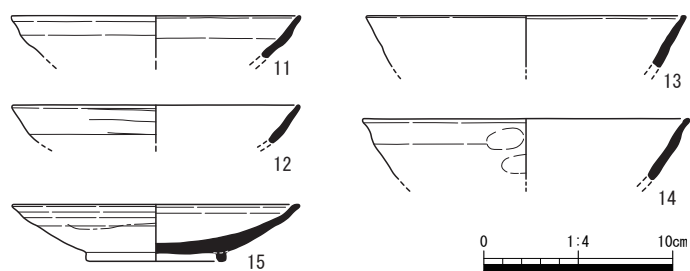
2. 整地層出土土器

整地層を上層・溝状の落込み・下層に分けて図示する。上層は検出面、整地層北側の溝状の落込みの上層と、南側の整地層の窪みに入った土とし、溝状の落込みはそのまま、それに切られる形になっている整地層を下層とした。

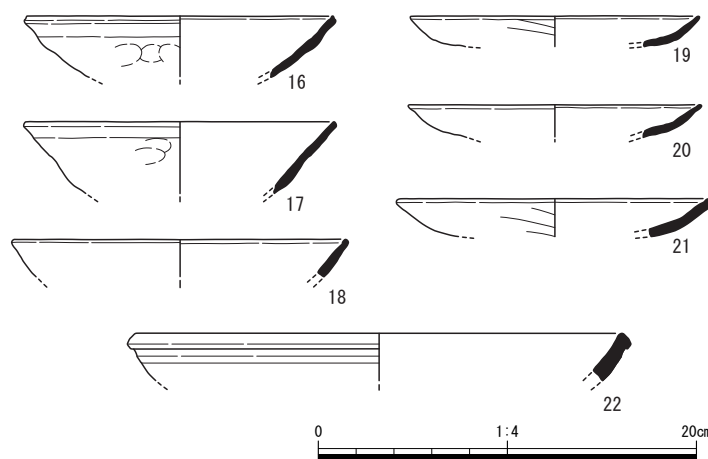
整地層上層出土土器 (図 25・図版 12・15・16) 32・33 は土師器碗である。32 の外面はナデ調整で、



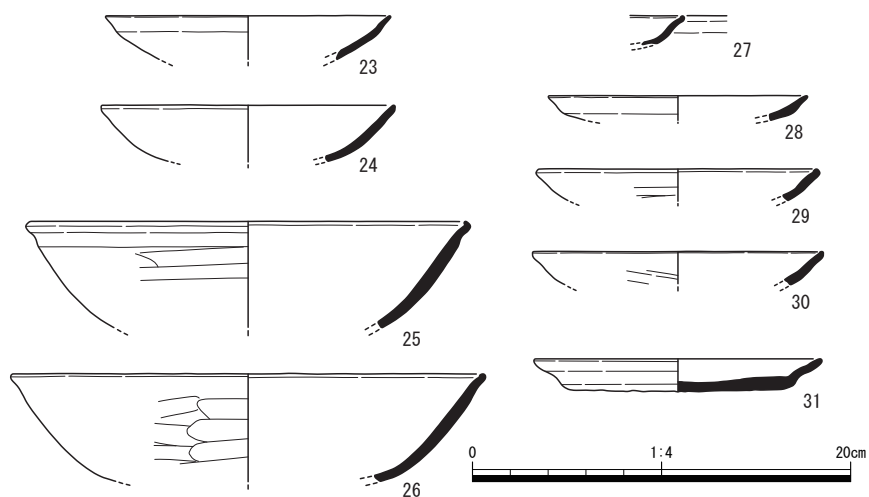
柱穴 40



柱穴 43



柱穴 44



柱穴 45

图 23 掘立柱建物跡 1 出土土器

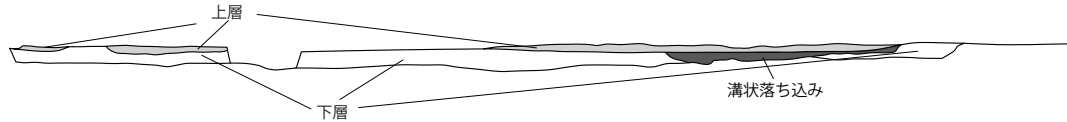


図 24 整地層概念図

口縁端部を内側上方に引き上げる。33 は底部外面から口縁部にかけてヘラケズリされている。34・35 は杯 B で、断面台形状の高台が付く。36 は内面に漆が付着する。36～40 は土師器皿である。37・40 底部外面から体部外面にかけてヘラケズリされるもので、40 は口縁端部を内側に丸く収め肥厚する。

36・38・39 の体部はナデ調整されている。41～44 は土師器甕で、体部は湾曲し、口縁は外反する。41 の体部外面にハケ目、口縁端部は内側に折り曲げて収める。42 は体部外面はヘラケズリされ、口縁端部を内側上方に引き上げる。43 の口縁端部は内側に折り曲げて収める。44 は内面にハケ目があり、口縁は肥厚し、端部は内側上方に引き上げる。

45～48 は須恵器杯 B 蓋である。45～46・48 の天井部は平坦で、47 の天井部は湾曲する。45 は宝珠形つまみが付く。49 は須恵器杯 B で、断面四角形状の高台が付く、体部は上方に直線状に立ち上がる。50 は須恵器皿で、湾曲しながら外反しする底部で、口縁部は大きく外反する。緑釉陶器皿の形状に似るものである。51 は須恵器壺で、口縁は外反し、端部は外側に傾斜する面を持つ。52 は須恵器平瓶の後の部分で、角張った肩を持ち、体部は直線的である。53～54 は須恵器鉢で、高台は付かない。54 は厚みのある底部である。

55～58 は緑釉陶器の椀である。55 は小椀で、糸切痕が残るケズリ出しの平高台である。内面及び体部外面に釉がわずかに残る。56・58 はケズリ出しの平高台で、56 は内面及び体部外面に釉がわずかに残る。58 の底部は中央に向かって器壁は薄くなる。内外面に釉がわずかに残る。57 は蛇の目高台で、内外面に釉がよく残る。いずれも軟質な素地であり、山城産のものとみられる。59・60 は緑釉陶器皿で、体部は湾曲して外反し、口縁は大きく外反する。内外面に釉がわずかに残る。軟質な素地で、山城産のものとみられる。61 は緑釉陶器盤とみられるもので、内面に輪花文がある。口縁は外反し、端部は内側上方に引き上げられ、外側に傾斜する面を持つ。内外面に釉がよく残り、硬質な素地である。東海産のものか。

62・63 は灰釉陶器の椀である。62 は厚みのある器壁で、体部は湾曲し、口縁は大きく外反する。内外面に施釉される。63 は断面台形状の高台が付き、体部は湾曲しながら立ち上がる。内面のみ施釉される。64～66 は灰釉陶器皿である。64 は断面四角形状の高台が付き、内側に入る。内面のみ施釉される。65 は断面台形状の高台が付き、僅かに外に開く。内面のみ施釉される。66 は段皿で、断面台形状の高台が付く。体部から口縁端部は緩やかな傾斜を持つ。内外面に施釉される。いずれもいわゆる角高台がつき、刷毛により施釉されるもので、黒笹 14 号窯形式のものとみられる。

上層出土の土器には他に土師器高杯片や須恵器甕片もあるが、出土割合は土師器の小型食器類の破片が他数を占める。土師器には京Ⅲ[京都Ⅱ]期古段階～中段階の属するものも少数含むが、基本的には須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器も含め 9 世紀前半の京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階に属する土器が圧倒的に多い。

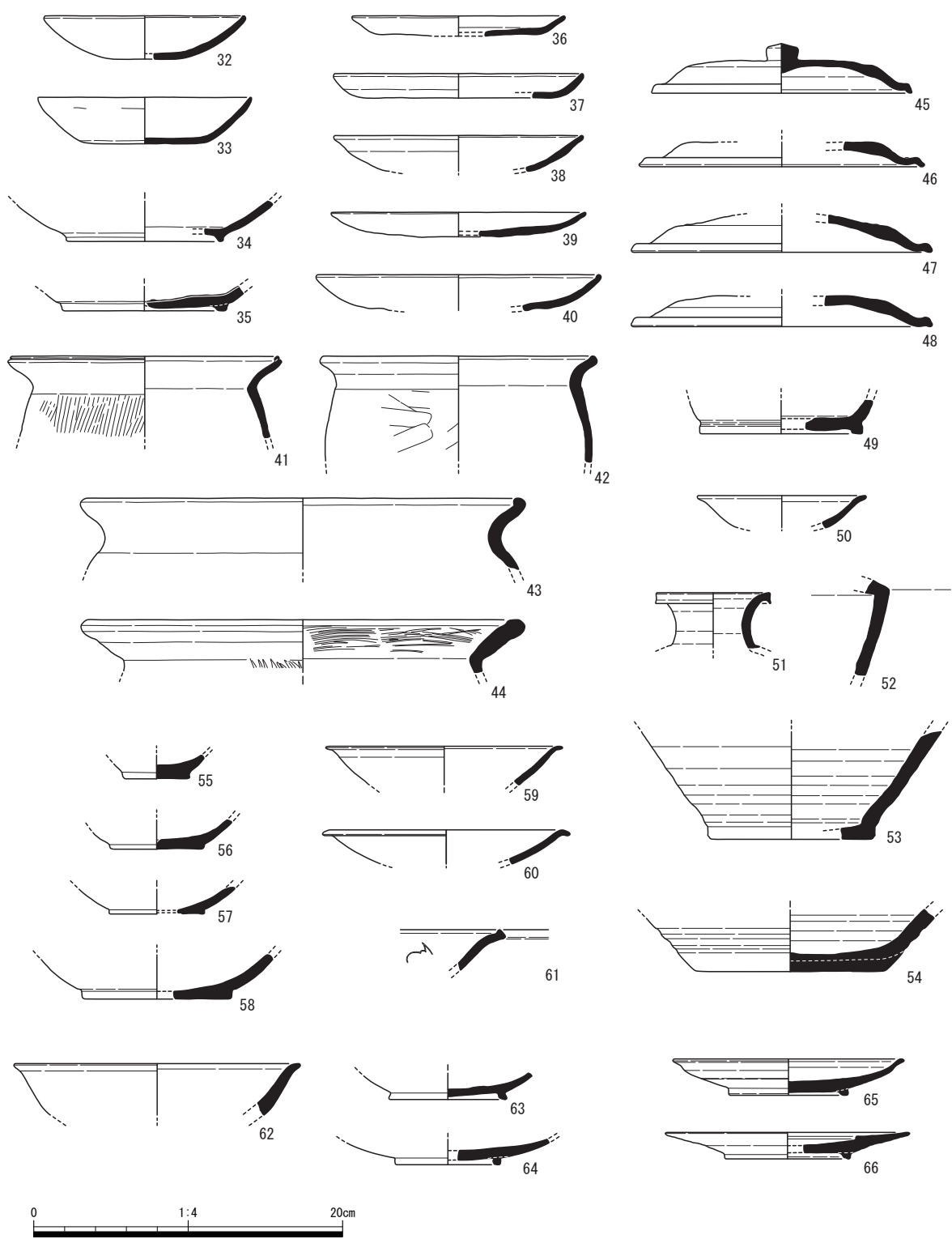


图 25 整地層上層出土土器

溝状落込み出土土器（図 26・27・図版 12～14・16～18） 67～77 は土師器碗で、いずれも外面はヘラケズリされている。67・77 は口縁端部を内側に丸く収め肥厚する。74 は口縁端部を内側上方に引き上げる。75 の外面には煤が付着する。78～93 は土師器杯で、外面はヘラケズリされる。78～81・83～88 はいずれも口縁端部を内側に丸く収めて肥厚する。85 は口縁部が外反する。82・89～92 は杯 B で、82・86・89 は断面三角形の高台が付き、外側に開く。88 の口縁端部は内側に丸く収めて肥厚する。90～92 は断面台形状の高台が付き、外側に開く。93～111 は土師器皿で、外面ヘラケズリされる。93～95・97～111 は口縁端部を丸く収めて肥厚する。96・105 の内面には煤が付着する。112 は土師器盤で、外面はヘラケズリされる。断面台形状の高台が付き、口縁端部は内側に丸く収めて肥厚する。113～118 は土師器甕で、113・114・116～117 は口縁部は外反する。113・116・118 は口縁端部はを上方に引き上げる。114・117 は口縁端部を丸く収める。113・116 の外面にはハケ目がみられる。115 の外面はヘラケズリされる。119～122 は土師器高杯である。119 は杯部で外面はヘラケズリされる。120・121 の脚部柱は 7 面、122 は 9 面を持つ。123 は土錘で、中心に向かって膨らみを持つ。

124～128 は黒色土器 A 類の碗である。いずれも内面はヘラミガキされる。124～126 の外面はヘラケズリされる。125・126 の口縁は外反し、体部は湾曲する。127・128 は断面三角形の高台が付く。

129～133 は須恵器杯 B の蓋である。129・130・133 の天井部は平坦で、131 の天井部は湾曲し、132 の天井部は中心に向かって下がっていく。129・130・132 の内面には墨が付着している。134・135 は須恵器杯 A で、体部は直線的に立ち上がる。134 の外面には煤が付着する。136～141 は須恵器杯 B で、大部は直線的に立ち上がる。136～138 は断面台形状の高台が付く。129～141 は断面四角形状の高台が付く。142・143 は須恵器皿で、体部は直線的に立ち上がる。142 の内面には煤が付着する。143 の口縁端部は平坦面を持つ。144 は須恵器鉢で、体部は湾曲し、口縁部は外反する。

145 は緑釉陶器碗で、内面はヘラミガキされ、外面には糸切り痕が残る。ケズリ出しの平高台である。内面に釉が残る。軟質な素地であり、山城産のものとみられる。146 は緑釉陶器皿で、断面四角形のケズリ出しの輪高台を持つ。内外面に釉が残る。ケズリ出しの輪高台を持つことから山城産のものとみられる。147 は緑釉陶器耳皿かとみられるもので、底部に糸切り痕が残る。ケズリ出しの平高台で、内外面に釉がわずかに残る。軟質な素地であり、山城産のものとみられる。148 は緑釉陶器皿もしくは三足盤かとみられるもので、口縁部は外反し、平坦に近くなる。内外面に釉がわずかに残る。軟質な素地であり、山城産のものとみられる。

149・150 は灰釉陶器碗で、体部は湾曲し、口縁部は外反する。149 は断面四角形状の高台が付き、高台外面には釉溜りがみられる。内面に施釉される。いずれもいわゆる角高台がつき、刷毛により施釉されるもので、黒笹 14 号窯形式のものとみられる。

これらの他に須恵器甕片も出土している。

この溝状落込みでは土師器の小型食器類の破片が多数を占め須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器 A 類となり、9 世紀前半の京Ⅱ [京都Ⅰ] 期新段階に属するものが主となる。中でも土師

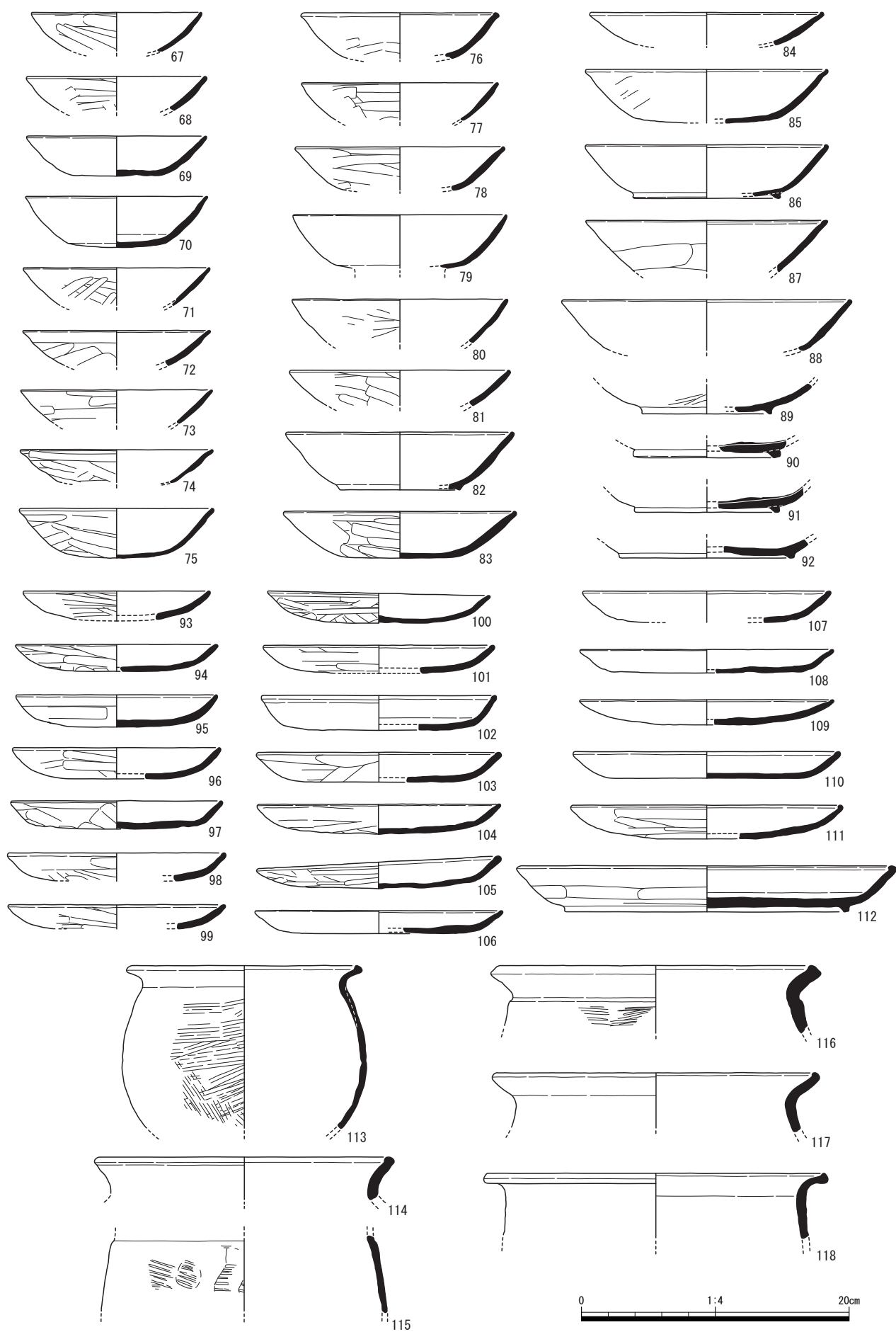


图 26 溝状落込み出土土器 (1)

器碗・杯・皿は9世紀前半でも京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期中段階～新段階に属するものが中心となり、他のものは京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期新段階に属するものが中心となる。

整地層下層出土土器（図28・図版14・18） 151・152は土師器碗で、体部外面から口縁部にかけてヘラケズリされる。152の口縁端部は内側に丸く収まる。153・154は土師器杯である。153は体部外面から口縁部にかけてヘラケズリされる。口縁部はやや外反し、端部を内側上方に引き上げる。154は杯Bで、断面台形状の高台が付く。器壁は薄く、高台は外に開く。155～157は土師器皿である。155は体部外面から口縁にかけてナデ調整され、口縁部は屈曲して外反する。156は体部外面から口縁にかけてナデ調整され、体部に指押えの痕が残る。口縁部は屈曲して外反する。157は底部外面から口縁部にかけてケズリ調整されている。口縁端部は内側に丸く収まり肥厚する。158は土師器高杯で、脚部柱は8面を持つ。159・160は土師器甕で、体部は湾曲して口縁部は外反する。159の体部は穿孔され、口縁端部は内側に丸く収まる。外面には煤が付着している。160の頸部内面にはハケ目、体部外面にはタタキ目がみられる。口縁端部は平坦面を持つ。

161・162は黒色土器A類杯で、器壁は薄く、内面はミガキ、体部外面はヘラケズリされている。162の口縁は屈曲し、端部は外反する。163は黒色土器A類杯もしくは碗で、器壁は薄く内面ミガキ、外面ヘラケズリされている。

164～166は須恵器杯B蓋で、平坦な天井部を持つ。164の器高は低く、輪状のつまみが付く。167は須恵器杯Aで、底部は丸みを帯び、体部は湾曲しながら立ち上がる。168～171は須恵器杯Bである。168は断面台形状の高台が付き、体部は直線的に立ち上がる。169の口縁部は外反する。170は断面四角形状の高台が付き、やや外に開く。171は断面四角形状の高台が付き、内側に入る。172～176は須恵器鉢である。172～174の体部は湾曲し、口縁は外反する。口縁端部は外側に傾斜する面を持つ。175・165の底部に高台は付かない。

177は緑釉陶器碗で、底部外面の中心に向かって窪むケズリ出しの平高台である。体部は湾曲して立ち上がる。内面及び体部外面に釉がわずかに残る。軟質な素地であり、山城産のものとみられる。

これらの他に、土師器羽釜の破片と見れるもの、須恵器甕片も出土している。

整地層下層とした溝状落込み以前の整地層でも土師器の小型食器類の破片が多数を占め、須恵器・緑釉陶器・灰釉薬陶器・黒色土器A類となり、9世紀前半の京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期新段階に属するものが主となる。中には京Ⅲ〔京都Ⅱ〕期古段階～中段階に属するものが少数混ざるが、整地後の建物廃絶前後に入り込んだ、もしくは、耕作土に混入したものと考えられる。

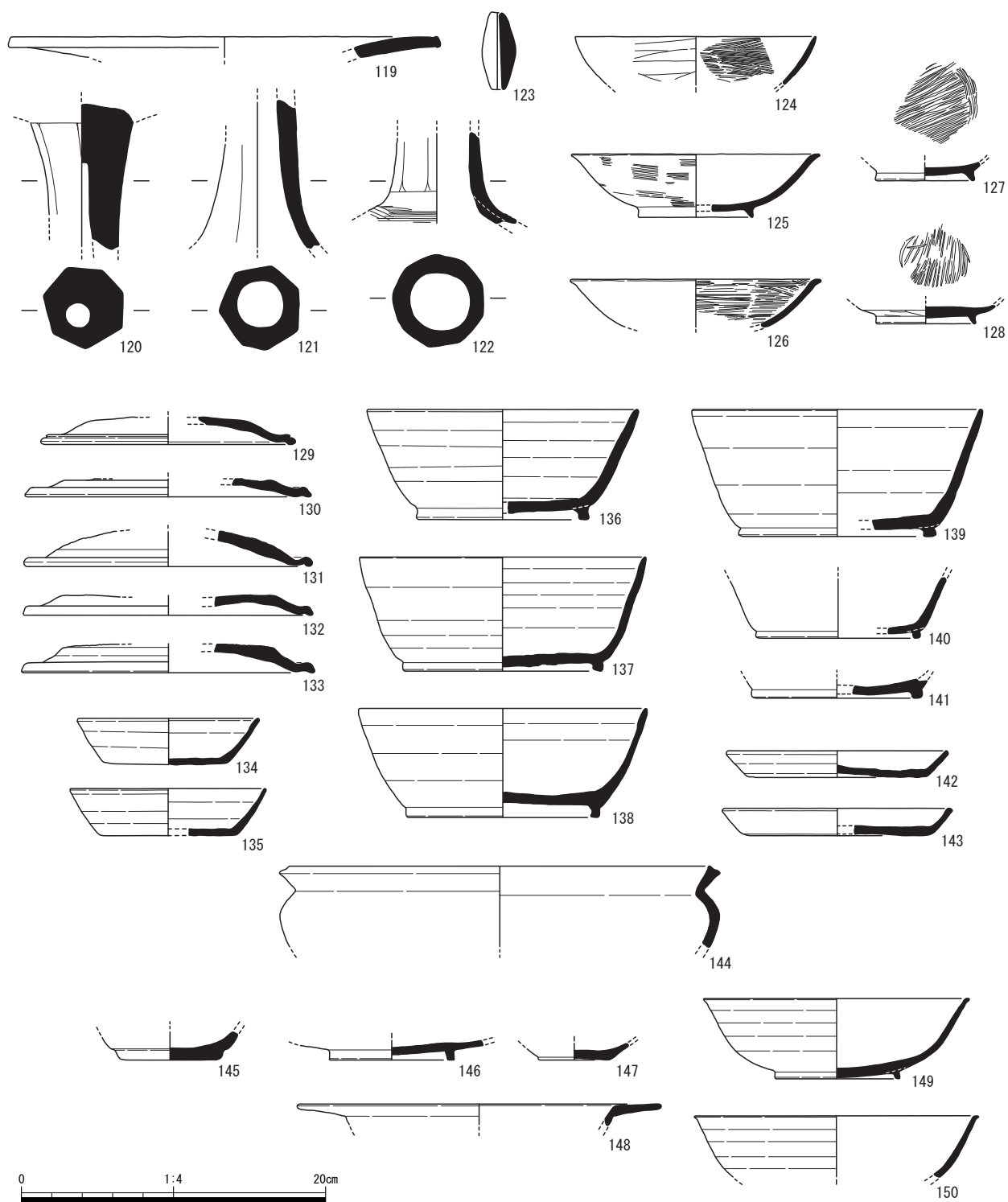


図 27 溝状落込み出土土器 (2)

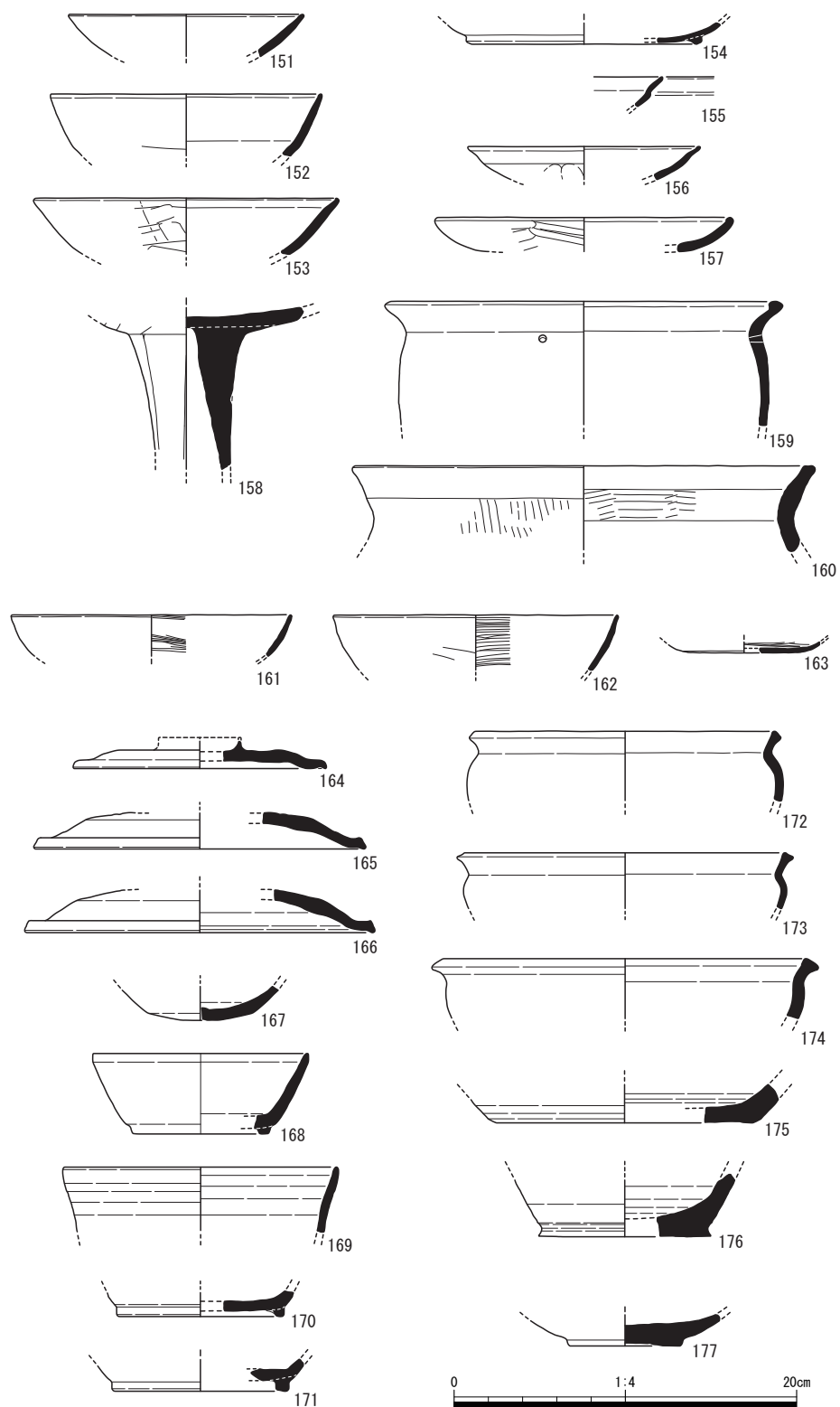


图 28 整地層下層出土土器

第2節 中世の土器

土坑 52 出土土器 (図 29・図版 18) 178・179 は土師器皿である。178 の口縁は大きく外反し端部を引き上げる。179 の口縁は外反し端部を丸く収める。178 は 16 世紀前半のものである。

溝 47 出土土器 (図 30・図版 18) 180 は土師器碗で、体部はヘラケズリされる。口縁部は屈曲し、端部を内側上方に引き上げる。181 は土師器甕で、口縁部は外反し、端部はわずかに屈曲する。

182 は須恵器杯で、体部は緩やかに湾曲する。
183 は須恵器皿で、底部に糸切り痕が残る。やや厚みのある平高台で体部は緩やかに立ち上がる。

184 は緑釉陶器碗で、断面四角形状の高台を持つ。内外面に釉が残る。

185 は白磁小皿である。口縁部は大きく外反する。

181・182・184 は平安時代の遺物であり、溝 47 が埋まる過程で混入したものであろう。

9 世紀以降、調査地内において建物廃絶後は宅地利用されておらず、敷地内の空闲地として利用されていた可能性がある。

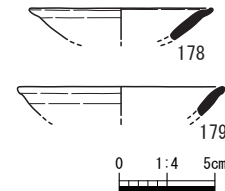


図 29 土坑 52 出土土器

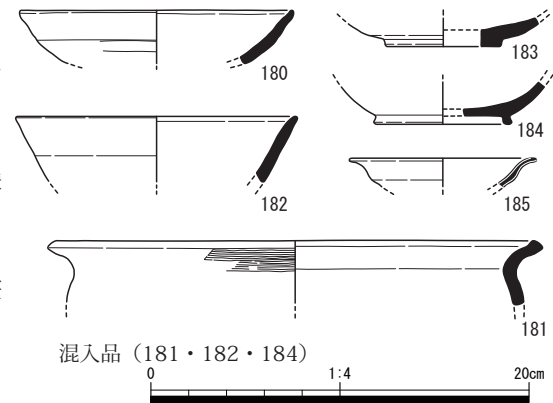


図 30 溝 47 出土土器

第3節 平安時代の瓦

1. 掘立柱建物跡 1 柱穴出土瓦

柱穴 43 (図 31・図版 19) 186 は平瓦で、凹面に布目痕、凸面には縄目叩き痕がみられる。両面に糸切り痕が残る。凸面には離れ砂が付く。凹面の側縁はナデ調整されている。

掘立柱建物跡 1 では他に柱穴 44 掘方・柱穴 45 抜取痕跡でも瓦が出土している。

2. 整地層出土瓦

整地層上層出土瓦 (図 32～34・図版 19) 187 は軒平瓦で、瓦当面は欠損しているが、唐草文とみられる。188 は丸瓦で、凸面に縄目叩き痕、凹面に布目痕がみられる。凸面はナデ調整されている。189～193 は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕がみられる。189 の凹面には布が寄って出来たとみられる段が付く、側縁はナデ

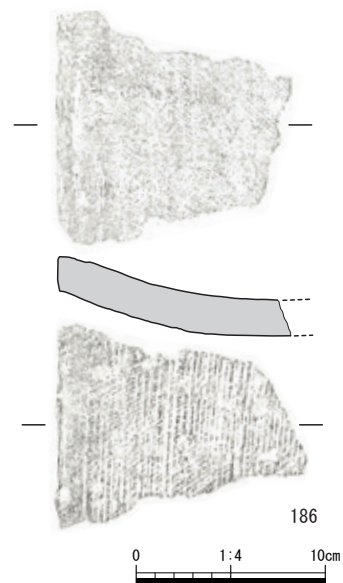


図 31 柱穴 43 出土瓦

調整されてる。凸面の後端には成型台の痕が残る。190 の凹面側縁はケズリ調整され、凸面には離れ砂が付く。191 の凹面は摩滅しているが、布が寄った痕跡が残る。192 の凹面には成型台から粘土がはみ出したとみられる段が付く。193 の凸面側縁は面取りされている。

溝状落込み出土瓦（図 35・36・図版 20） 194 は軒平瓦で、瓦当面は完全に欠損している。凹面に布目痕、糸切り痕がみられる。凹面前端は横方向にナデ調整され、凸面は縦方向にケズリ調整されている。195 は丸瓦である。凸面には縄目叩き痕、凹面には布目痕がみられる。196～198 は平瓦で、凹面に布目痕、凸面には縄目叩き痕がみられる。196 の凹面前端は縦方向にナデ調整され、側縁は面取りされている。凸面は部分的にナデられている。197 の凹面には糸切り痕がみられ、側縁は面取りされる。凸面は不定方向にナデ調整されている。198 の凹面には糸切り痕がみられ、側縁はケズリ調整される。凸面は不定方向にナデ調整され、側面は棒状のもので削られたと考えられる線が 1 条みられる。

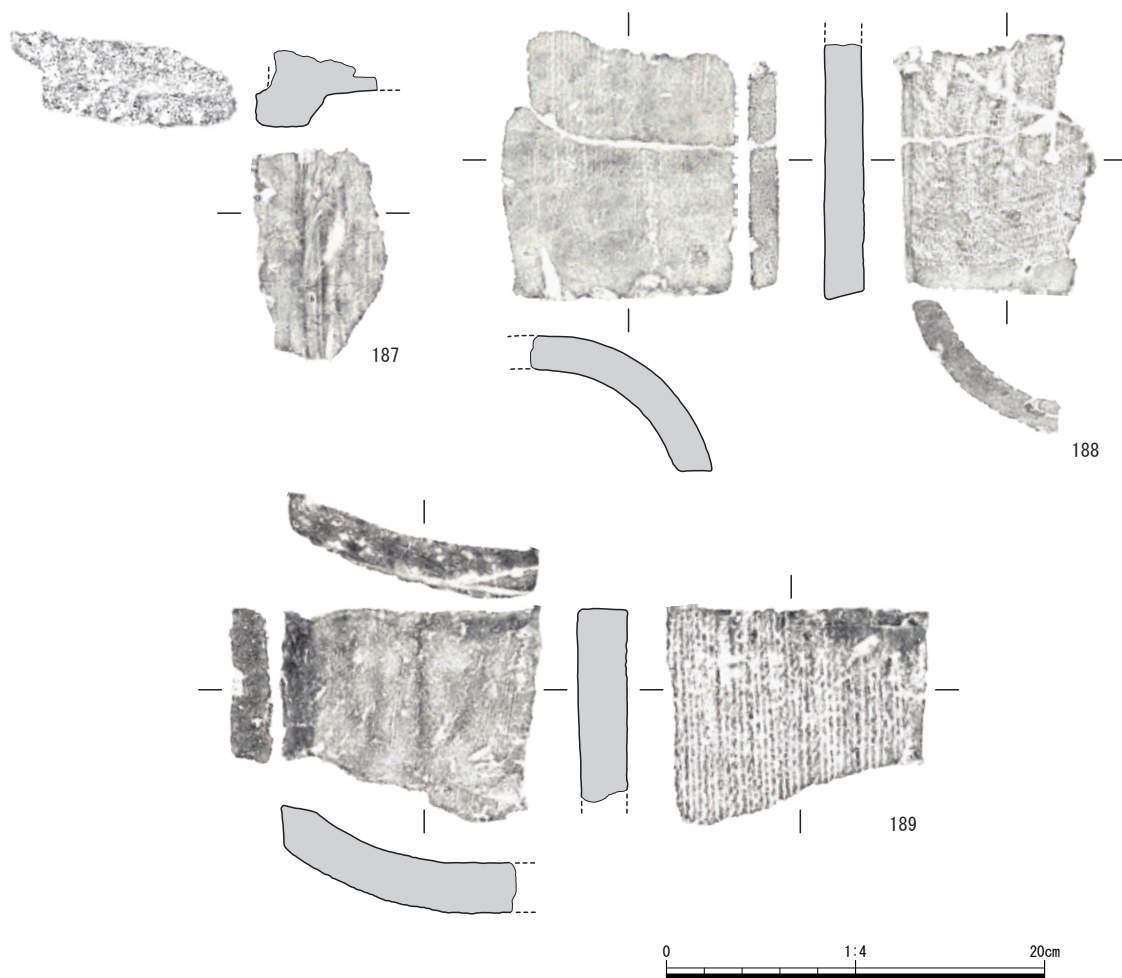


図 32 整地層上層出土瓦（1）

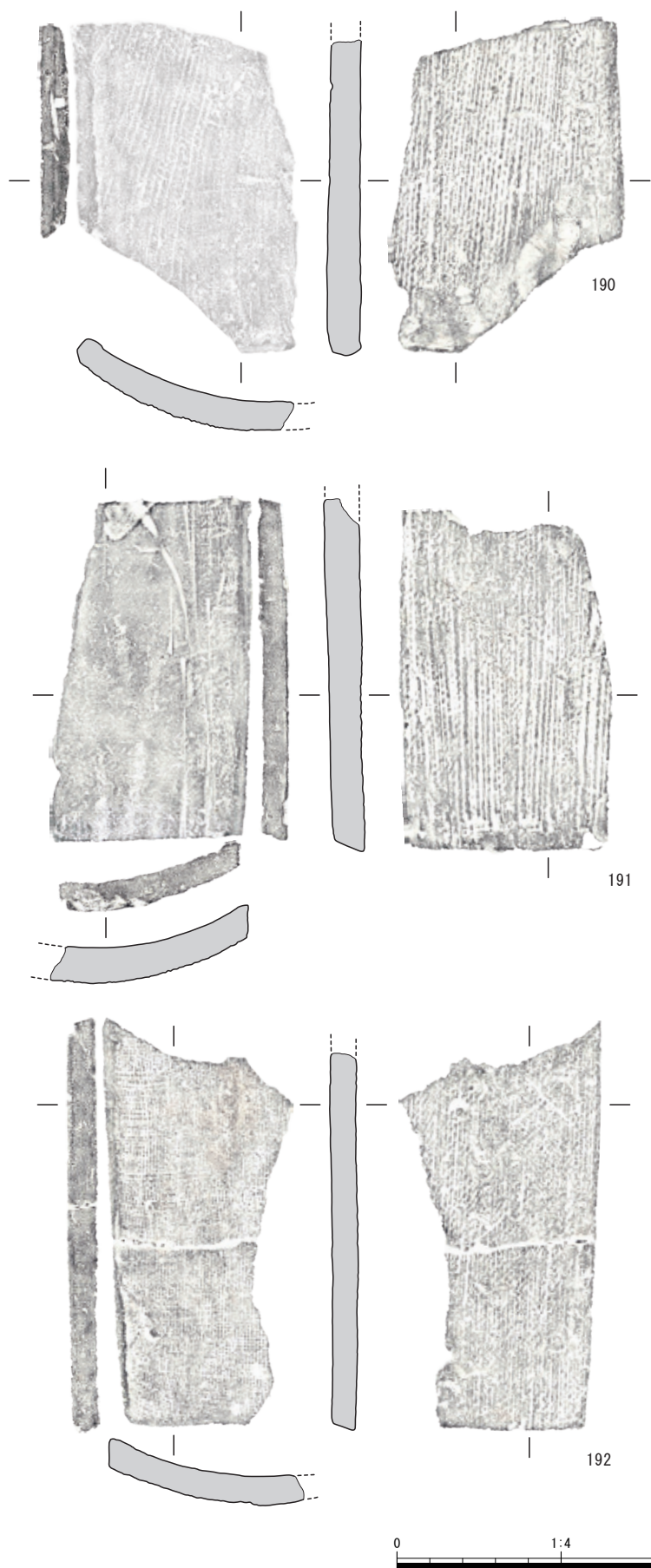


图 33 整地層上層出土瓦 (2)

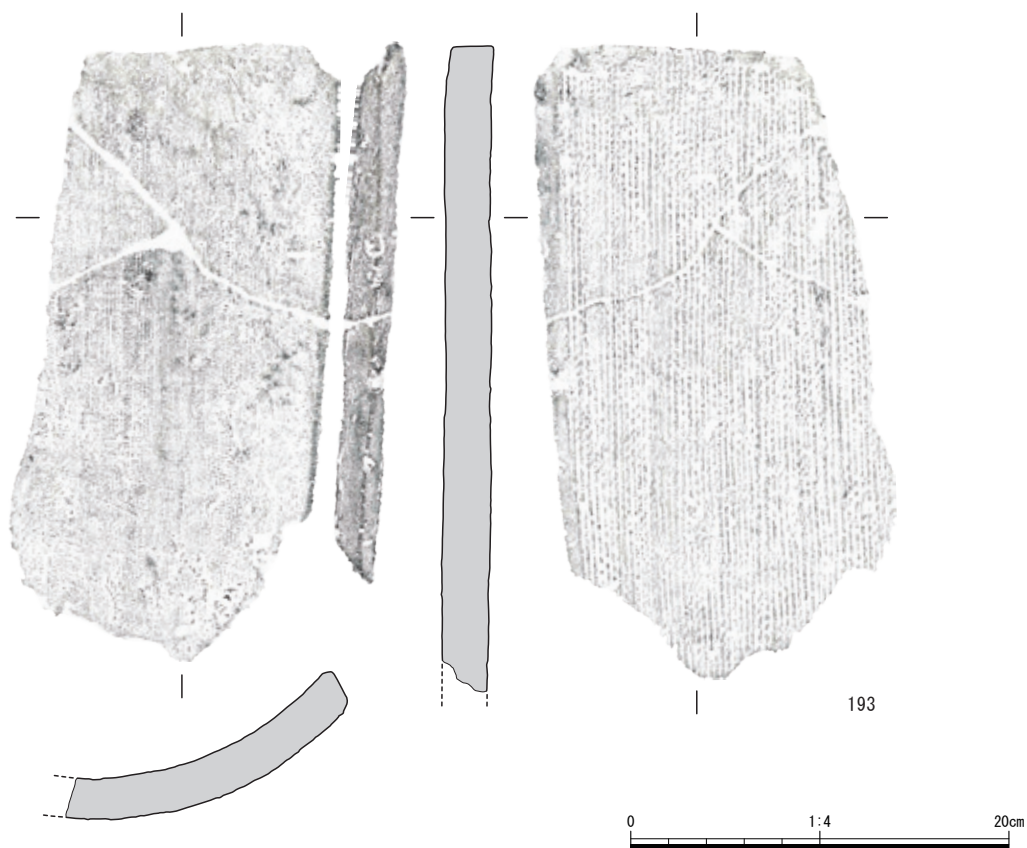


図 34 整地層上層出土瓦 (3)

整地層下層出土瓦 (図 37 ～ 39・図版 20・21) 199・200 は軒丸瓦である。瓦当面はほぼ欠損しており、文様は不明である。201 は軒平瓦で、瓦当面は完全に欠損している。凸面には横方向の縄目叩き痕がみられる。凹面は縦方向にナデ調整され、凸面は部分的にナデられている。残存部分では粘土板を張り合わせた痕が残る。202・203 は丸瓦で、凸面は摩滅しているが縄目叩き痕、凹面には布目痕がみられる。203 の凹面には布が寄ったとみられる段が付く。204 ～ 207 までは平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕が残る。204 の凹面側縁はケズリ調整され、凸面には離れ砂が付く。205 の凹面側縁は面取りされ、凸面前端はナデられている。206 の凹面側縁はナデ調整され、凸面には離れ砂が付く。206 の凹面側縁は面取りされる。

整地層全体で瓦の出土は少なく、また、完形になるものは出土せず、接合して半分程度になるものが最大のものであった。

註

- 14) 今回出土した土器の編年については、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年に拠った。この中で平安京跡内出土の土器を京Ⅱ〔京都Ⅰ〕期中段階は平安京遷都後 (794 年) ～ (810 年)、京Ⅱ〔京都Ⅰ〕新段階は (810 年) ～ (840 年)、京Ⅲ〔京都Ⅱ〕古段階 (840 年) ～ (870 年)、京Ⅲ〔京都Ⅱ〕中段階 (870 年) ～ (900 年) と編年されており代表的な遺跡出土の土器を提示している。今回出土の平安時代の土器はこの範疇に収まるものである。以後編年についてはこれに従って表記する。

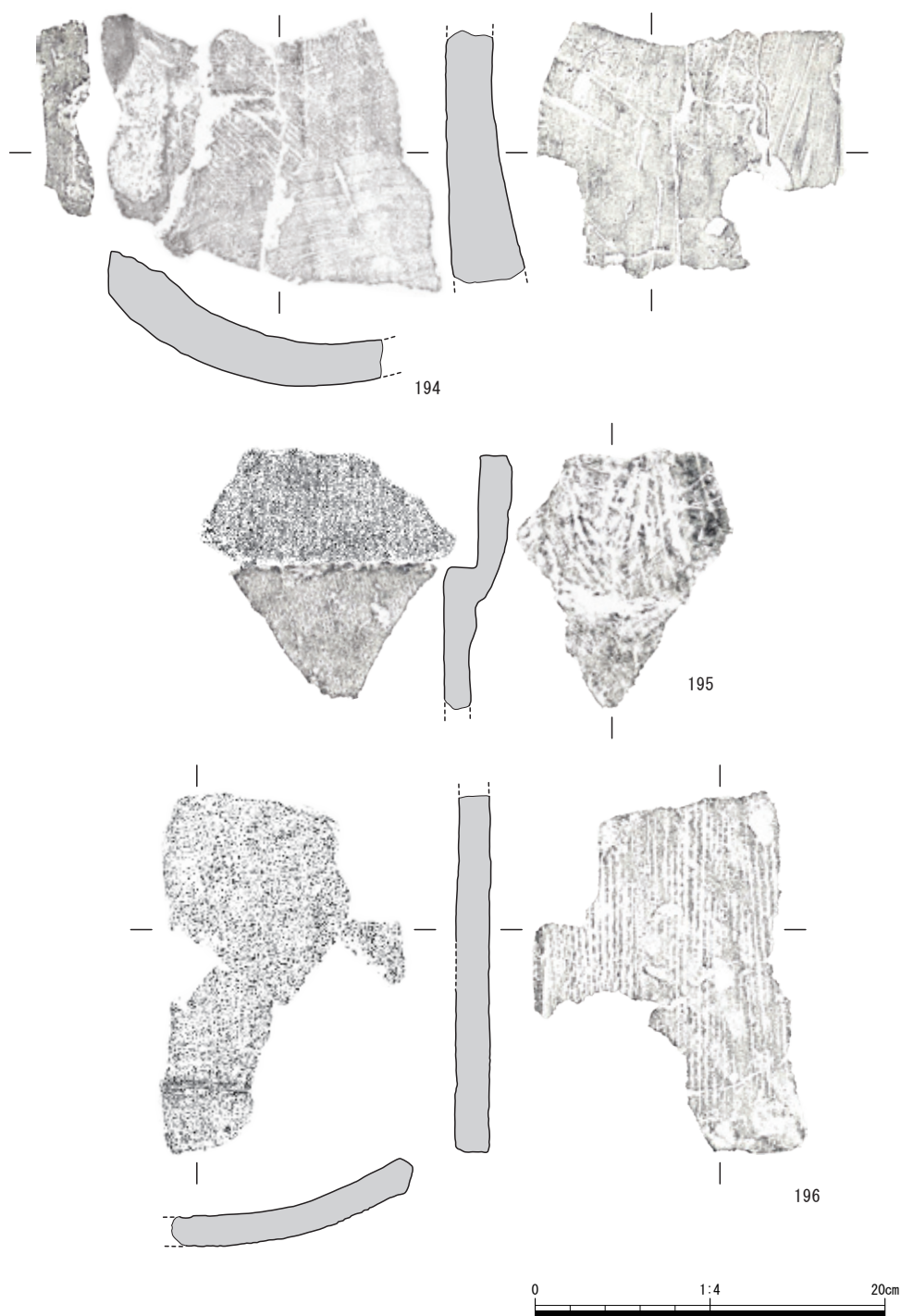


図 35 溝状落込み出土瓦 (1)

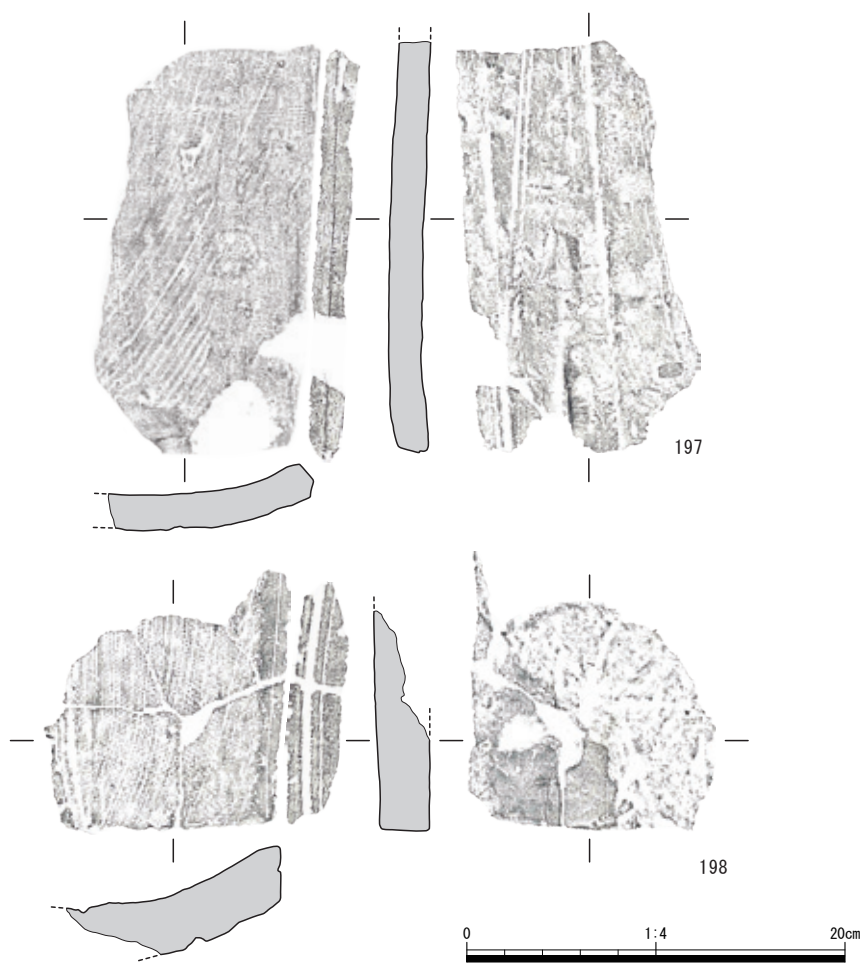


图 36 溝状落込み出土瓦 (2)

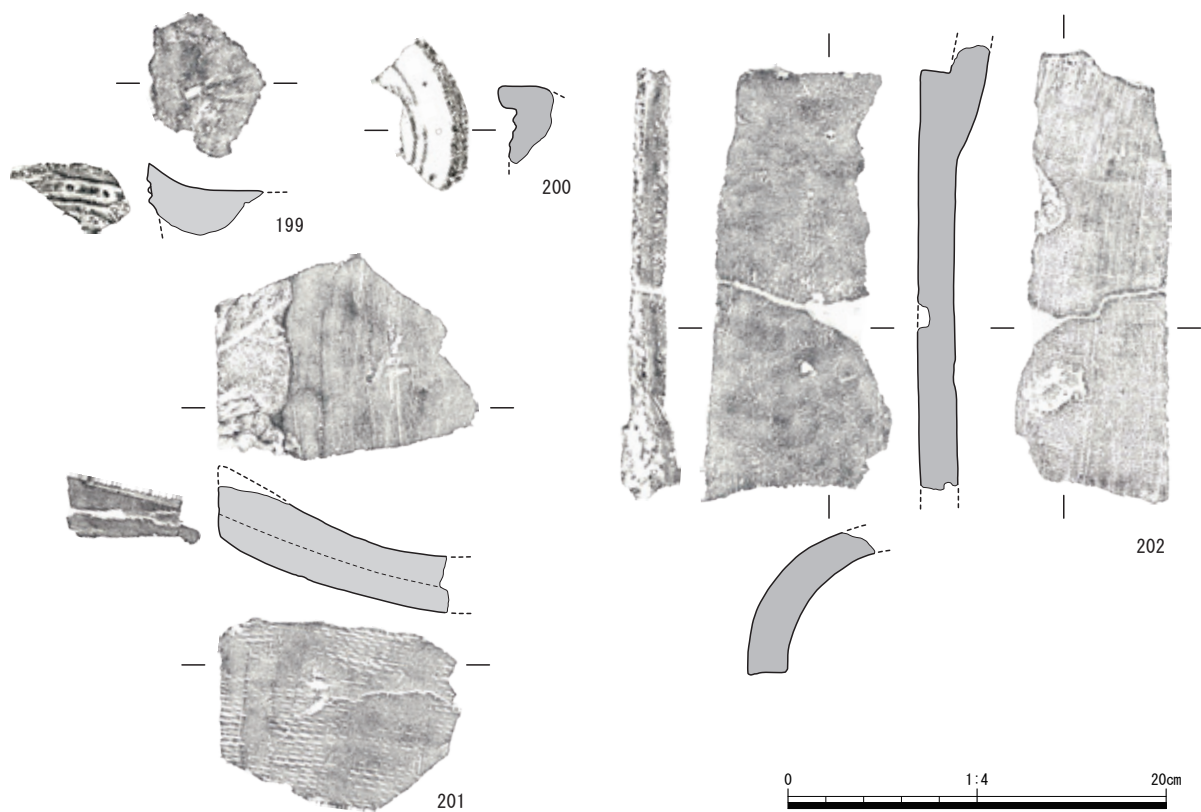


图 37 整地層下層出土瓦 (1)

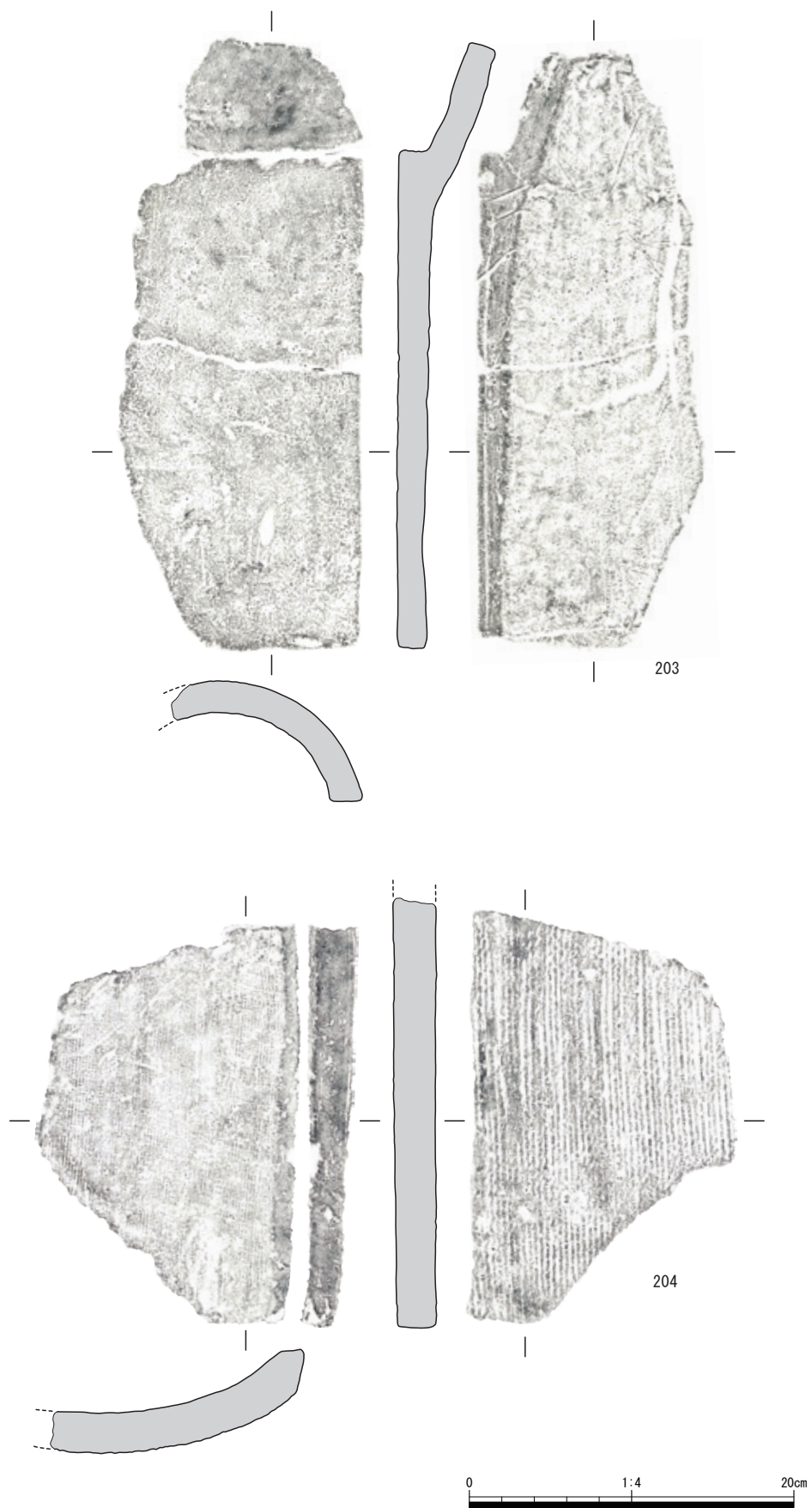


图 38 整地层下層出土瓦 (2)

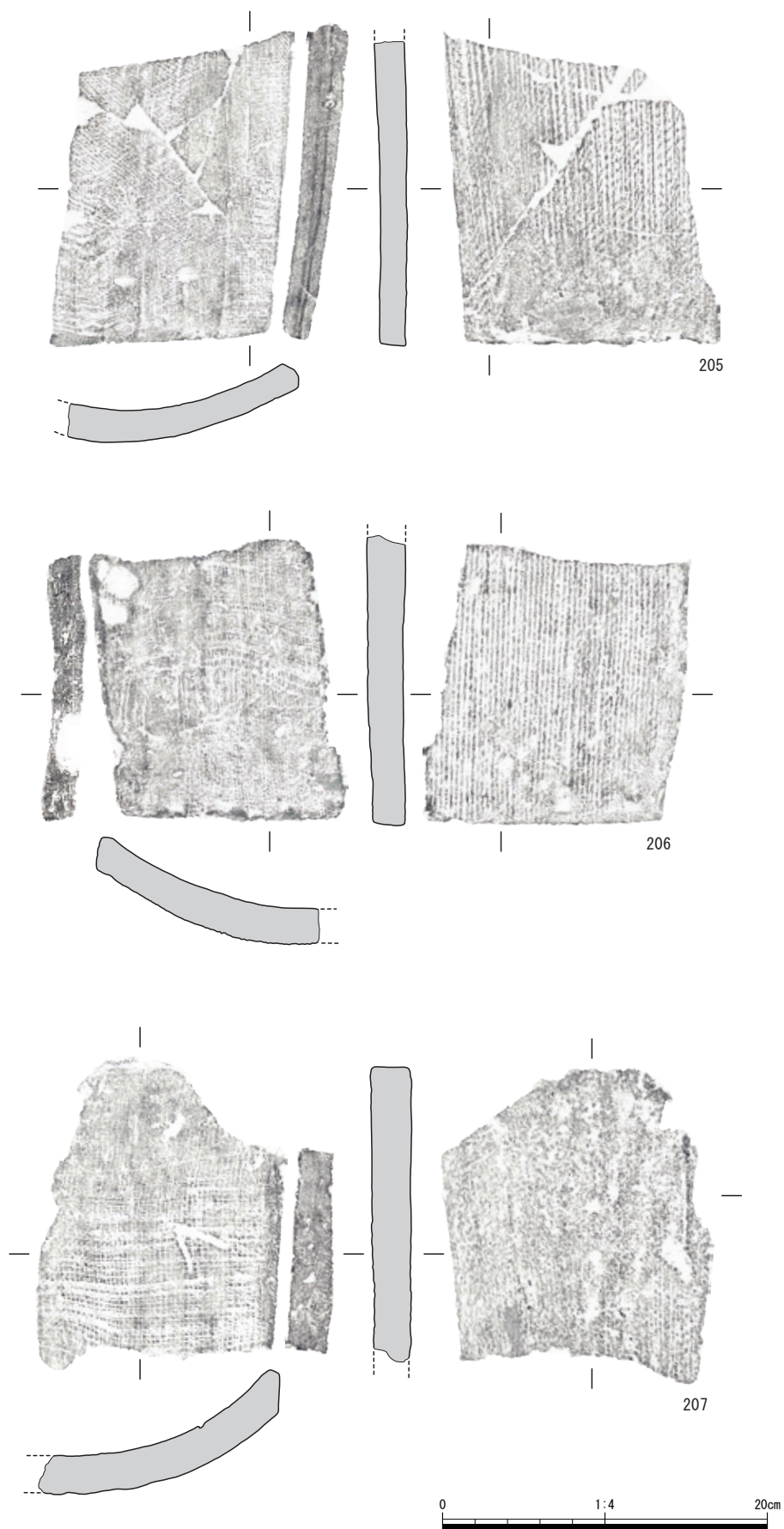


图 39 整地層下層出土瓦 (3)

第6章 総括

第1節 掘立柱建物跡について

1. 遺構

掘立柱建物跡1は調査地の北側を拡張した確認調査の成果を加えると、身舎の梁行は三間で柱間8尺等間、桁行は三間以上で柱間9尺等間、少なくとも南側に庇が付く東西棟であることが明らかとなった。平城京、長岡京、平安京などの古代都城における掘立柱建物は宮・京を問わず身舎の梁行は二間とするものが主体を成し基本的である。このような身舎の梁行が三間となる建物は、平城宮内裏正殿、紫香楽宮「朝堂北方区画」建物Ⅲ・Ⅳ¹⁵⁾、後期難波宮内裏正殿、長岡宮内裏である「東宮」正殿¹⁶⁾、平安宮内裏「紫宸殿」など天皇あるいは皇太子の御所など国家の中枢を成す宮殿の正殿を中心に散見される点は注目される。他には、長岡京左京二条二坊十町のいわゆる「離宮」とされている邸宅跡¹⁷⁾の正殿にも例が見られる。この「離宮」も皇族と関連するものと推測される。

この中で、紫香楽宮「朝堂北方区画」建物Ⅳ（図41）、長岡京左京二条二坊十町「離宮」正殿（図42）は、いずれも身舎桁行七間、梁行三間で、南北に庇が付き、南面する東西棟である。長岡京左京二条二坊十町「離宮」は1町規模の邸宅跡であり、正殿は北半の中心部に南面して位置し、複数の脇殿などで構成される主要建物群の中心をなすものである。また、平安宮内裏「紫宸殿」は内裏の中心となる建物であり、身舎の梁行は三間であつたとみられる¹⁸⁾。

上記のように梁行三間で東西棟の建物跡は邸宅の主要建物群の中心建物となると考えられる。また、平安京跡内での平安時代前期の1町規模の邸宅の建物群においても東西棟は主要建物群の中心となっていることから、この掘立柱建物跡1は主要建物群の一部を構成する建物跡と判断できる。掘立柱建物跡1の東側を検出したのみで建物規模は不明であるが、平安京跡内の平安時代前期に属する建物跡などから推測すると桁行は五～七間になり、北側にも庇が付く可能性がある。

建物跡東側に柵跡とみられる柱穴状の遺構があるが、これは建物身舎の南北柱穴列の東約3.5mでほぼ平行するものである。建物と同時期である決め手は少ないが、埋土が建物跡身舎柱穴のものと類似していたため、建物跡に付属する柵跡と判断した。

2. 遺物

掘立柱建物跡1の柱穴出土の土器は主として土師器の小型食器類が占めており、身舎柱穴37～41から出土した土師器杯・椀・皿は底部外面から口縁にかけてヘラケズリされるもの、体部外面までヘラケズリされるものがある。京Ⅱ[京都Ⅰ]期段階¹⁹⁾における平安京跡内で出土する土師器杯・椀・皿にみられる特徴である、いわゆるc手法のものが出土している。庇柱穴43～45から出土した土師器杯・椀・皿

もc手法のものが多数を占めるが、柱穴43・45からはナデ調整で仕上げ外面にヘラケズリをせず、指押さへの痕跡を残すe手法のもので、京Ⅲ[京都Ⅱ]期古～中段階に属するものが出土している。

身舎柱穴37～41の掘形と柱痕跡出土の遺物は京都Ⅰ期新段階に属するものである。時期差はなく、建てられてすぐに廃絶した様相を示す。しかし、庇柱穴43・45の柱拔取痕跡から京Ⅲ[京都Ⅱ]期古～中段階に属する土師器片が少数出土しており、掘立柱建物跡1の廃絶時期が9世紀後半であることを示す可能性があるものと考えられる。また、黒色土器A類・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器は9世紀前半に属しているものであった。

これらを総括すると、各柱穴掘形で出土する遺物は京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階のものが主体をなすため、掘立柱建物跡1は9世紀前半・京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階の間に建てられたと考えられ、その後、9世紀後半・京Ⅲ[京都Ⅱ]期古～中段階の間に廃絶した可能性が考えられる。

第2節 遺構の変遷

当調査地では、耕作土掘削後、同一平面上で遺構を検出したため土層によって遺構の時期変遷は辿れないが、各遺構埋土と遺物により時期の変遷を辿ることができる。ここでは各時期によって大きく4期に分けることができる。

1期 後世の耕地作化により大きく削平されているが、平安時代前期以前の遺構はなく、平安京造営以前の土地利用は認められない。調査地南側は調査区外に広く池状に落ち込んでいき、その中に水の対流によりできたと考えられる大きな窪みがいくつか存在している。また、窪みや東西、南壁土層断面最下層には水の溜りに因ると考えられる黒色の粘質土が堆積していた。平安京造営以前も以後も右京域の二条大路以南には湿地状や池状の堆積が多くみられる²⁰⁾。そのため、そのような水の溜りが存在し、この地域の南西に低い扇状地形の水の流れによる影響を受けたものとみられる。

2期 整地層にやや多く遺物を含むため朱雀院造営当初には当調査地は直ぐに土地利用されていないと考えられる。調査地南側の池状の落ち込みの遺物の主体は京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階のもので、上層では京Ⅲ[京都Ⅱ]期古～中段階ものも出土する。特に土器集中部については京Ⅱ[京都Ⅰ]期中～新段階のものが中心に出土しており、建物造営以前の整地の最終段階であると考えられる。建物を建てる以前は池状の落ち込み北端を少し残したまま整地されていたが、その後、建物造営時に南側に平坦地を拓げるため落ち込みの北端を埋め、その際にそこに土器も廃棄したと考えられる。

掘立柱建物跡の身舎柱穴掘形から京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階に属する遺物が出土し、庇とみられる南側の柱穴列からも、京Ⅱ[京都Ⅰ]期新段階に属する遺物が出土している。そのため、少なくとも9世紀前半には建物が建てられていたと考えられる。『続日本後紀』仁明天皇 承和三(836)年五月癸亥条「以平城京内空闲地二百卅町奉充太皇太后朱雀院」の記事の頃には整地が終了し、すぐに建物が造営され朱雀院の施設として利用され始めたと考えられる。また、廃絶を示すと考え

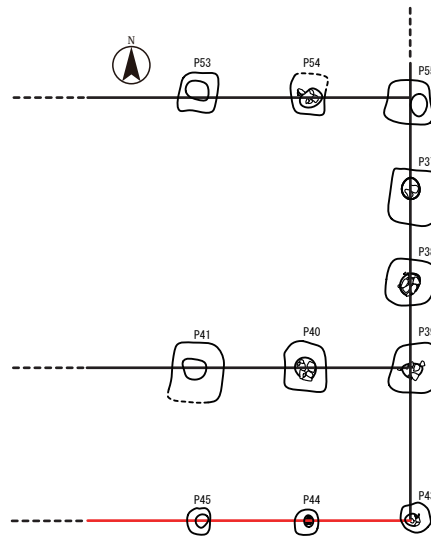


図 40 掘立柱建物跡 1 (1 : 200)

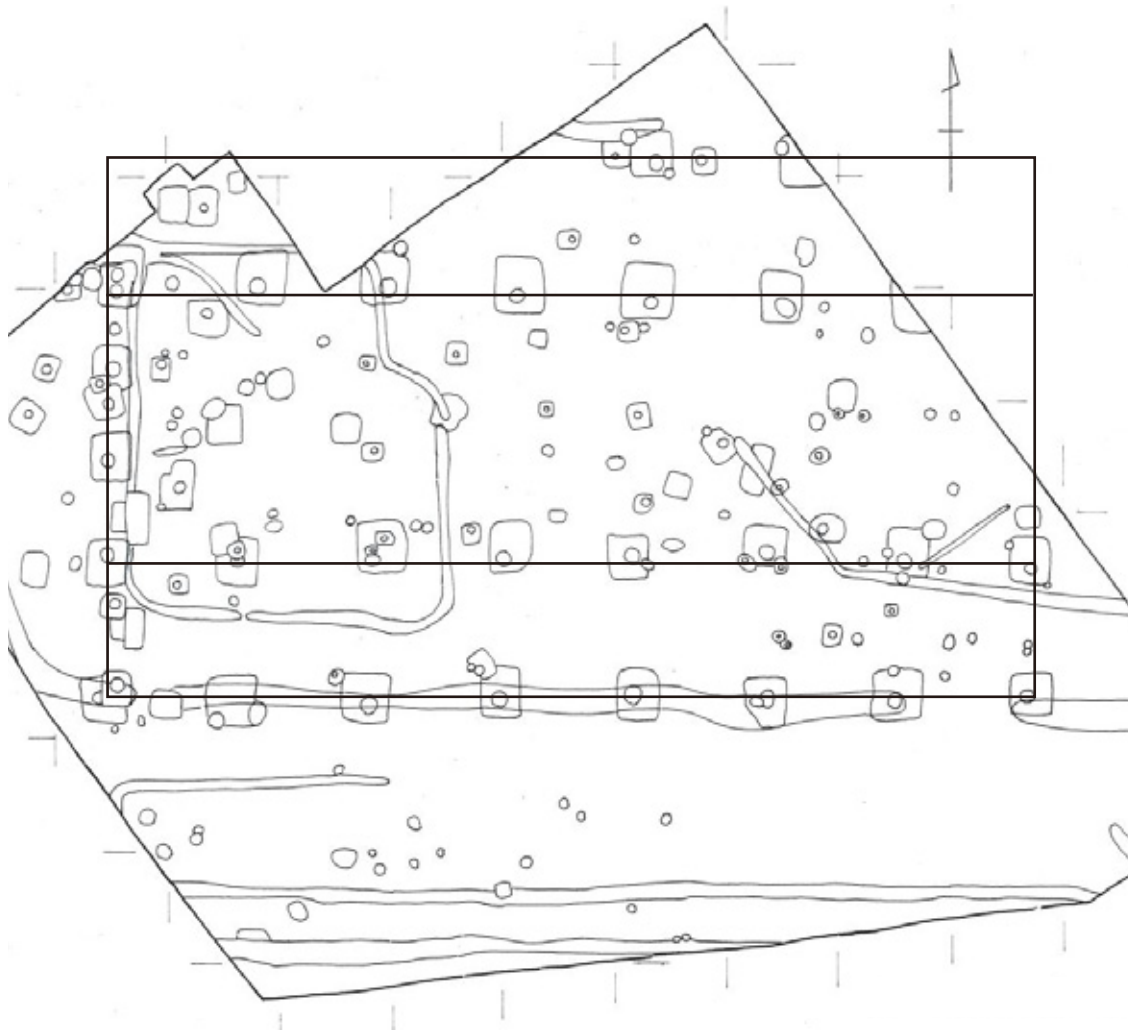


図 41 史跡紫香楽宮 (宮町遺跡第 40 次) 建物Ⅳ (1 : 200)
註 15 より

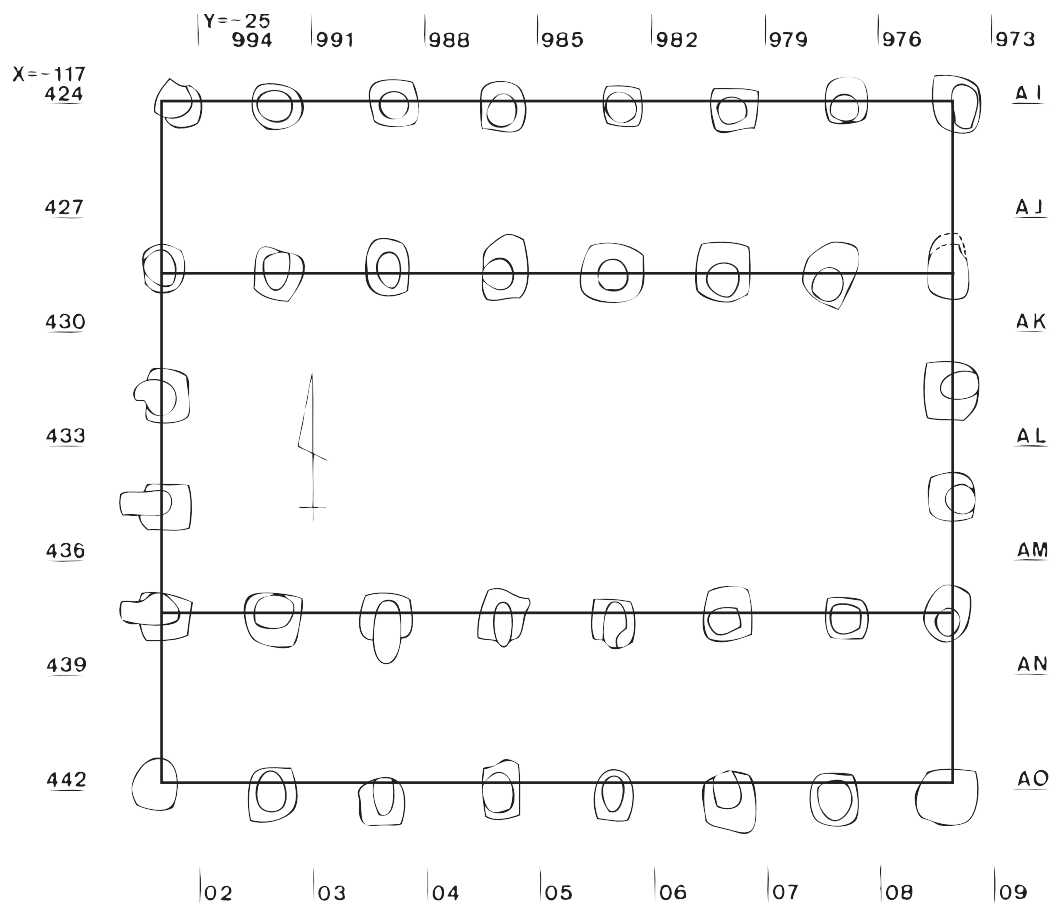


図 42 長岡京跡左京二条二坊十町「離宮跡」 S B 26500 (1 : 200)
(註 17 より)

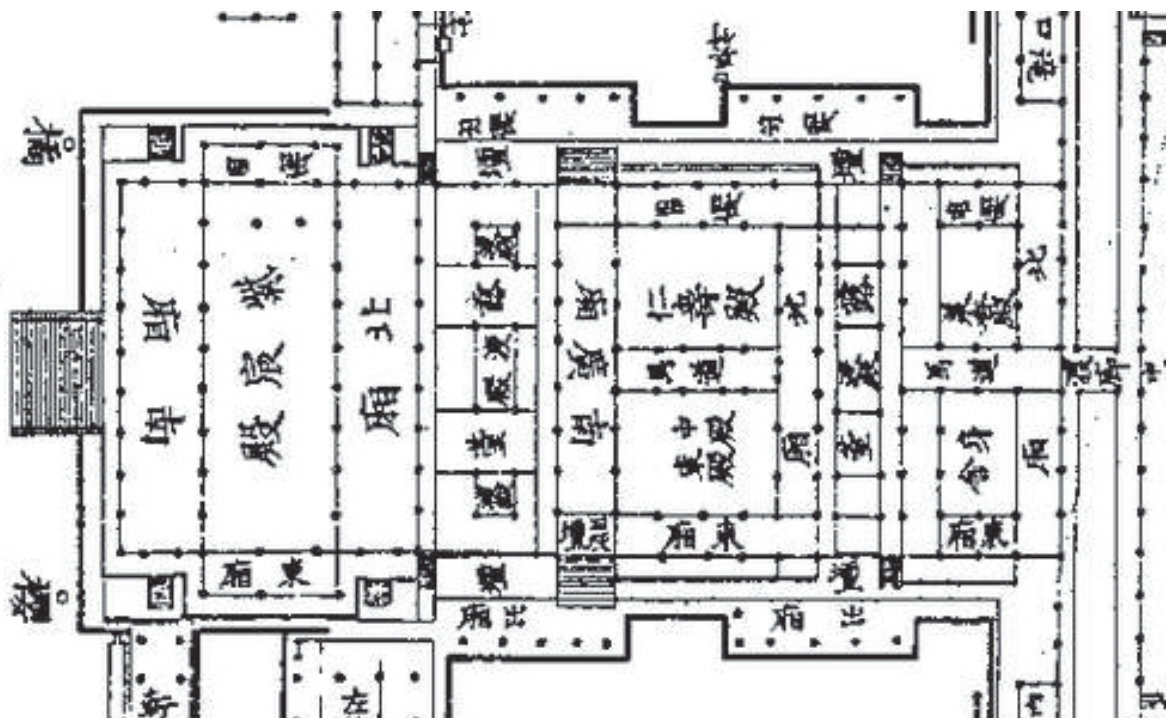


図 43 平安京内裏「紫宸殿」
(註 18 より)

られる京Ⅲ[京都Ⅱ]期古～新段階に属する土器が出土している。

つまり、平安時代前期の調査地は、9世紀前半には池状の落ち込みを整地し、その後に建物を造営した。そして、廃絶時期は9世紀後半と推測でき、京Ⅲ[京都Ⅱ]期中段階以降の遺物を伴う遺構を検出していないことから建物廃絶後の調査地は敷地内の空閑地であったと考えられる。

3・4期 元久二(1205)年「朱雀院築築垣、可為御遊獵之地、神泉無便宜之由、始有沙汰云々。」(『明月記』)までは朱雀院の名称や敷地は存続していたようである。これ以降になると耕作地化されたと考えられ、調査地内で検出した土坑や溝は、耕作地に関連するとみられる。溝47・溝48は恐らく区画割りも兼ねた灌漑用の水路であると考えられるが、溝48に上層を切られる土坑52の性格は不明である。また土坑42は廃棄土坑であると考えられ、最下層で検出した種子は16種類あり、イネなどを含む。また、開けた場所に生育する植物種子が含まれるため、当時は完全に耕地もしくは草地であったことが窺える。また、分析によると中世以降の遺跡で出土するメロン類の種子はマクワウリ・シロウリが大半を占める傾向にあるようで、分析結果はこれを支持するものとなっている。また、炭化したイネが確認されているが、当調査地内で明らかな焼土層はなく、2次焼成を受けた遺物がほぼ出土していないため、別場所で炭化したものを廃棄したか、土坑内で炭化したものと考えられる。そして、近世以降も耕作地として利用され、現代まで継続していたと考えられる。

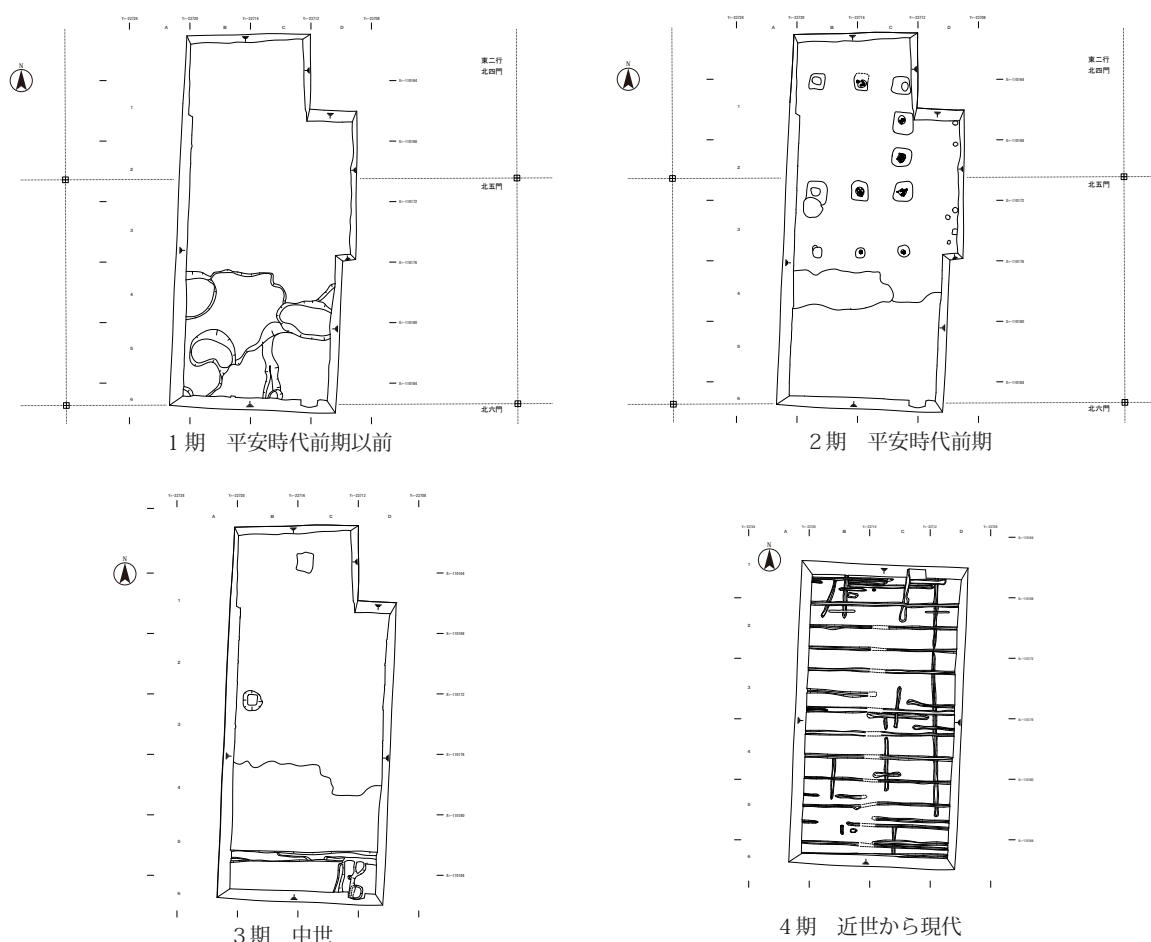


図44 調査地遺構変遷図(1:500)

第3節 まとめ

朱雀院は『拾芥抄』中に「累代後院、或號四条後院、三条北南、朱雀西四町、四条北、西坊城東」となっているが、同右京図では三条南、朱雀西、四条北、皇嘉門東の東西2町、南北4町の計8町となっている。そして、朱雀院は嵯峨上皇（786～842年 在位 809～823年）によって譲位後の御所として創建されたと考えられている²¹⁾。しかし、嵯峨上皇には冷然院や嵯峨院などの離宮があり、朱雀院はこれらほど重要視されていなかったようである。実際、文献上では嵯峨上皇との関連する記録はみられない。だが、嵯峨上皇の皇后（橘嘉智子（786～850年））との関連は確認でき9世紀前半には朱雀院が存在していたことが知れる。

文献上では、宇多天皇（867～931 在位 887～897）在位時に本格的に後院として利用するために修造もしくは新造され、以後、醍醐天皇・朱雀天皇・村上天皇の4代に亘って後院、もしくは行幸の地として頻繁に利用されるようになる。そして、現在の朱雀院の推定敷地内に施設が整ったのは宇多天皇による修造もしくは新造の時期と考えられている²²⁾。

今回、調査地で検出した掘立柱建物跡1は先述したように梁行三間、桁行三間以上の身舎で、南側に庇が付く東西棟の建物跡であった。また、時期としては京都Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階に属する土器が出土しているため、9世紀前半には存在していたと考えられる。そして、同じ四条一坊七町内の調査地北側には嵯峨上皇時に成立し、10世紀初に埋められた可能性がある溝状遺構がある²³⁾。この溝状遺構が調査地の建物跡と同時期に存在したならば、七町内では北側に溝状の施設がある配置となる。

また、改めて周辺の発掘調査の成果をみると、南東の四条一坊四町内では時期差のある2棟ないし3棟の建物跡が検出されている²⁴⁾。そして、平城京または長岡京から移転した、またはその廃材を利用していた可能性を推測されている。時期的には9世紀前半で『続日本後紀』仁明天皇 承和三（836）年五月癸亥条「以平城京内空闲地二百卅町奉充太皇太后朱雀院」との関連の可能性も指摘されている。また、鈴木久男氏はこの建物を1棟と考えられ、南北に庇の付く東西棟の建物跡に復元されており²⁵⁾その規模はかなり大きくなる。

そして、四条一坊一町内では6棟の建物跡群が検出²⁶⁾されており、いずれも平安時代前期とされているが、細かな時期は不明である。

個別の遺構の細かな時期は別として、これまで朱雀院推定敷地内では南北部分に建物の存在が確認されていたが、今回の調査において七町内でも建物跡が検出した。これにより、四町内の建物跡よりやや遅れると考えられるが、9世紀前半には朱雀院の推定敷地内において中央部分でも建物が存在していたことが確認できた。

また、実際の発掘調査事例が僅かであり、朱雀院が創建当初より東西二町、南北四町、計八町という広大な敷地を有し、その中で建物群がどのように変遷し展開していたのか、嵯峨上皇崩御後もしくは嵯峨上皇の皇后（橘嘉智子）崩御後、9世紀末の宇多天皇時まで実際にどれ程廃れて

いたのかは不明である。今回の調査では対象範囲に限りがあり遺構の全容を知ることができなかった。しかし、御所にみられる梁行三間の掘立柱建物跡が存在し、それが嵯峨上皇の存命した9世紀前半に建てられ、主要建物群の一部を構成する建物跡と考えられることは、この右京四条一坊七町跡で嵯峨上皇もしくは嵯峨上皇の皇后（橘嘉智子）の御所の存在が窺える。但し、嵯峨上皇譲位時点に朱雀院が既に創建されていたならば、調査地内は創建時には整地されていたと推測できるが、宅地としてはまだ利用されていなかったと考えられる。

今回の建物跡と他の建物跡と細かな関係や、調査地南側に広がる池状の落ち込みと周辺の池状堆積との関連や、落ち込みが一時期池そのものとして利用されていたかの問題がある。この先朱雀院についての解明には時間がかかるであろうが、今回の発掘調査により検出した掘立柱建物跡や遺物が現在の朱雀院に対する理解の一資料となることを期待する。

註

- 15) 宮町遺跡 30 次発掘調査現地説明会資料 信楽町教委員会 2002 年
宮町遺跡 40 次発掘調査現地説明会資料 信楽町教委員会 2012 年
- 16) 京都府教育庁指導部文化財保護課『埋蔵文化財発掘調査概報（1970）』京都府教育委員会 1970 年
- 17) 山中章・梅本康広『長岡京跡左京二条二坊十町』財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003
- 18) 「大内裏皇居全図」『平安通志巻5』京都市参事会 1895 年
- 19) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年
- 20) 久世康博「『平安京』域の「水」関係堆積の分布」『古代文化』第61巻第1号 財団法人 古代学協会 2009 年
- 21) 太田静六「朱雀院の考察」『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987 年
- 22) 註9に同じ
- 23) 鈴木久史「平安京四条一坊七町跡」『京都市内試掘調査報告』京都市文化市民局 2013 年
- 24) 田辺昭三「朱雀院跡発掘調査の成果について」『平安京研究No.1』平安京調査会 1974 年
永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究No.1』平安京調査会 1974 年
- 25) 鈴木久男「一九七八年発見の朱雀院跡掘立柱建物」西山良平 藤田勝也編『平安京と貴族の住まい』京都大学学術出版会 2012 年
- 26) 吉川義彦『発掘調査終了報告』関西文化財調査会 1997 年

参考文献

- 京都市『京都の歴史1 平安の新京』学芸書林 1973 年
京都市『史料 京都の歴史9 中京区』平凡社 1985 年

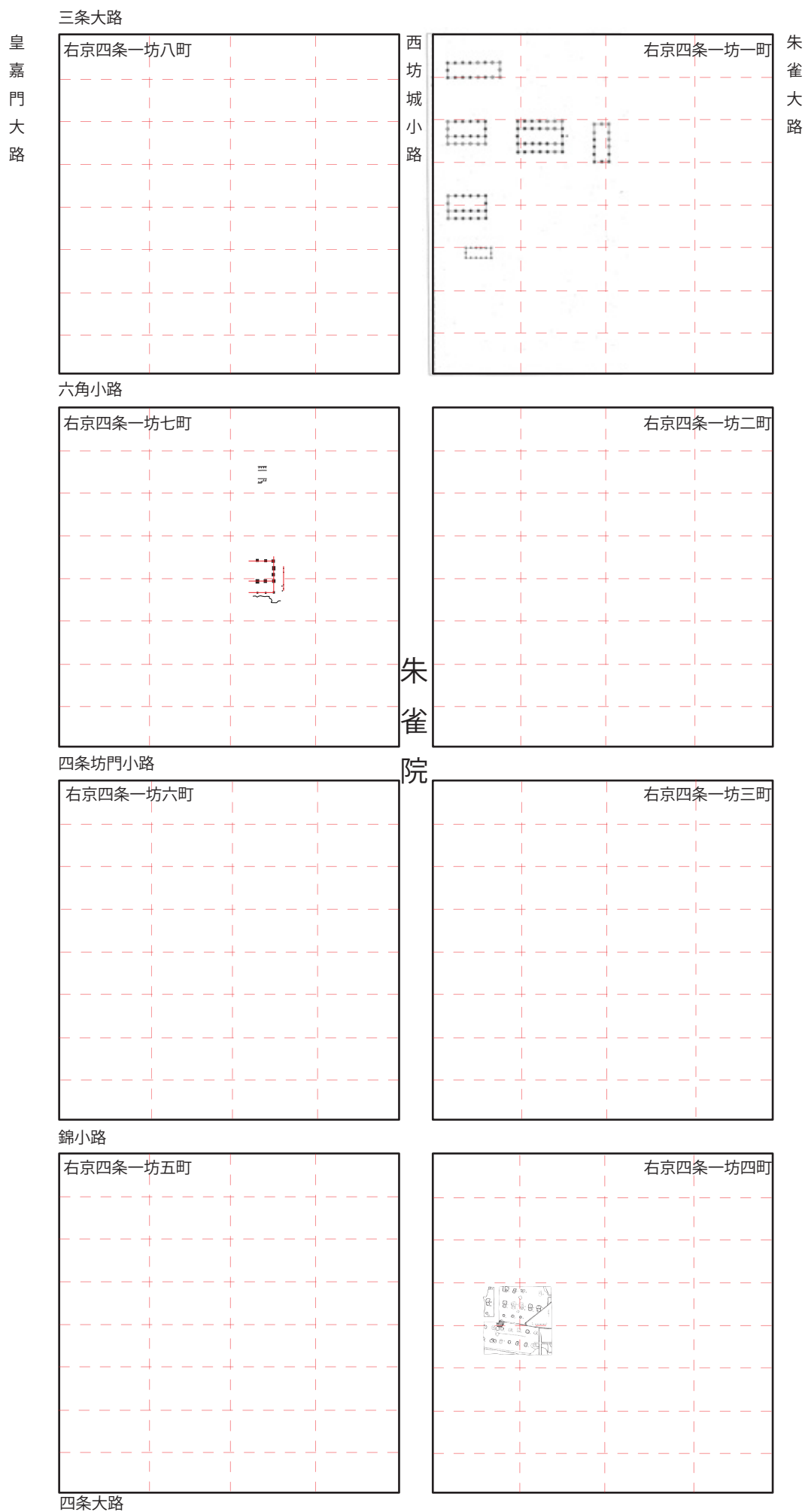


図 45 朱雀院関連遺構位置図 (1 : 1000)

附編 平安京右京四条一坊七町跡の種実分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

<目次>

はじめに

1. 試料	p. 57
2. 分析方法	p. 57
3. 結果	p. 57
4. 考察	p. 59
引用文献	p. 60

<表・図版一覧>

表 1 種実分析結果

図版 1 種実遺体

はじめに

今回の平安京右京四条一坊七町跡(朱雀院)の発掘調査では、平安時代前期の建物跡や中世の土坑などの遺構が検出されている。今回の調査では、中世の調査区における土地利用状況に関する情報を得ることを目的として、調査区で検出された土坑埋土の種実分析を実施する。

1. 試料

試料は、B-3 区 P42 の 8・10 層より採取された堆積物 1 点である。

2. 分析方法

試料 100cc(189g) を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後の試料を粒径別にシャーレに移して双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を拾い出す。

種実遺体の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等を参考に実施し、実施し、状態別(完形、破片(半分以下)、炭化)の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフオンで結んで表示する。種実遺体以外に確認された遺物は、一覧表の下部にまとめて表示する。分析後は、種実遺体を約 70%のエタノール溶液を入れた容器中で保存する。

3. 結果

結果を表 1 に示す。被子植物 16 分類群(広葉樹のサンショウ亜属(サンショウ?)、草本のイ

ネ、オヒシバ、イネ科 (小型半狭卵体、大型半卵体)、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、メロン類 (雑草メロン型、マクワ・シロウリ型、マクワ・シロウリ型 - モモルディカメロン型)、アカネ科、ナス、ゴマ、タカサブロウ)704 個の種実が抽出・同定された。その他に、木材、炭化材、昆虫類が確認された。分析残渣は、砂礫 (最大 3.7cm の垂角礫) を主体とし、植物片を含む。

栽培種は、イネの穎が 130 個、雑草メロン型の種子が 14 個、マクワ・シロウリ型の種子が 117 個、マクワ・シロウリ型 - モモルディカメロン型の種子が 6 個、メロン類の種子が 36 個、ナスの種子が 215 個、ゴマの種子が 2 個の、計 520 個が確認され、種実全体の 73.9% を占める。また、イネの穎 21 個には炭化が確認された。

栽培種を除いた分類群は、木本は、林縁や伐採地などの明るい場所に生育するサンショウ亜属 (おそらく落葉低木のサンショウ) の種子の破片が 121 個確認された。草本は、オヒシバ、イネ科 (小型半狭卵体、大型半卵体)、イヌタデ近似種、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、アカネ科、タカサブロウなどの、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群が計 63 個確認された。湿った場所に生育するタカサブロウが 1 個確認される以外は、やや乾いた場所に生育する分類群が多い。

種実遺体各分類群の写真を図版 1 に示し、主な分類群の形態的特徴等を以下に述べる。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

穎 (果) は淡～灰褐色、炭化個体は黒色の偏平な長楕円体。基部に径 1mm 程度の斜切状円柱形の果実序柄と 1 対の護穎を有し、その上に外穎 (護穎と言う場合もある) と内穎がある。外穎は 5 脈、内穎は 3 脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲粃を構成する。果皮は薄く、表面には顆粒状突起が縦列する。完形 2 個の大きさは、長さ 7.2mm、幅 2.5mm、厚さ 1.1mm と、長さ 7.0mm、幅 2.9mm、厚さ 1.0mm を測る。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子は淡～灰褐色、偏平な狭倒皮針形で、基部に倒「ハ」の字形の凹みがある。種皮表面には縦長の細胞が密に配列する。欠損がない種子 112 個の長さは、最小 4.9 ～最大 8.0 (平均 6.67 ± 標準偏差 0.61)mm、幅は 2.4 ～ 4.0 (平均 3.05 ± 0.29)mm、厚さは 0.6 ～ 2.0 (平均 1.44 ± 0.27) mm を測る。欠損 25 個を含む種子 137 個は、藤下 (1984) の基準による小粒の雑草メロン型 (長さ 6.1mm 未満) が 14 個 (10.2%)、中粒のマクワ・シロウリ型 (長さ 6.1 ～ 8.0mm) が 117 個 (85.4%)、マクワ・シロウリ型または大粒のモモルディカメロン型 (長さ 8.1mm 以上) の破片が 6 個 (4.4%) に分類される。なお、完全な状態の復元が不可能な破片をメロン類としている。

・ナス (*Solanum melongena* L.) ナス科ナス属

種子は灰黄褐色、偏平で歪な腎臓形で基部はやや肥厚し、くびれた部分に臍がある。種皮は柔らかく、表面には微細な星型状網目模様が臍から同心円状に発達する。欠損がない種子 65 個の長さは、最小 2.3 ～最大 3.3 (平均 2.81 ± 標準偏差 0.20)mm、幅は 2.9 ～ 3.9 (平均 3.40 ± 0.20)mm、厚さは 0.2 ～ 0.9 (平均 0.46 ± 0.15)mm を測る。

・ゴマ (*Sesamum indicum* L.) ゴマ科ゴマ属

種子は灰褐色、長さ 3.0mm、幅 1.8mm の扁平な倒卵形で基部はやや尖る。種皮は薄く、表面は粗面で不規則な網目状の模様がある。周縁に細い稜 (rim) を持つ個体もみられる。

表1. 種実分析結果

分類群	部位	状態	B-3区 P42 8・10層
木本			
サンショウ亜属(サンショウ?)	種子	破片	121
草本			
イネ	穎	完形	1
		破片	87
		破片(基部)	21
		破片(基部) 炭化	21
オヒシバ	種子	完形	1
イネ科(小型半狭卵体)	果実	完形	3
		破片	1
イネ科(大型半卵体)	果実	完形	1
イヌタデ近似種	果実	完形	1
スベリヒユ	種子	完形	6
ナデシコ科	種子	完形	9
ヒユ属	種子	完形	24
雑草メロン型	種子	完形	14
マクワ・シロウリ型	種子	完形	110
		破片	7
マクワ・シロウリ型-モモルディカメロン型	種子	破片	6
メロン類	種子	破片	36
アカネ科	核	完形	3
		破片	13
ナス	種子	完形	97
		破片	118
ゴマ	種子	破片	2
タカサブロウ	果実	完形	1
その他			
木材			+
炭化材			+
昆虫類			+
分析量			100cc 189g

残渣：植物片+砂礫(最大3.7cm)

4. 考察

中世の土坑からは、栽培種のイネの穎、メロン類の種子、ナスの種子、ゴマの種子が確認され、種実遺体群の 3/4 を栽培種が占める組成を示した。最も多く出土したナスは、果実が食用される。ナスに次いで多いメロン類は、中粒種子のマクワ・シロウリ型が 89.8%、小粒種子の雑草メロン型が 10.2% の比率を示し、中世以降の遺跡出土メロン類の大半をマクワ・シロウリ型が占める傾向(藤下,1992 など)を支持する。当時利用されたメロン類には、複数の品種の存在が推定されるものの、その主体はマクワ・シロウリ型であったと示唆される。穀類のイネは、一部の穎が炭化していることから、火を受けたことが推定される。ただし、土坑内で炭化したのか、別の場所で炭化した穎が廃棄されたのかについては、分析段階で判断することはできないため、発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。ゴマは、食用、香料、食用油、灯油、医薬品等に幅広く利用され、中世以降の遺跡から種実遺体や花粉化石が確認されるようになる(パリノ・サーヴェイ株式会社,2011 など)。

これらの食用される栽培種は、耕作地で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明で

あるが、当時利用された植物質食料と示唆され、利用後に土坑内に廃棄された食料残滓と指摘される。

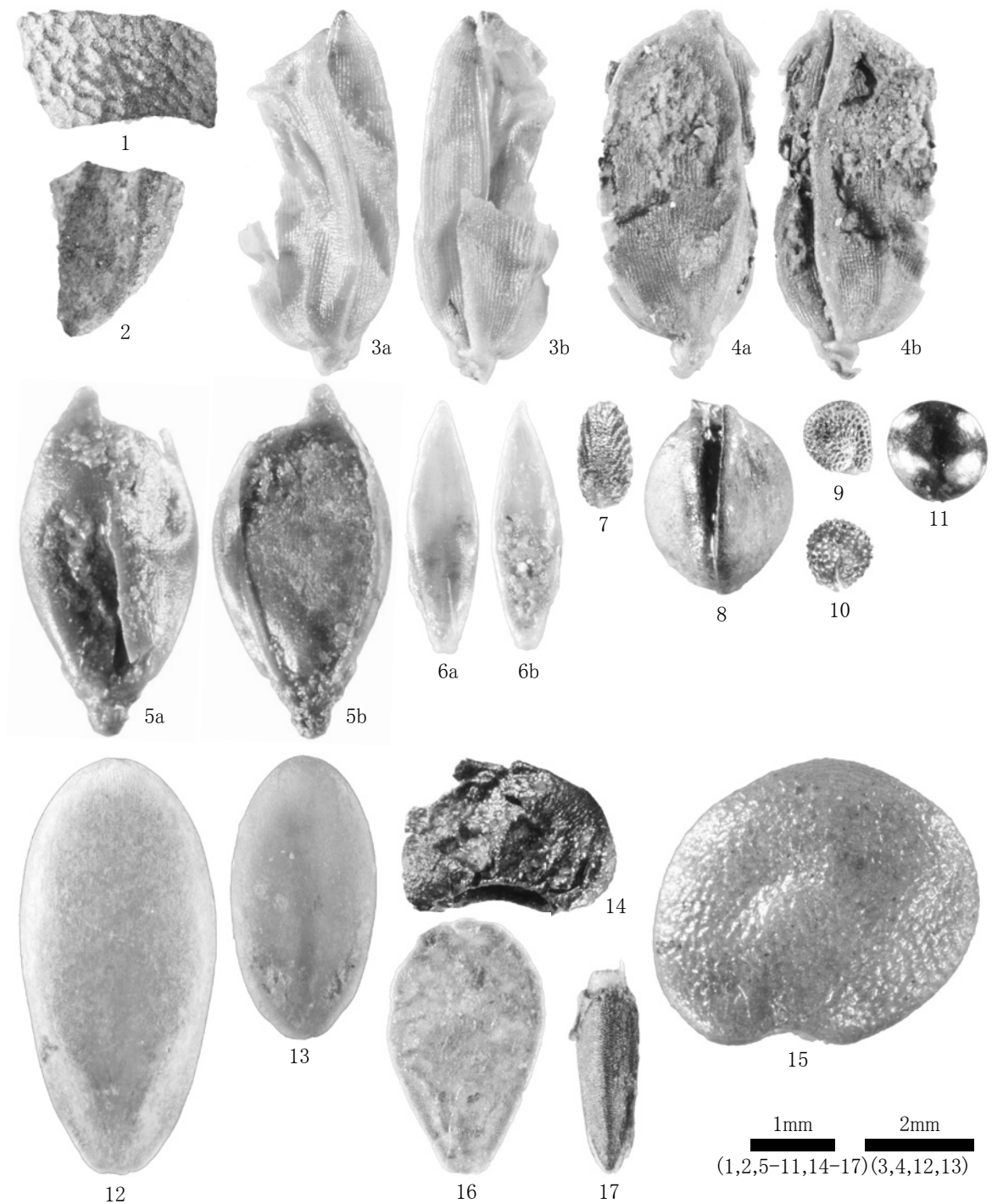
栽培種を除いた分類群は、木本は、林縁や伐採地などの明るい場所に生育する落葉広葉樹のサンショウ亜属（おそらくサンショウ）が確認された。当時の遺跡周辺域の森林の林縁部などに生育していたと考えられる。

草本は、人里植物に属する分類群が多く、タカサブロウなどの湿生植物や、オヒシバ、イネ科、イヌタデ（近似種）、スベリヒユ、ナデシコ科、ヒユ属、アカネ科などのやや乾いた場所にも生育する中生植物が確認された。当時の調査区周辺域は、明るく開けた草地環境であったと推定される。また、これらの種類のうち、やや乾いた場所にも生育可能な中生植物は畠雑草の種類でもあり、栽培植物の産状を含め、当該期の調査区の景観や環境を考える上で興味深い結果といえる。

引用文献

- 藤下典之 1984 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法 古文化財の自然科学的研究 古文化財編集委員会編 同朋舎 638-654.
- 藤下典之 1992 出土種子からみた古代日本のメロンの仲間—その種類、渡来、伝播、利用について— 考古学ジャーナル 354 ニュー・サイエンス社 7-13.
- 石川茂雄 1994 原色日本植物種子写真図鑑 石川茂雄図鑑刊行委員会 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 日本植物種子図鑑 東北大学出版会 642p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2011 微細物分析 山野里宿遺跡—（主）姫路上郡線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査書— 兵庫県文化財調査報告 第405冊 兵庫県立考古博物館編 兵庫県教育委員会 148-156.

図版1 種実遺体



1. サンショウ亜属(サンショウ?) 種子(B-3区 P42;8・10層)
2. サンショウ亜属(サンショウ?) 種子(B-3区 P42;8・10層)
3. イネ 穎(B-3区 P42;8・10層)
5. イネ科 果実(B-3区 P42;8・10層)
7. オヒシバ 種子(B-3区 P42;8・10層)
9. スベリヒコ 種子(B-3区 P42;8・10層)
11. ヒユ属 種子(B-3区 P42;8・10層)
13. 雑草メロン型 種子(B-3区 P42;8・10層)
15. ナス 種子(B-3区 P42;8・10層)
17. タカサブロウ 果実(B-3区 P42;8・10層)

4. イネ 穎(B-3区 P42;8・10層)
6. イネ科 果実(B-3区 P42;8・10層)
8. イヌタデ近似種 果実(B-3区 P42;8・10層)
10. ナデシコ科 種子(B-3区 P42;8・10層)
12. マクワ・シロウリ型 種子(B-3区 P42;8・10層)
14. アカネ科 核(B-3区 P42;8・10層)
16. ゴマ 種子(B-3区 P42;8・10層)

表9 遺物観察表(1)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
1	柱穴 40	土師器 杯か	(14.8)	(2.5)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁部内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部外面にかけヘラ ケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/8	c 手法
2	柱穴 40 掘形	土師器 杯 B か	(15.2)	(2.2)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面ヘラケズリ、口縁外面はナデ調 整。	口縁は外反し、端部を内側上方に引き 上げる。	1/10	c 手法
3	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(14.2)	(2.2)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	全体的に磨減しているが、外面はヘラケ ズリされているとみられる。	縁端部は内側に丸く収める。	1/10	c 手法 杯 B 蓋か
4	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(15.2)	(2.0)	(8.3)	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁にかけてヘラケズリ後、 口縁ナデ調整。	底部は肥厚し、口縁をわずかに外反さ せ、端部を内側に丸く収める。	1/10	c 手法
5	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(16.2)	(1.9)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から体部外面にかけてヘラケズ リ、口縁外面はナデ調整。	やや外反する体部で、口縁端部を丸く 収める。	1/8	c 手法
6	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(17.2)	(1.5)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁部内面にかけてナデ調 整、底部から体部外面にかけてヘラケズ リし、口縁部外面はナデ調整。	底部は肥厚し、口縁端部を内側に丸く 収め肥厚する。	1/10	c 手法
7	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(18.2)	(1.4)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙	口縁内面ナデ調整、外面はヘラケズリ。	内面にやや膨らみを持つ、口縁端部を 内側に丸く収める。	1/10	c 手法
8	柱穴 40 柱痕跡	土師器 皿	(18.4)	(1.9)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてヘラケズ リ。	薄めの器壁で、口縁端部を内側に丸く 収める。	1/12	c 手法 杯 B 蓋か
9	柱穴 40 掘形	土師器 杯もしくは 皿	—	(1.5)	(7.5)	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	底部内面から体部内面にかけてナデ調整、 底部外面から体部外面にかけてヘラケズ リ。	体部は直線状に立ち上がる。	1/8	c 手法
10	柱穴 41 柱痕跡	土師器 皿	(15.6)	(1.8)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から体部外面にかけてヘラケズ リ、口縁外面はナデ調整。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/10	c 手法
11	柱穴 43 柱痕跡	土師器 杯	(15.2)	(2.2)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	体部外面に膨らみを持ち、体部から口 縁にかけて緩やかに外反し、口縁端部 は上方に引き上げる。	1/10	e 手法
12	柱穴 43 掘形	土師器 杯	(15.2)	(2.0)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁にかけてヘラケズリ、体 部外面は一部ナデ調整残る。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/12	c 手法
13	柱穴 43 掘形	土師器 杯	(16.8)	(2.7)	—	内外面ともに 10YR5/2 灰黄褐色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調 整、体部外面ヘラケズリ、口縁外面はナ デ調整。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/9	c 手法
14	柱穴 43 掘形	土師器 杯	(17.2)	(3.2)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はナデ調整、指押さえの痕残る。 口縁外面はナデ調整。	口縁はやや外反し、端部は内側に丸く 収める。	1/8	e 手法
15	柱穴 43 掘形	灰釉陶器 皿	(15.0)	(3.0)	(7.0)	内面は 7.5Y6/2 灰オリーブ 色、外面は 2.5 Y 7/2 灰白色	内面は施釉、体部外面から口縁にかけて ロクロナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は外反しな がら立ち上がり、口縁をやや内側に曲 げ、端部は外反する。	口縁 1/12 底部 1/2	黒笹 14 号窯 形式
16	柱穴 44 掘形	土師器 杯	(16.2)	(3.2)	—	内外面ともに 7.5YR7/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラケズリ、ナデ調整、指押 さえの痕残る。口縁外面はナデ調整。	体部は緩やかに外反し、口縁端部を内 側上方に引き上げる。	1/12	c 手法
17	柱穴 44 掘形	土師器 杯	(16.4)	(3.8)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラケズリ、ナデ調整、指押 さえの痕残る。口縁外面はナデ調整。	体部は緩やかに外反する。	1/12	c 手法
18	柱穴 44 掘形	土師器 杯	(16.8)	(1.9)	—	内外面ともに 7.5YR7/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/9	c 手法
19	柱穴 44 掘形	土師器 皿	(15.2)	(1.6)	—	内面は 10YR8/2 灰白色 外面は 7.5YR7/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁にかけてヘラケズリ。	口縁端部を上方に引き上げる。	1/12	c 手法
20	柱穴 44 一段下げ	土師器 皿	(15.4)	(1.7)	—	内面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	口縁端部はやや外反する。	1/7	c 手法
21	柱穴 44 掘形	土師器 皿	(16.4)	(2.0)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/10	c 手法
22	柱穴 44 掘形	須恵器 鉢	(25.8)	(2.5)	—	内外面ともに 2.5Y6/1 黄灰色	体部内面から口縁内面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整	口縁端部は外側に傾斜する面をもつ。	1/14	

表 10 遺物観察表 (2)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
23	柱穴 45 抜き取り	土師器 椀	(15.0)	(2.3)	—	内面は 2.5Y7/2 灰黄色、 外面は 2.5Y7/3 浅黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/12	c 手法
24	柱穴 45 抜き取り	土師器 椀	(15.4)	(3.0)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面は指押さえ、ナデ調整、口縁外 面はナデ調整。	体部下位の器壁は薄く、口縁端部を上 方に引き上げる。	1/8	e 手法
25	柱穴 45 一段下げ	土師器 杯 B か	(23.0)	(5.6)	—	内外面ともに 10YR6/2 灰黄褐色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラズリ、口縁外面はナデ 調整。	体部上位は肥厚し、口縁は緩やかに外 反し、端部を内側上方に引き上げる。	1/12	c 手法
26	柱穴 45 抜き取り	土師器 杯 B	(24.9)	(5.7)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラズリ、体部最下位外面 はナデ調整、口縁外面はナデ調整。	口縁は緩やかに外反し、端部を内側上 方に引き上げる。	1/10	c 手法
27	柱穴 45 抜き取り	土師器 皿	—	(1.45)	—	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	口縁端部は外反する。	1/12	e 手法
28	柱穴 45 一段下げ	土師器 皿	(13.6)	(1.3)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面は指押さえ、ナデ調整、口縁外 面はナデ調整。	口縁端部は外反する。	1/10	e 手法
29	柱穴 45 抜き取り	土師器 皿	(14.6)	(1.7)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラズリ、口縁外面はナデ 調整。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/10	c 手法
30	柱穴 45 抜き取り	土師器 皿	(15.3)	(1.7)	—	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラズリ、口縁外面はナデ 調整。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/12	c 手法
31	柱穴 45 抜き取り	須恵器 皿	15.1	1.7	11.2	内外面ともに 2.5Y8/1 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてクロクロ ナデ調整、体部外面から口縁外面はクロ ナデ調整。	体部は大きく外反して立ち上がり、口 縁は内側に緩やかに立ち上がる。	ほぼ完形	
32	整地層 上層	土師器 椀	(12.9)	2.8	(4.5)	内外面ともに 10YR8/1 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面はナデ調整。	体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁 端部を内側上方へ引き上げる。	1/2	e 手法 口縁に煤付着
33	整地層 上層	土師器 椀	(13.8)	3.0	(7.6)	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	全体的に磨減してるが、底部内面から口 縁内面にかけてナデ調整、底部外面から 口縁外面にかけてヘラズリ。	薄い器壁で、体部は緩やかに湾曲して 立ち上がる。	1/5	c 手法
34	整地層 上層	土師器 杯 B	—	(2.6)	(10.0)	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から体部内面にかけてナデ調整、 磨減しているが底部外面から口縁部外面 にかけてヘラズリとみられる。	高台は断面台形状で、体部は外反しな がら立ち上がる。	1/9	c 手法か
35	整地層 上層	土師器 杯 B	—	(1.6)	(10.4)	内面は 10YR3/1 黒褐色、 外面は 10YR7/4 にぶい黄橙 色	体部外面はナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は外反しな がら立ち上がる。	1/3	内面に漆付着
36	整地層 上層	土師器 皿	(13.7)	(1.3)	(10.3)	内面は 10YR8/3 浅黄橙色、 外面は 10YR7/1 灰白色	底部内面から口縁にかけてナデ調整、体 部外面から口縁外面はナデ調整。	全体に不均整で、口縁端部を丸く収め る。	1/8	e 手法
37	整地層 上層	土師器 皿	(16.0)	1.55	(12.4)	内面は 10YR6/1 褐灰色、 外面は 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁外面かけてヘラズリ。	浅い器高で、体部は緩やかに外反して 立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。	1/7	c 手法
38	整地層 上層	土師器 皿	(16.0)	(2.3)	—	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙色	全体的に磨減してるが、体部内面から口 縁内面にかけてナデ調整、体部外面から 口縁外面かけてナデ調整とみられる。	体部上位はやや肥厚、口縁端部は内側 に丸く収める。	1/12	e 手法
39	整地層 上層	土師器 皿	16.2	1.6	11.5	内面は 10YR8/4 浅黄褐色、 外面は 10YR7/6 明黄褐色	全体的に磨減してるが、体部内面から口 縁内面にかけてナデ調整、体部外面から 口縁外面はナデ調整とみられる。	浅い器高で、体部は外反して立ち上 がり口縁端部を丸く収める。	1/2	e 手法か
40	整地層 上層	土師器 皿	(18.0)	(2.3)	(11.3)	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁にかけてナデ調整、外 面は磨減している。	体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁 端部を内側に丸く収める。	1/12	
41	整地層 上層	土師器 甕	(17.2)	(5.2)	—	内面は 2.5Y7/4 浅黄色、 外面は 2.5Y6/2 灰黄色	体部内面は磨減、口縁内面はナデ調整、体 部外面にハケ目、口縁外面はナデ調整。	口縁は湾曲しながら大きく外反し、端 部を内側に折り曲げて収める。	1/5	
42	整地層 上層	土師器 甕	(17.2)	(6.8)	—	内面は 10YR7/2 にぶい黄橙 色、外面は 7.5YR7/3 にぶい 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラズリ、口縁外面はナデ 調整。	体部は湾曲し、口縁は外反する、端部 を内側上方に引き上げる。	1/6	外面に煤付着
43	整地層 上層	土師器 甕	(27.5)	(4.6)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面はナデ調整。	口縁は外反し、端部を内側に丸く収め る。	1/8	
44	整地層 上層	土師器 甕	(28.0)	(3.3)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	口縁内面にハケ目、体部外面はハケ目、口 縁外面はナデ調整。	口縁は肥厚して大きく外反し、端部は 丸く収める。	1/5	

表 11 遺物観察表 (3)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
45	整地層 上層	須恵器 杯蓋	(16.8)	(3.2)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はヘラケズリ、口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	宝珠形つまみが付く。天井部内面つまみ部分で肥厚する。口縁端部は外反する。	口縁部 1/2 欠損	
46	整地層 上層	須恵器 杯蓋	(18.0)	(1.6)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はヘラケズリ、口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	天井部は平坦で、口縁は屈曲し、端部は外に開く。	1/8	
47	整地層 上層	須恵器 杯蓋	(19.2)	(2.4)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	天井部は湾曲する。、口縁は屈曲し、端部は外に開く。	1/4	
48	整地層 上層	須恵器 杯蓋	(19.3)	(2.0)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	天井部は平坦で、口縁は屈曲し、端部は外に開く。	1/10	
49	整地層 上層	須恵器 杯 B	—	(2.1)	(10.4)	内外面ともに 5 Y6/1 灰色	体部内面はロクロナデ調整、体部外面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	高台は断面四角形で、体部は上方に立ち上がる。	1/5	
50	整地層 上層	須恵器 皿	(10.8)	(2.1)	—	内外面ともに 10YR7/1 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整、体部外面から口縁内面にかけてロクロナデ調整。	緑釉陶器皿に似た形状。 体部は湾曲し、口縁は外反する。	1/10	
51	整地層 上層	須恵器 壺	(7.2)	(3.5)	—	内外面ともに N6/0 灰色	口縁内面はロクロナデ調整、縁内面はロクロナデ調整。	口縁は外反し、端部は窪みのある面を持つ。	口縁 1/2	
52	整地層 上層	須恵器 平瓶	—	—	—	内外面ともに N6/0 灰色	体部内面はロクロナデ調整、体部外面から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	体部は緩やかに上方に立ち上がり、角張る肩をもつ。	体部 1/10 か	
53	整地層 上層	須恵器 鉢	—	(7.0)	(10.4)	内面は 10YR8/1 灰白色、 外面は 5Y5/1 灰色	底部に糸切痕。底部内面から体部内面にかけてロクロナデ調整、体部外面はロクロナデ調整。	体部は外反し、直線的に立ち上がる。	1/5	焼成不良
54	整地層 上層	須恵器 鉢	—	(4.0)	(11.8)	内外面ともに 2.5Y7/1 灰白色	底部内面から体部内面にかけてロクロナデ調整、体部外面はロクロナデ調整。	厚みのある底部で高台が付かない。体部は緩やかに外反して立ち上がる。	底部 1/2	
55	整地層 上層	緑釉陶器 椀	—	(1.5)	(4.2)	素地は内外面ともに 2.5Y7/2 灰白色、 釉は 2.5Y7/1 灰白色	底部に糸切痕。内外面施釉、全体的に磨減している。	小型の椀である。削り出しの平高台で、体部は緩やかに外反して立ち上がる。	底部 1/2	山城産
56	整地層 上層	緑釉陶器 椀	—	(1.9)	(5.6)	素地は内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色、 釉は 10Y7/1 灰白色	内外面施釉、全体的に磨減している。	削り出しの平高台で、体部は湾曲しながら立ち上がる。	底部 一部欠損	山城産
57	整地層 上層	緑釉陶器 椀	—	(1.6)	(6.0)	内外面ともに 7.5Y6/2 灰オリーブ色	内外面ともに施釉。	削り出しの蛇の目高台で、体部は湾曲しながら立ち上がる。	1/4	山城産
58	整地層 上層	緑釉陶器 椀	—	(2.85)	(9.5)	素地は内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色、 釉は 10Y7/1 灰白色	内外面施釉、全体的に磨減している。	底部は中心に向かって器壁が薄くなる。削り出しの平高台で、体部は湾曲しながら立ち上がる。	1/4	山城産
59	整地層 上層	緑釉陶器 皿	(14.8)	(2.5)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	内外面施釉、全体的に磨減している。	体部は湾曲し、口縁は大きく外反して平坦になる。口縁端部は丸く収める。	1/9	山城産か
60	整地層 上層	緑釉陶器 皿	(15.0)	(2.2)	—	素地は内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色、 釉は 7.5Y5/2 灰オリーブ色	内外面施釉、全体的に磨減している。	体部は湾曲し、口縁は大きく外反して平坦になる。口縁端部は丸く収める。	1/8	山城産
61	整地層 上層	緑釉陶器 盤か	—	(2.6)	—	素地は内外面ともに 5Y6/1 灰色、 釉は 5Y7/4 浅黄色	体部内面に輪花文。内外面ともに施釉。	口縁は外反し、端部は内側上方に引き上げる。	不明	東海産か
62	整地層 上層	灰釉陶器 椀	(18.4)	(3.3)	—	素地は 2.5Y7/1 灰白色、 釉は 2.5Y7/2 灰黄色	内外面ともに施釉。体部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整、体部外面から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	厚い器壁で、体部は湾曲する。口縁は大きく外反して平坦になる、端部は丸く収める。	1/8	
63	整地層 上層	灰釉陶器 椀	—	(1.7)	(7.4)	素地は 2.5Y7/1 灰白色、 釉は 10Y5/2 オリーブ灰色	内外に施釉。体部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整、体部外面から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	断面台形状の貼り付けの高台で、外側にやや開く。体部は湾曲して立ち上がる。	1/3	黒笹 14 号窯 形式
64	整地層 上層	灰釉陶器 皿	—	(1.65)	(6.7)	素地は 2.5Y7/1 灰白色、 釉は 7.5Y7/2 灰白色	内外に施釉。底部内面から体部内面にかけてロクロナデ調整、体部外面はロクロナデ調整。	断面四形状の貼り付けの高台で、内側にやや入る。体部は大きく外反し、湾曲しながら立ち上がる。	1/2	黒笹 14 号窯 形式
65	整地層 上層	灰釉陶器 皿	(14.6)	2.4	7.6	素地は 2.5Y7/1 灰白色、 釉は 2.5Y7/2 灰黄色	内外に施釉。底部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整、体部外面から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	断面台形状の貼り付けの高台で、外側にやや開く。体部は大きく外反し、湾曲して立ち上がり、屈曲して口縁となる。	口縁 1/8 底部 1/2	黒笹 14 号窯 形式
66	整地層 上層	灰釉陶器 段皿	(15.6)	1.7	(8.0)	素地は 2.5Y7/1 灰白色、 釉は 2.5Y7/2 灰黄色	内外面ともに施釉。体部内面から口縁内面にかけてロクロナデ調整、体部外面から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	断面台形状の貼り付けの高台で外側にやや開く。体部から口縁端部は緩やかな傾斜で、底部との間に小さな段を持つ。	口縁 1/5 底部 1/5	

表 12 遺物観察表 (4)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
67	溝状 落込み	土師器 椀	(12.6)	(2.9)	—	内外面ともに 7.5YR6/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/6	c 手法
68	溝状 落込み	土師器 椀	(13.2)	(3.5)	—	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は湾曲して立ち上がる。	1/10	c 手法 外面に煤付着
69	溝状 落込み	土師器 椀	(13.4)	(3.0)	(6.3)	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は直線的に立ち上がる。	1/2	c 手法
70	溝状 落込み	土師器 椀	(13.6)	(3.8)	(7.4)	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙色	全体的に剥離しているが、底部内面から 口縁内面にかけてナデ調整、底部外面か ら口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は直線的に立ち上がる	1/3	c 手法
71	溝状落込 み	土師器 椀	(13.8)	(2.8)	—	内面は 10YR5/2 灰黄褐色、 外面は N2/0 黒色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面はヘラケズリ、口縁部外面はナ デ調整。	薄い器壁で、体部は直線的に立ち上がる。 。	1/6	c 手法 外面に煤付着
72	溝状 落込み	土師器 椀	(14.0)	(2.6)	—	内外面ともに 7.5YR7/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラケズリ、口縁部外面はナ デ調整。	体部は湾曲して立ち上がる、口縁は屈 曲する。	1/8	c 手法
73	溝状 落込み	土師器 椀	(14.2)	(2.5)	—	内外面ともに 7.5YR7/2 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は直線的に立ち上がる。口縁部は やや外反する。	1/6	c 手法
74	溝状 落込み	土師器 椀	(14.2)	(2.45)	—	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ	口縁部はやや外反し、端部を内側上方 に引き上げる。	1/4	c 手法
75	溝状 落込み	土師器 椀	(14.3)	4.2	(7.4)	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側上方に引き上げる。	1/5	c 手法
76	溝状 落込み	土師器 椀	(14.4)	(3.4)	—	内外面ともに 7.5YR6/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/10	c 手法
77	溝状 落込み	土師器 椀	(14.6)	(2.8)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部直線的に立ち上がる。外面に煤付 着。	1/6	c 手法
78	溝状 落込み	土師器 杯	(15.5)	(3.25)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/8	c 手法
79	溝状 落込み	土師器 杯	(15.9)	(4.0)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/12	c 手法
80	溝状 落込み	土師器 杯	(16.0)	(3.2)	—	内面は 10YR7/2 にぶい黄橙 色、外面は 7.5YR6/4 にぶい 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は直線的に立ち上がる。	1/12 以下	c 手法
81	溝状 落込み	土師器 杯	(16.3)	(2.6)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/8	c 手法
82	溝状 落込み	土師器 杯 B	(16.8)	(4.3)	(8.8)	内外面ともに 10YR8/1 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	高台は断面三角形で、体部は直線的 に立ち上がる。	1/10	c 手法
83	溝状 落込み	土師器 杯	(17.2)	3.5	8.4	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁部やや外反し、端部を丸く収める。	1/5	c 手法
84	溝状 落込み	土師器 杯	(17.4)	(2.4)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ	口縁端部を丸く収める。	1/10	c 手法
85	溝状 落込み	土師器 杯	(17.8)	(4.0)	(9.8)	内面は 7.5YR7/4 にぶい橙色、 外面は 10YR8/2 灰白色	磨減しているが、体部内面から口縁内面 にかけてナデ調整、底部外面から口縁部 にかけてヘラケズリ	口縁部やや外反し、端部を丸く収める。	1/7	c 手法
86	溝状 落込み	土師器 杯	(18.0)	(4.0)	(10.7)	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	全体的に剥離しているが、体部内面から 口縁内面にかけてナデ調整、底部外面か ら口縁部にかけてヘラケズリ。	高台は断面三角形で、口縁端部は内 側に丸く収める。	口縁 1/7 底部 1/4	c 手法 内外面に煤付着
87	溝状 落込み	土師器 杯	(18.0)	(3.8)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面はヘラケズリ、口縁部外面はナ デ調整。	口縁端部を丸く収める。	1/8	c 手法
88	溝状 落込み	土師器 杯	(21.4)	(3.8)	—	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	全体的に剥離しているが、体部内面から 口縁内面にかけてナデ調整、底部外面か ら口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を丸く収める。	1/4	c 手法

表 13 遺物観察表 (5)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
89	溝状 落込み	土師器 杯 B	—	(2.2)	(9.6)	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	磨減しているが、体部内面から口縁内面に かけてナデ調整、体部外面はヘラケズリ	高台は断面三角形状で、体部は湾曲し て立ち上がる。	1/5	c 手法
90	溝状 落込み	土師器 杯 B	—	(1.3)	(10.0)	内面は 10YR2/1 黒色、外面 は 10YR7/3 にぶい黄橙色		高台は断面台形状。	1/8	c 手法 内面に漆付着
91	溝状 落込み	土師器 杯 B	—	(1.9)	(10.1)	内面は 10YR2/1 黒色、外面 は 10YR7/3 にぶい黄橙色	体部外面はナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は湾曲して 立ち上がる。	1/4	c 手法 内面に漆付着
92	溝状 落込み	土師器 杯 B	—	(1.3)	(13.0)	内面は 2.5Y7/2 灰黄色、外 面は 7.5YR7/6 橙色	底部内面はナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は湾曲して 立ち上がる。	1/6	c 手法
93	溝状 落込み	土師器 皿	(13.8)	(2.1)	—	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は湾曲して立ち上がる。	1/12	c 手法
94	溝状 落込み	土師器 皿	(15.0)	(2.0)	(7.9)	内外面ともに 7.5YR6/4 にぶい橙色	内面は磨減、底部外面から口縁部にかけ てヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/4	c 手法
95	溝状 落込み	土師器 皿	(15.0)	2.4	8.0	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/3	c 手法
96	溝状 落込み	土師器 皿	(15.4)	(2.3)	(9.4)	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。		1/4	c 手法 内面に煤付着
97	溝状 落込み	土師器 皿	(15.7)	2.1	11.9	内外面ともに 10YR6/1 褐灰色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/2	c 手法
98	溝状 落込み	土師器 皿	(16.0)	(2.1)	11.5	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/8	c 手法
99	溝状 落込み	土師器 皿	(16.2)	(1.8)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/12	c 手法
100	溝状 落込み	土師器 皿	16.5	2.4	10.2	内面は 7.5Y8/4 浅黄橙色、 外面は 10YR7/2 にぶい黄橙 色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	ほぼ完形	c 手法
101	溝状 落込み	土師器 皿	(17.2)	(2.1)	(12.8)	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/12	c 手法
102	溝状 落込み	土師器 皿	(17.4)	(2.6)	(14.2)	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	磨減しているが、底部内面から口縁内面 にかけてナデ調整、底部外面から口縁部 にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/2	c 手法
103	溝状 落込み	土師器 皿	(17.8)	(2.2)	(13.0)	内面は 7.5YR7/3 にぶい橙色、 外面は 10YR6/3 にぶい褐色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/4	c 手法
104	溝状 落込み	土師器 皿	17.9	2.25	(13.5)	内外面ともに 10YR6/2 灰黄褐色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/2	c 手法
105	溝状 落込み	土師器 皿	18.0	2.45	12.9	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	ほぼ完形	c 手法 内面に煤付着
106	溝状 落込み	土師器 皿	(18.3)	1.7	(13.8)	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/4	c 手法
107	溝状 落込み	土師器 皿	(18.4)	(2.35)	13.0	内外面ともに 10YR7/2 にぶい黄橙色	剥離しているが、底部内面から口縁内面 にかけてナデ調整、底部外面から口縁部 にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/6	c 手法
108	溝状 落込み	土師器 皿	(18.8)	(1.8)	(14.3)	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	内面は磨減、底部外面から口縁部にかけ てヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/4	c 手法
109	溝状 落込み	土師器 皿	(19.0)	(1.9)	(9.0)	内面は 10YR4/1 褐灰色、外 面は 2.5Y7/2 灰黄色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/3	c 手法
110	溝状 落込み	土師器 皿	(19.8)	(2.0)	(14.5)	内外面ともに 7.5YR8/4 浅黄橙色	磨減しているが、底部内面から口縁内面 にかけてナデ調整、底部外面から口縁部 にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/2	c 手法

表 14 遺物観察表 (6)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
111	溝状 落込み	土師器 皿	(20.0)	(2.5)	(9.1)	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	口縁端部を内側に丸く収める。	1/8	c 手法
112	溝状 落込み	土師器 盤	(27.6)	3.45	20.4	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	底部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 底部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	高台は断面台形状で、口縁端部を丸く 収める。	口縁 1/4 底部完形	c 手法
113	溝状 落込み	土師器 甕	(16.9)	(12.1)	—	内外面ともに 10YR6/2 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面にハケ目、口縁部外面はナデ調 整。	体部は湾曲する。口縁は外反する。端 部は丸みのある面を持ち、内側上方に 引き上げる。	1/8	外面に煤付着
114	溝状 落込み	土師器 甕	(21.6)	(3.2)	—	内面は 2.5Y7/2 灰黄色、外 面は 10YR2/1 黒色	口縁内面はナデ調整、口縁部外面はナデ 調整。	口縁は外反する。端部は丸みのある面 を持ち、内側に丸く収める。	口縁 1/12	外面に煤付着か
115	溝状 落込み	土師器 甕	—	(5.5)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	内面は剥離、外面はヘラケズリ。	体部は徐々に湾曲していく。	体部 1/10	
116	溝状 落込み	土師器 甕	(23.2)	(5.05)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面にハケ目、口縁部外面はナデ調 整。	口縁は外反する。端部は外側に傾斜す る面を持ち、内側上方に引き上げる。	口縁 1/8	
117	溝状 落込み	土師器 甕	(23.6)	(4.1)	—	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部外面にかけてナデ調 整。	口縁は外反する。端部は丸みのある面 を持ち、内側に丸く収める。	口縁 1/10	
118	溝状 落込み	土師器 甕	(25.2)	(4.8)	—	内外面ともに 10YR7/3 にぶい黄橙色	内外面ともに磨滅している。	口縁は大きく外反する。端部は丸み のある面を持ち、内側上方に引き上げる。	口縁 1/12	
119	溝状 落込み	土師器 高杯	(28.0)	(1.35)	—	内面は 7.5YR7/6 橙色、外面 は 10YR7/2 にぶい黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁部にかけてヘラケズリ。	体部は湾曲する。口縁端部は外側に傾 斜する面を持つ	杯部 1/12	
120	溝状 落込み	土師器 高杯	—	(9.3)	—	内外面ともに 7.5YR6/3 にぶい褐色	外面ヘラケズリ。	脚部柱は七面を持つ。	脚部柱 1/2 か	
121	溝状 落込み	土師器 高杯	—	(9.6)	—	内面は 7.5YR7/6 橙色、外面 は 10YR7/3 にぶい黄橙色	外面ヘラケズリ。	脚部柱は七面を持つ。	脚部柱 1/2 か	
122	溝状 落込み	土師器 高杯	—	(6.0)	—	内面は 10YR7/2 にぶい黄橙 色、外面は 7.5YR7/6 橙色	柱外面はヘラケズリ、裾にはハケ目。	脚部柱はやや丸みを帯び、九面を持つ。	脚部柱 1/4 か	
123	溝状 落込み	土師器 土錘	径 1.0 ～ 2.1	長さ 5.1	孔径 0.2 ～ 0.4	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	外面はナデ調整。	両端から中央に向かって膨らむ。	完形	
124	溝状 落込み	黒色土器 A 類 椀	(15.8)	(3.15)	—	内面は N1.5/0 黒色、外面は 10YR5/2 灰黄褐色、N1.5/0 黒色	体部内面から口縁内面にかけてヘラミガ キ、体部外面から口縁部にかけてヘラケ ズリ。	体部は湾曲する。	1/10	
125	溝状落込 み	黒色土器 A 類 椀	(16.2)	(4.15)	(7.4)	内面は N1.5/0 黒色、外面は 10YR8/2 灰白色、N1.5/0 黒 色	底部内面から口縁内面にかけてヘラミガ キ、体部外面から口縁部にかけてヘラケ ズリ。	高台は断面三角形で、体部は湾曲し、 口縁端部は外反する。	口縁 1/3 底部 1/4	
126	溝状 落込み	黒色土器 A 類 椀	(16.4)	(3.1)	—	内面は N1.5/0 黒色、外面は 10YR8/2 灰白色、N1.5/0 黒 色	体部内面から口縁内面にかけてヘラミガ キ、体部外面から口縁部にかけてヘラケ ズリ。	体部は湾曲し、口縁端部は外反する。	1/5	
127	溝状 落込み	黒色土器 A 類 椀	—	(1.2)	(6.3)	内面は N1.5/0 黒色、外面は 10YR8/2 灰白色	底部内面はヘラミガキ。	高台は断面三角形。	1/3	
128	溝状 落込み	黒色土器 A 類 椀	—	(1.2)	(6.4)	内面は N1.5/0 黒色、外面は 10YR8/2 灰白色	底部内面はヘラミガキ。	高台は断面三角形。	3/4	
129	溝状 落込み	須恵器 杯 B 蓋	(16.8)	(1.8)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はロク ロナデ調整、天井部内面から口縁内面に かけてロクロナデ調	端部は棒状のもので削られ二段になる。	1/10	内面に墨付着 転用硯か
130	溝状 落込み	須恵器 杯 B 蓋	(18.4)	(1.2)	—	内外面ともに N6/0 灰色	口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面 から口縁内面にかけてロクロナデ調整	天井部は平坦で、口縁は屈曲し、端部 は外に開く。	1/6	内面に墨付着 転用硯か
131	溝状 落込み	須恵器 杯 B 蓋	(18.6)	(2.3)	—	内外面ともに 10Y4/1 灰色	口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面 から口縁内面にかけてロクロナデ調整	天井部は湾曲し、口縁は屈曲し、端部 は外に開く。	1/10	
132	溝状 落込み	須恵器 杯 B 蓋	(18.8)	(1.3)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はロク ロナデ調整、天井部内面から口縁内面に かけてロクロナデ調整	天井部は中心に向かって下がる。口縁 は屈曲し、端部は外に開く。	1/9	内面に墨付着 転用硯か

表 15 遺物観察表 (7)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
133	溝状 落込み	須恵器 杯 B 蓋	(19.2)	(1.9)	—	内面は N6/0 灰色、外面は N5/0 灰色	口縁外面はロクロナデ調整、天井部内面 から口縁内面にかけてロクロナデ調	天井部は平坦で、口縁は屈曲し、端部 は外に開く。	1/10 以下	
134	溝状 落込み	須恵器 杯	12.0	3.0	8.2	内外面ともに 10YR 8/1 灰色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	体部は直線的に立ち上がる。	3/4	外面に煤付着 焼成不良
135	溝状 落込み	須恵器 杯	(12.8)	(3.1)	(9.0)	内外面ともに N7/0 灰色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	体部は直線的に立ち上がる。	1/4	
136	溝状 落込み	須恵器 杯 B	17.6	7.25	11.1	内外面ともに 7.5Y5/1 灰色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は直線的に 立ち上がる。	口縁 3/4 底部 1/2	
137	溝状 落込み	須恵器 杯 B	(18.7)	7.5	(12.8)	内外面ともに 2.5Y6/1 黄灰色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は直線的に 立ち上がる。	口縁 1/12 底部 1/8	
138	溝状 落込み	須恵器 杯 B	(18.8)	7.15	(12.5)	内外面ともに N5/0 灰色	底部内面はナデ調整、体部内面から口縁 外面にかけてロクロナデ調整、体部外面 から口縁外面にかけてロクロナデ調整。	器壁は薄く、高台は断面台形状で、体 部は湾曲しながら立ち上がる。	口縁 1/8 底部 1/2	
139	溝状 落込み	須恵器 杯 B	(18.9)	8.4	(12.5)	内外面ともに N7/0 灰白色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	高台は断面四形状で、体部は直線的に 立ち上がる。	口縁 1/4 底部 1/6	
140	溝状 落込み	須恵器 杯 B	—	(3.9)	(10.6)	内外面ともに 10YR6/1 灰色	全体的に磨滅しているが底部内面から体 部外面にかけてロクロナデ調整、体部外 面はロクロナデ調整。	高台は断面四形状で、体部は直線的に 立ち上がる。	1/5	焼成不良
141	溝状 落込み	須恵器 杯 B	—	(1.25)	(10.9)	内面は 2.5Y7/2 灰黄色、外 面は 2.5Y6/1 灰黄色	底部内面はロクロナデ調整。	高台は断面四形状で、底部は中央に向 かって隆起する。	1/8	
142	溝状 落込み	須恵器 皿	(14.4)	(1.75)	(11.7)	内外面ともに N5/0 灰色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	底部は中央に向かって隆起し、体部は 直線的に立ち上がる。	口縁 1/5 底部 1/2	内面に墨付着 転用硯か
143	溝状 落込み	須恵器 皿	(14.6)	(1.8)	(12.0)	内外面ともに N7/0 灰白色	底部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	体部は直線的に立ち上がり、口縁端部 は平坦面をもつ。	口縁 1/4 底部 1/2	
144	溝状 落込み	須恵器 鉢	(27.5)	(5.3)	—	内外面ともに N6/0 灰色	体部内面から口縁外面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて ロクロナデ調整。	体部は湾曲し、口縁は外反する。口縁 端部は外側に傾斜し、窪みのある面を 持つ。	1/10 以下	
145	溝状 落込み	緑釉陶器 椀	—	(2.3)	6.0	内面は 7.5Y7/2 灰白色、外 面は 10YR8/4 浅黄橙色	底部外面に糸切痕、内面ヘラミガキ。内 面施釉、全体的に磨滅している。	削り出しの平高台で、体部は湾曲しな がら立ち上がる。	底部 完形	山城産
146	溝状 落込み	緑釉陶器 皿	—	(1.3)	(8.1)	内面は 10Y7/2 灰白色、外面 は 10Y6/2 オリーブ灰色	内外面にヘラミガキか。内外面施釉。	削り出しの輪高台で断面四角形状。	3/4	山城産
147	溝状 落込み	緑釉陶器 耳皿か	—	(1.1)	4.6	内外面ともに 7.5Y6/2 灰オリーブ色	底部外面に糸切痕。内外面施釉、全体的 に磨滅している。	削り出しの平高台で、体部は湾曲しな がら立ち上がる。	底部 完形	山城産
148	溝状 落込み	緑釉陶器 皿もしくは 三足皿か	(23.8)	(1.35)	—	内外面ともに 10Y7/2 灰白色	内外面施釉、全体的に磨滅している。	口縁外反し、平坦に近くなる。	1/8	山城産か
149	溝状 落込み	灰釉陶器 椀	(17.4)	5.3	(8.1)	内面は 5Y7/2 灰白色、外面 は 5Y7/1 灰白色	内面施釉。底部内面から口縁外面にかけ てロクロナデ調整、体部外面から口縁外 面にかけてロクロナデ調整。	高台は断面四角形状で、体部は湾曲す る。口縁端部は外反する。高台外面に 釉溜り。	口縁 1/8 底部 3/4	黒笹 14 号窯 形式
150	溝状 落込み	灰釉陶器 椀	(18.6)	(4.0)	—	内面は 5Y7/2 灰白色、外面 は 5Y7/1 灰白色	内面施釉。体部内面から口縁外面にかけ てロクロナデ調整、体部外面から口縁外 面にかけてロクロナデ調整。	体部は湾曲する。口縁端部は外反する。	1/12	黒笹 14 号窯 形式
151	整地層 下層	土師器 椀	(13.6)	(2.4)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてヘラケズ リ。	体部は外反する、口縁端部は丸く収め る。	1/6	c 手法
152	整地層 下層	土師器 椀	(15.8)	(3.6)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてヘラケズ リ。	体部上位は直線的に立ち上がる。口縁 端部は内側に丸く収める。	1/12	c 手法
153	整地層 下層	土師器 杯	(17.5)	(3.3)	—	内外面ともに 10YR8/3 浅黄橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてヘラケズ リ。	口縁はやや外反し、端部は内側に丸く 収める。	1/12	c 手法
154	整地層 下層	土師器 杯 B	—	(1.2)	(13.2)	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	底部内面から体部内面にかけてナデ調整、 体部外面はナデ調整。	高台は断面台形状で、体部は湾曲しな がら立ち上がる。	1/6	

表 16 遺物観察表 (8)

量目のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
		器形	口径	器高	底径					
155	整地層 下層	土師器 皿	(13.0) か	(1.7)	—	内外面ともに 5YR6/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	薄めの器壁で、口縁は屈曲して外反す る。口縁端部は内側上方に引き上げる。	1/12	e 手法
156	整地層 下層	土師器 皿	(13.5)	(1.9)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面は指押さえ、ナデ調整、口縁内 面はナデ調整、体部外面は指押さえ、ナ デ調整、口縁外面はナデ調整。	口縁は屈曲して外反する。端部を内側 上方に引き上げる。	1/10	e 手法
157	整地層 下層	土師器 皿	(17.0)	(2.0)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてヘラケズ リ。	体部は湾曲し、口縁端部は内側に丸く 収める。	1/10	c 手法
158	整地層 下層	土師器 高杯	—	(9.4)	—	内外面ともに 7.5YR8/6 浅黄橙色	全体的に磨滅しているが、杯部内面はナ デ調整、脚部外面はケズリ調整。	脚部柱は八面を持つ。	柱 1/2 杯 1/10	
159	整地層 下層	土師器 甕	(22.4)	(7.2)	—	内面は 7.5Y7/6 橙色、 外面は 10YR8/2 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面にかけてナデ調整。	体部は湾曲し、頸部に穿孔されている。 口縁は外反し、端部は内側に丸く収め る。	口縁 1/5	外面に煤付着
160	整地層 下層	土師器 甕	(26.7)	(4.9)	—	内外面ともに 10YR8/2 灰白色	体部内面はナデ調整、頸部内面はハケ目 口縁内面はナデ調整、体部外面は叩き目 残る、口縁外面はナデ調整。	口縁は外反、端部は平坦面を持つ。	口縁 1/12	
161	整地層 下層	黒色土器 A 類 杯	(16.2)	(2.4)	—	内面は 10YR1.7/1 黒色、 外面は体部 2.5Y6/2 灰黄色、 口縁 10YR1.7/1 黒色	体部内面から口縁内面はヘラミガキ、体部 外面はヘラケズリ、口縁外面はナデ調整。	薄い器壁で、体部は湾曲する。口縁端 部は丸く収める。	1/13	
162	整地層 下層	黒色土器 A 類 杯	(16.6)	(3.2)	—	内面は 10YR1.7/1 黒色、 外面は体部 2.5Y6/2 灰黄色、 口縁 10YR1.7/1 黒色	体部内面から口縁内面はヘラミガキ、体部 外面はヘラケズリ、口縁外面はナデ調整。	薄い器壁で、体部は湾曲する。口縁は やや外反し、端部は丸く収める。	1/12	
163	整地層 下層	黒色土器 A 類 杯	—	(0.6)	(6.6)	内面は 10YR1.7/1 黒色、 外面は 10YR1.7/3 にぶい黄 橙色	体部内面から口縁内面はヘラミガキ、体 部外面はヘラケズリ。	薄い器壁で、体部は湾曲しながら立ち 上がる。	1/5	
164	整地層 下層	須恵器 杯 B 蓋	(14.6)	(1.6)	—	内面は 7.5YR5/2 灰褐色、 外面は N6/0 灰色	天井部外面はつまみ貼り付け時ナデ調整 口縁外面はクロコナデ調整、天井部内面 から口縁内面にかけてクロコナデ調整。	貼付けの輪状のつまみが付く。天井部 は平坦で口縁部は屈曲し、端部は外に 開く。	1/10	
165	整地層 下層	須恵器 杯 B 蓋	(19.2)	(2.1)	—	内外面ともに N6/0 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はクロ コナデ調整、天井部内面から口縁内面に かけてクロコナデ調整。	天井部は湾曲する。口縁は屈曲し、端 部は外に開く。	1/10	
166	整地層 下層	須恵器 杯 B 蓋	(20.2)	(2.5)	—	内外面ともに 10Y6/1 灰色	天井部外面はナデ調整、口縁外面はクロ コナデ調整、天井部内面から口縁内面に かけてクロコナデ調整。	天井部は湾曲する。、口縁は屈曲し、端 部は外に開く。	1/7	
167	整地層 下層	須恵器 杯 A	—	(2.0)	(6.0)	内外面ともに 10Y7/1 灰白色	底部内面から体部外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面はクロコナデ調整。	底部は丸みを持ち、体部は緩やかに外 反して直線的に立ち上がる。	1/3	
168	整地層 下層	須恵器 杯 B	(12.6)	(4.7)	(8.0)	内外面ともに 10Y6/1 灰色	底部内面から口縁外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて クロコナデ調整。	高台は断面台形状。体部は緩やかに外 反して直線的に立ち上がる。	1/12	
169	整地層 下層	須恵器 杯 B	(15.8)	(3.9)	—	内外面ともに N6/0 灰色	体部内面から口縁外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて クロコナデ調整。	口縁は外反し、端部を丸く収める。	1/7	
170	整地層 下層	須恵器 杯 B	—	(1.4)	(9.6)	内外面ともに N6/0 灰色	底部内面から体部外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面はクロコナデ調整。	高台は断面四角形状。高台やや開き、 内側に自然釉がつく。	1/4	
171	整地層 下層	須恵器 杯 B	—	(1.85)	(10.0)	内外面ともに 10Y7/1 灰白色	底部内面から体部外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面はクロコナデ調整。	高台は断面四角形状で、内側に入る。	1/8	
172	整地層 下層	須恵器 鉢	(17.4)	(4.05)	—	内面は 2.5Y7/1 灰白色、 外面は 10YR5/1 褐灰色	体部内面から口縁外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて クロコナデ調整。	体部は湾曲し、口縁は外反する。口縁 端部は外側に傾斜のある面を持つ。	1/12	
173	整地層 下層	須恵器 鉢	(18.7)	(3.25)	—	内面は 7.5YR6/3 にぶい褐色、 外面は 10Y6/1 灰色	体部内面から口縁外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて クロコナデ調整。	薄い器壁で、体部は湾曲し、口縁は外 反する。口縁端部は外側に傾斜し凹み のある面を持つ	1/12	
174	整地層 下層	須恵器 鉢	(23.0)	(3.5)	—	内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色	体部内面から口縁外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面から口縁外面にかけて クロコナデ調整。	体部は湾曲し、口縁は外反する。口縁 端部は外側に傾斜のある面を持つ。	1/10	
175	整地層 下層	須恵器 鉢	—	(2.2)	(15.0)	内外面ともに 10Y6/1 灰色	底部内面から体部外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面はクロコナデ調整。	高台は付かない平坦な底部。	1/8	
176	整地層 下層	須恵器 鉢	—	(3.3)	(10.0)	内外面ともに 10Y6/1 灰色	底部内面から体部外面にかけてクロコナ デ調整、体部外面はクロコナデ調整。	台は付かない底部。底部は直線的に立 ち上がる。	1/3	

表 17 遺物観察表 (9)

法量のカッコ内は口径・底径は復元、器高は残存

挿図 番号	出土 遺構	器種 器形	口径 (cm)			色調	形成技法の特徴	形態の特徴	残存	備考
			口径	器高	底径					
177	整地層 下層	緑釉陶器 椀	—	(1.8)	(6.4)	素地は内外面ともに 2.5Y8/2 灰白色、 釉は 10Y7/2 灰白色	内外面施釉、全体的に磨減している。	底部は中心に向かって窪む。削り出し の平高台で体部は湾曲しながら立ち上 がる	1/2	山城産
178	土坑 52	土師器 皿	(9.5)	(1.5)	—	内外面ともに 2.5Y8/1 灰白色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面はナデ調整。	口縁は大きく外反し、端部を上方に引 き上げる。	1/8	
179	土坑 52	土師器 皿	(10.6)	(1.5)	—	内外面ともに 7.5YR7/4 にぶい橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面から口縁外面はナデ調整。	口縁は外反し、端部を丸く収める。	1/10	
180	溝 47	土師器 椀	(14.4)	(2.8)	—	内外面ともに 7.5YR6/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面はヘラケズリ、口縁外面はナデ 調整。	口縁は屈曲し、端部を内側上方に引き 上げる。	1/12	c 手法
181	溝 47	土師器 甕	(25.4)	(3.3)	—	内外面ともに 7.5YR6/6 橙色	体部内面から口縁内面にかけてナデ調整、 体部外面は指押さえ、ナデ調整、口縁外 面はナデ調整。	口縁は大きく外反し、端部はわずかに 屈曲する。	1/7	
182	溝 47	須恵器 杯	(14.8)	(3.5)	—	内外面ともに 2.5Y6/1 黄灰色	体部内面から口縁内面にかけてロクロナ デ調整、体部外面から口縁外面はロクロ ナデ調整。	体部から口縁端部にかけて緩やかに湾 曲する。	1/12	
183	溝 47	須恵器 皿	—	(1.5)	(6.0)	内外面ともに 2.5Y7/1 灰白色	底部内面から体部内面にかけてロクロナ デ調整、底部外面に糸切痕、体部外面は ロクロナデ調整。	厚みのある平高台で、体部は緩やかに 上方に立ち上がる。	1/7	
184	溝 47	緑釉陶器 椀	—	(2.2)	(7.0)	内外面ともに 2.5Y7/2 灰黄色	内外面ともに施釉。	断面が丸みのある四角形で、体部は湾 曲を持って立ち上がる。	1/7	
185	溝 47	白磁 小皿	(9.8)	(1.5)	—	内外面ともに 2.5Y7/1 灰白色	内外面ともに施釉。	口縁上位は平坦になるまで外反し、端 部を丸く収める。	1/12	

図 版



1 調査前全景 (南から)



2 近世～現代耕作溝検出状況 (北から)



1 近世～現代耕作溝完掘状況（北から）



2 土坑 42 土層断面（西から）



1 土坑 42 種子検出状況



2 土坑 42 完掘状況（南から）



1 土坑 52 土層断面（北から）



2 土坑 52 完掘状況（北から）



1 溝 47・溝 48 検出状況 (北東から)



2 溝 47・溝 48 完掘状況 (東南から)



1 掘立柱建物跡 1 検出状況（北東から）



2 掘立柱建物跡 1 検出状況（南から）

1 柱穴 38 根固め石 (東から)



2 柱穴 40 根固め石 (南から)



3 柱穴 43 柱根片・根固め石 (南から)





1 柱穴 44 柱根検出状況（南から）



2 溝状落込み土器検出状況（東南から）



1 溝状落込み土器検出状況（北西から）



2 掘立柱建物跡 1 完掘検出状況（北東から）



1 完掘状況（南から）



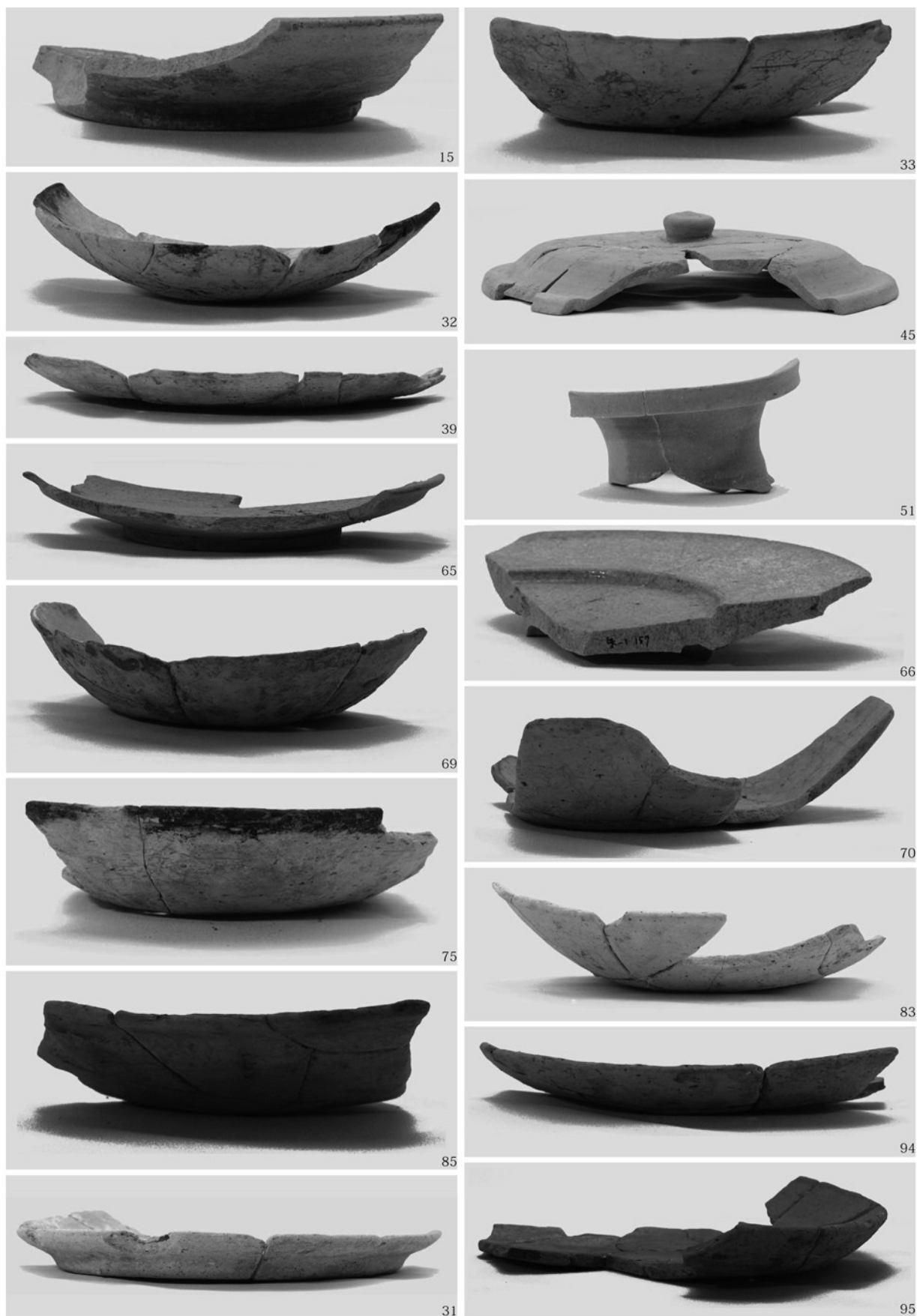
2 北側拡張部分遺構検出状況（北西から）



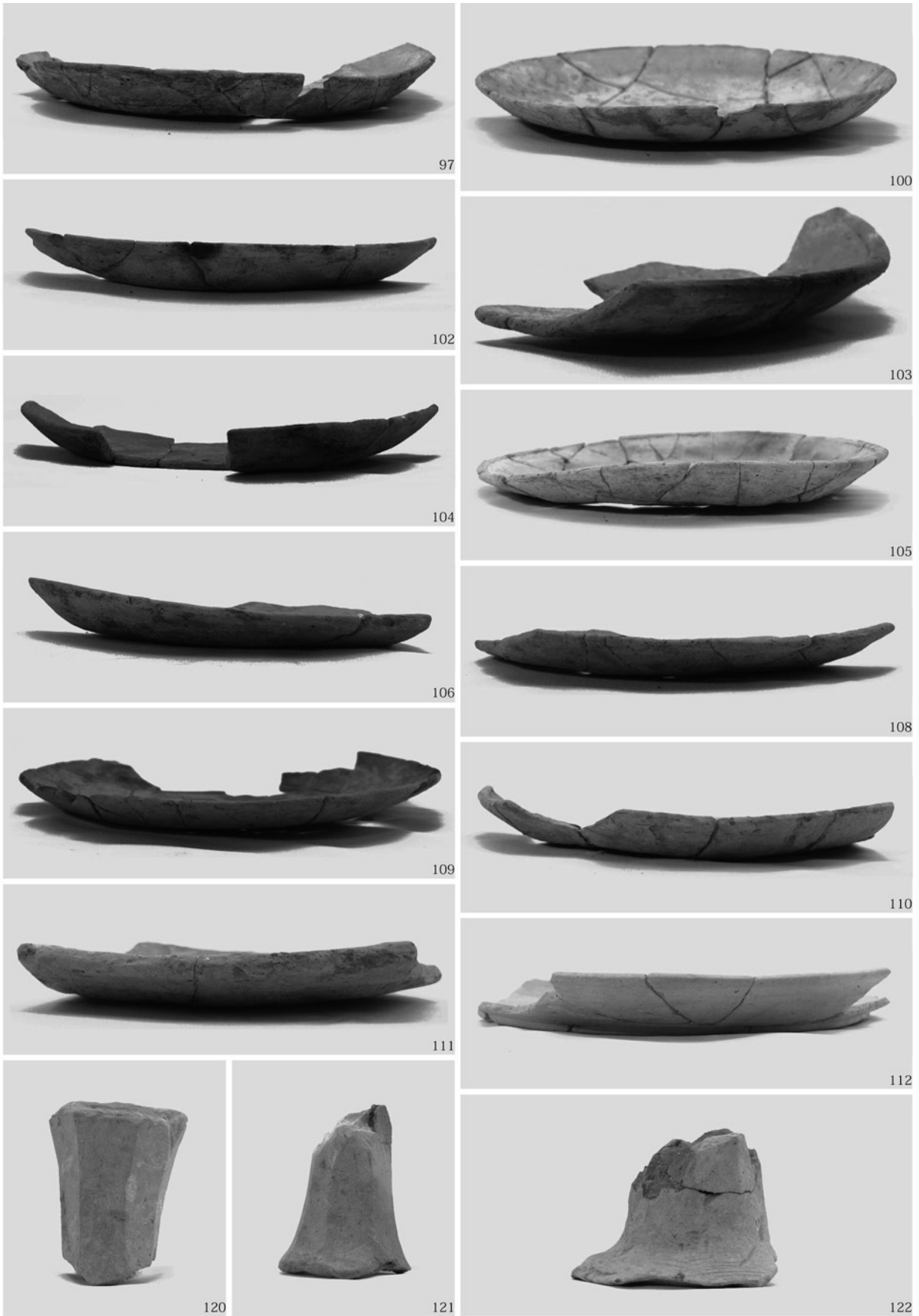
1 北側拡張部分遺構検出状況（南から）



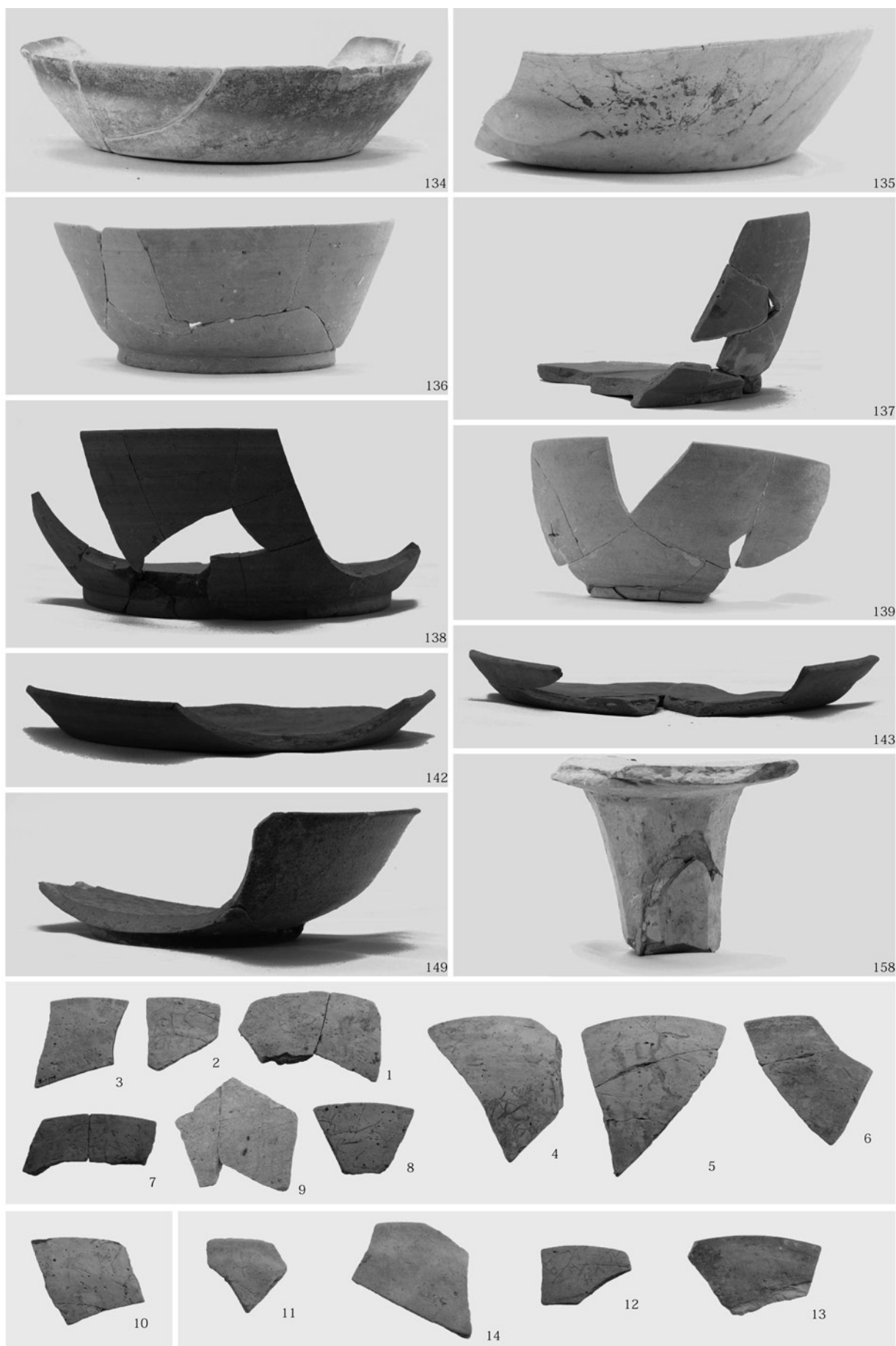
2 東側拡張部分遺構検出状況（西から）



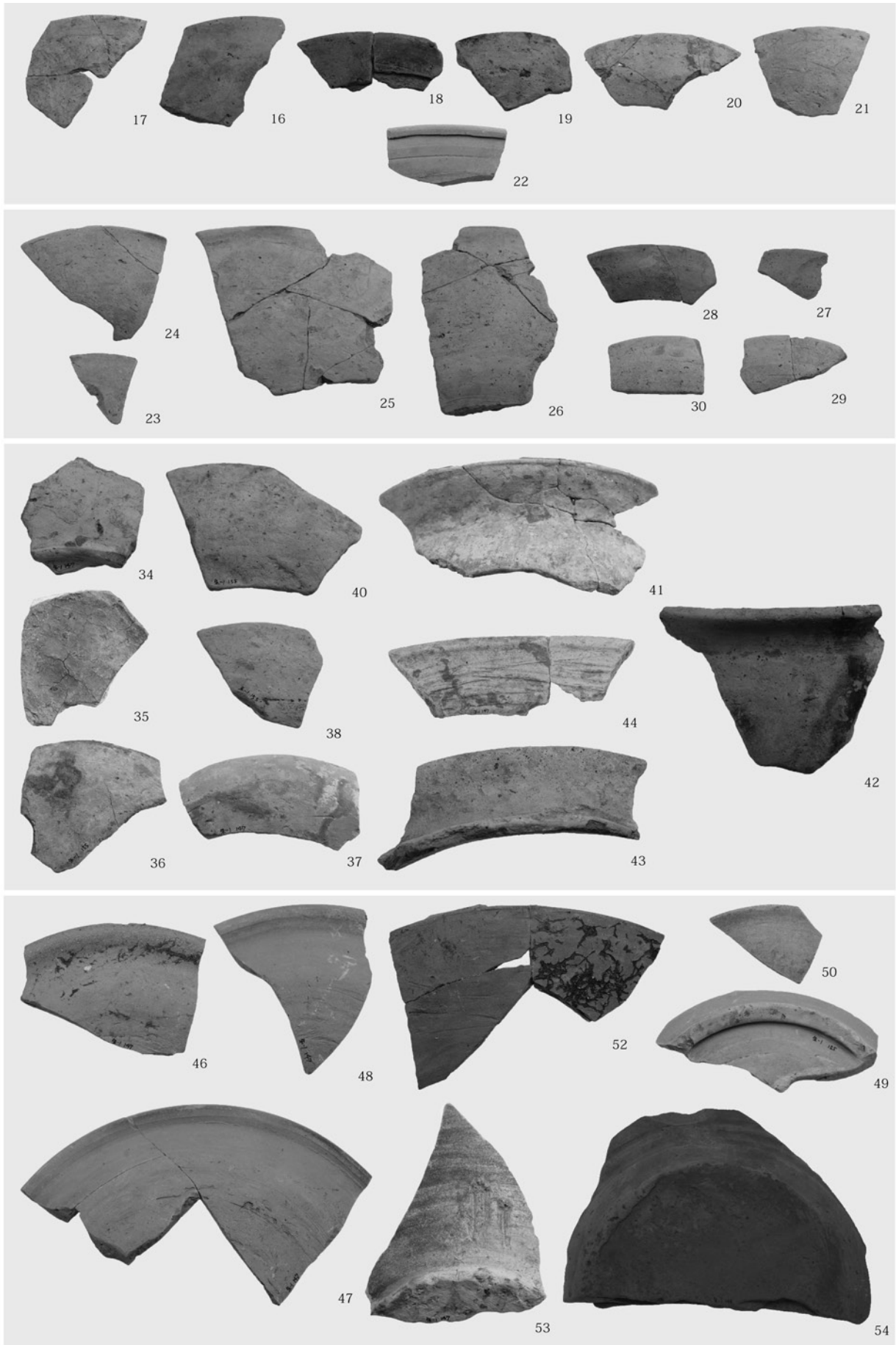
柱穴 43 (15) 柱穴 45 (31) 整地層上層 (32,33,39,45,51,65,66) 溝状落込み (69,70,75,83,85,94,95)



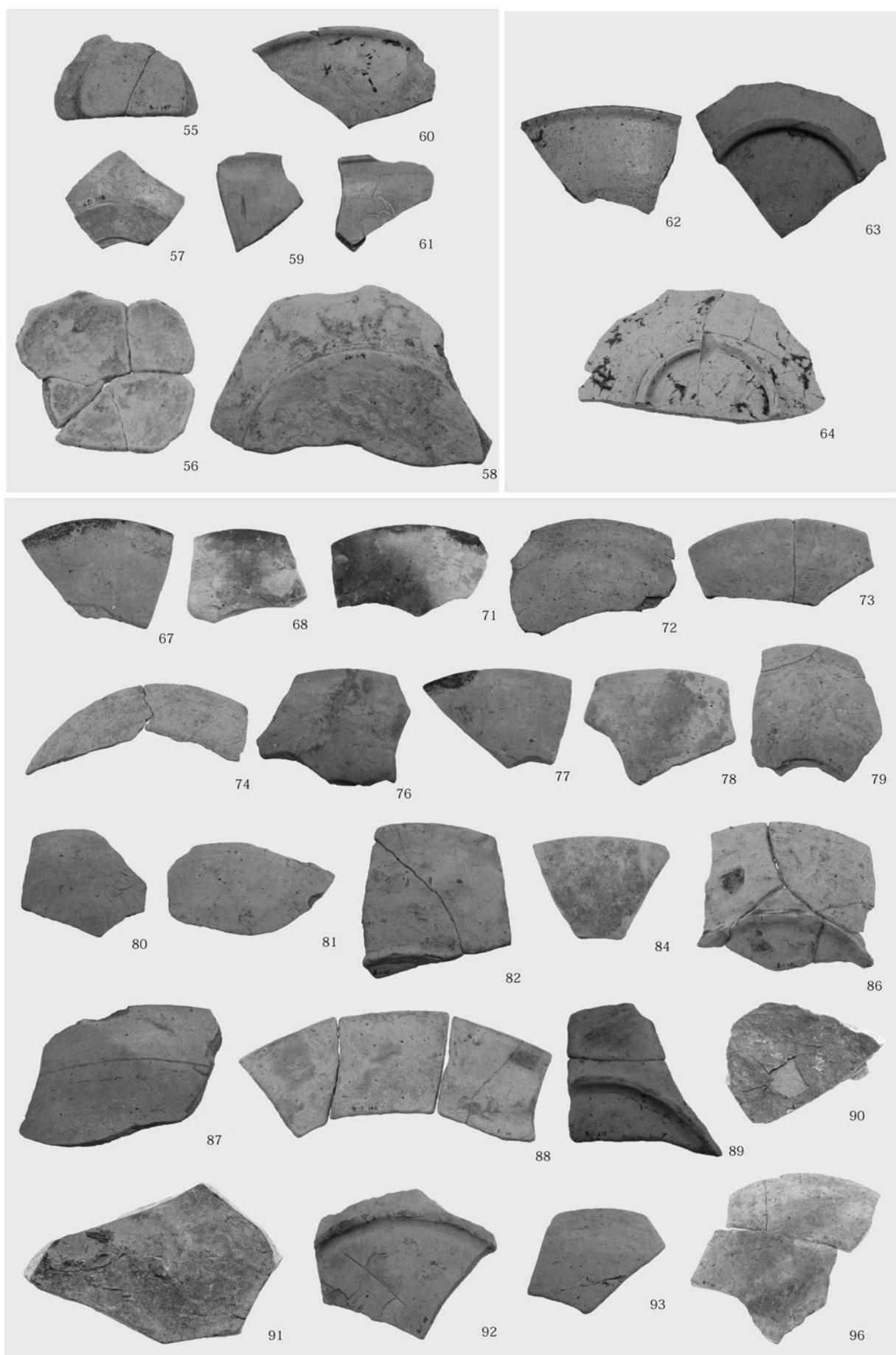
溝状落込み (97,100,102 ~ 106,108 ~ 112,120 ~ 122)



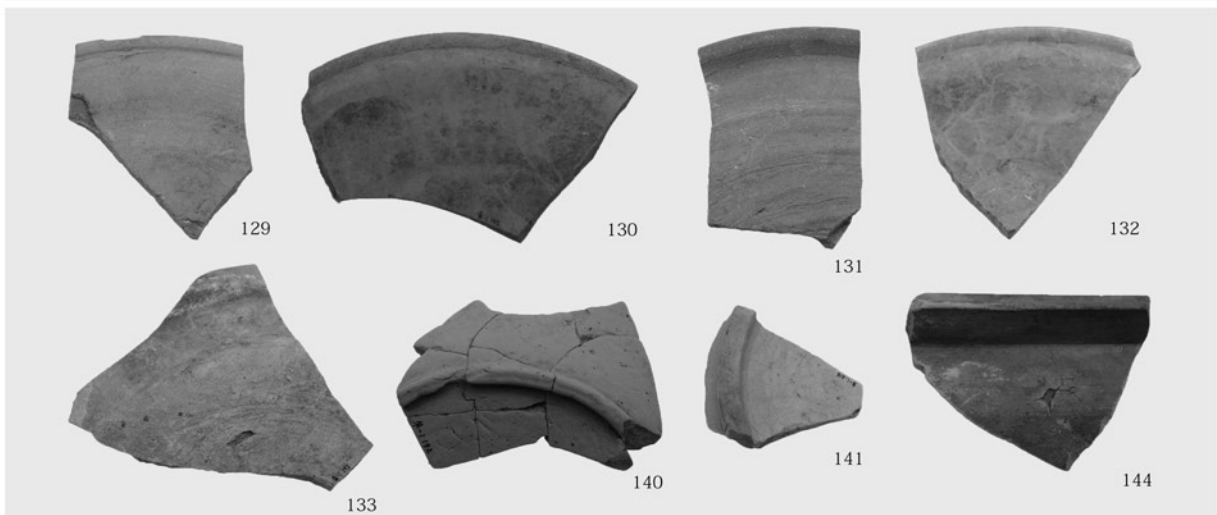
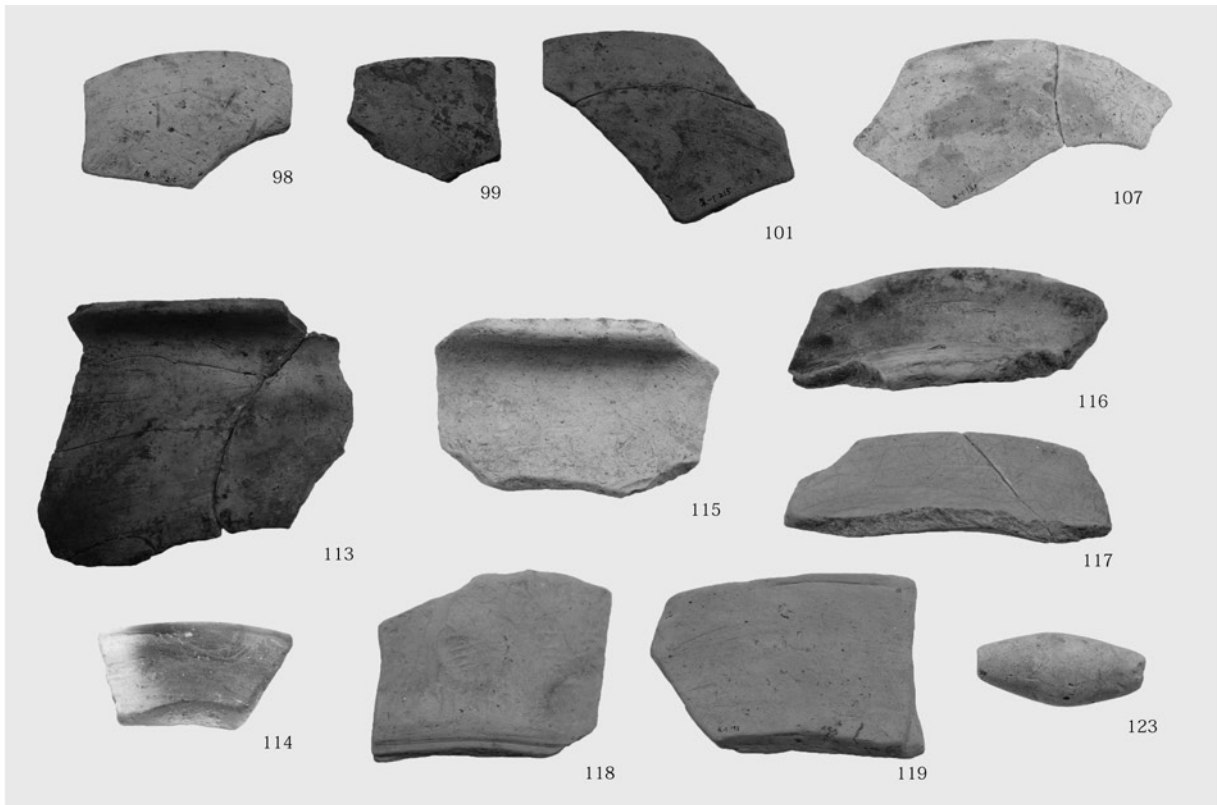
溝状落込み (134 ~ 139, 142, 143, 149) 整地層下層 (158) 柱穴 40 (1 ~ 9) 柱穴 41 (10) 柱穴 43 (11 ~ 14)



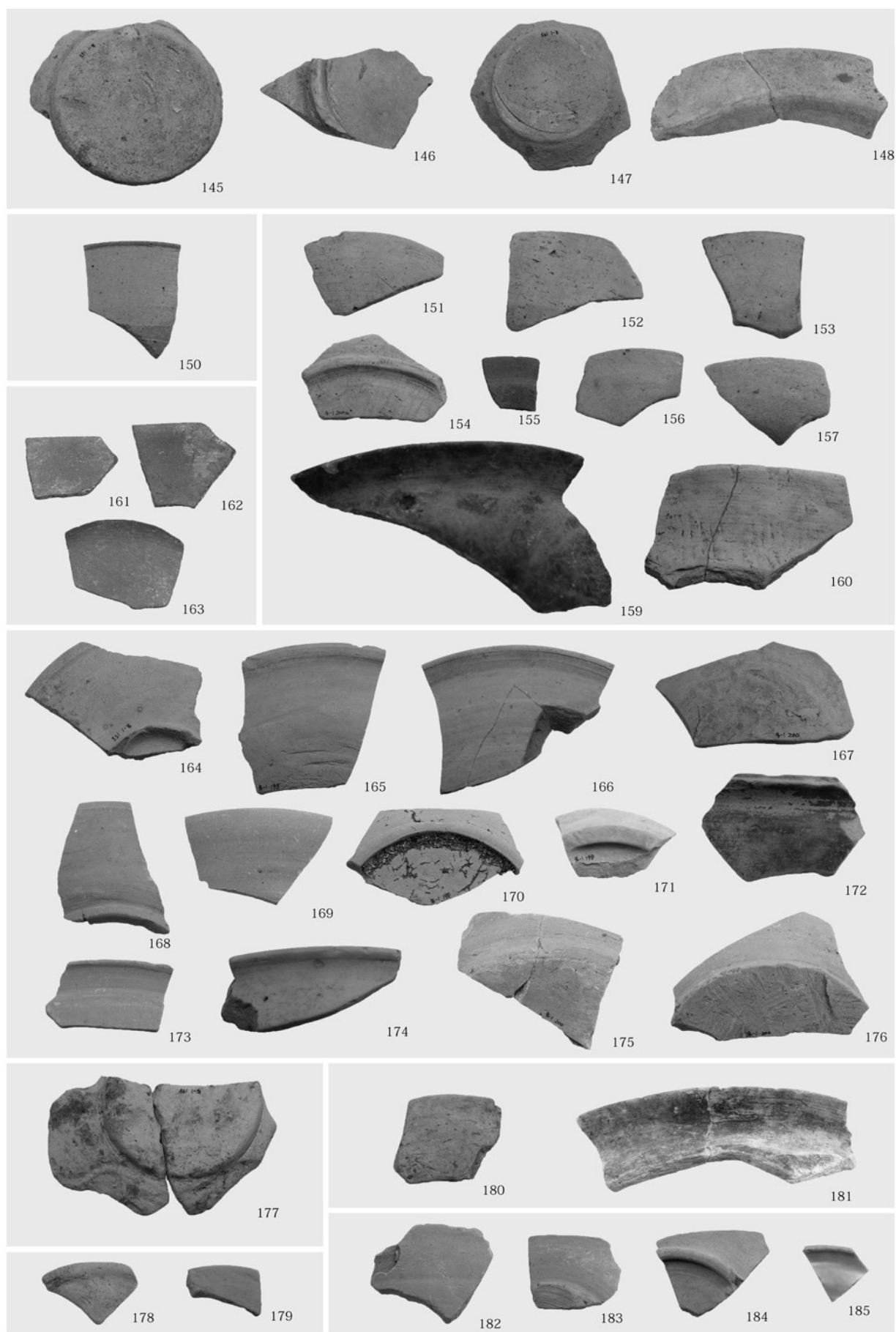
柱穴 44 (16 ~ 22) 柱穴 45 (23 ~ 30) 整地層上層 (34 ~ 38, 40 ~ 44, 46 ~ 50, 52 ~ 54)



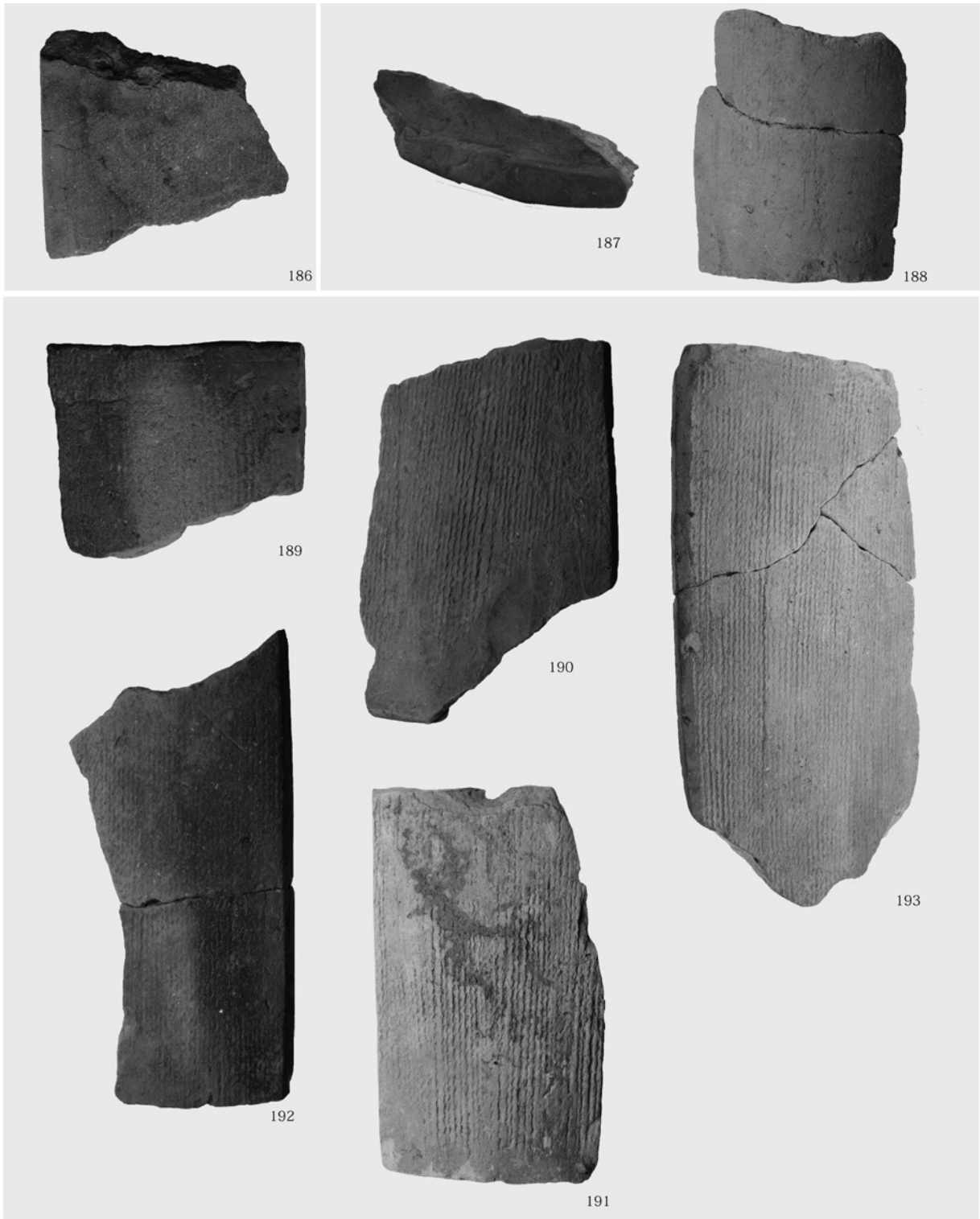
整地層上層 (55 ~ 64) 溝状落込み (67,68,71 ~ 74,76 ~ 82,84,86 ~ 93,96)



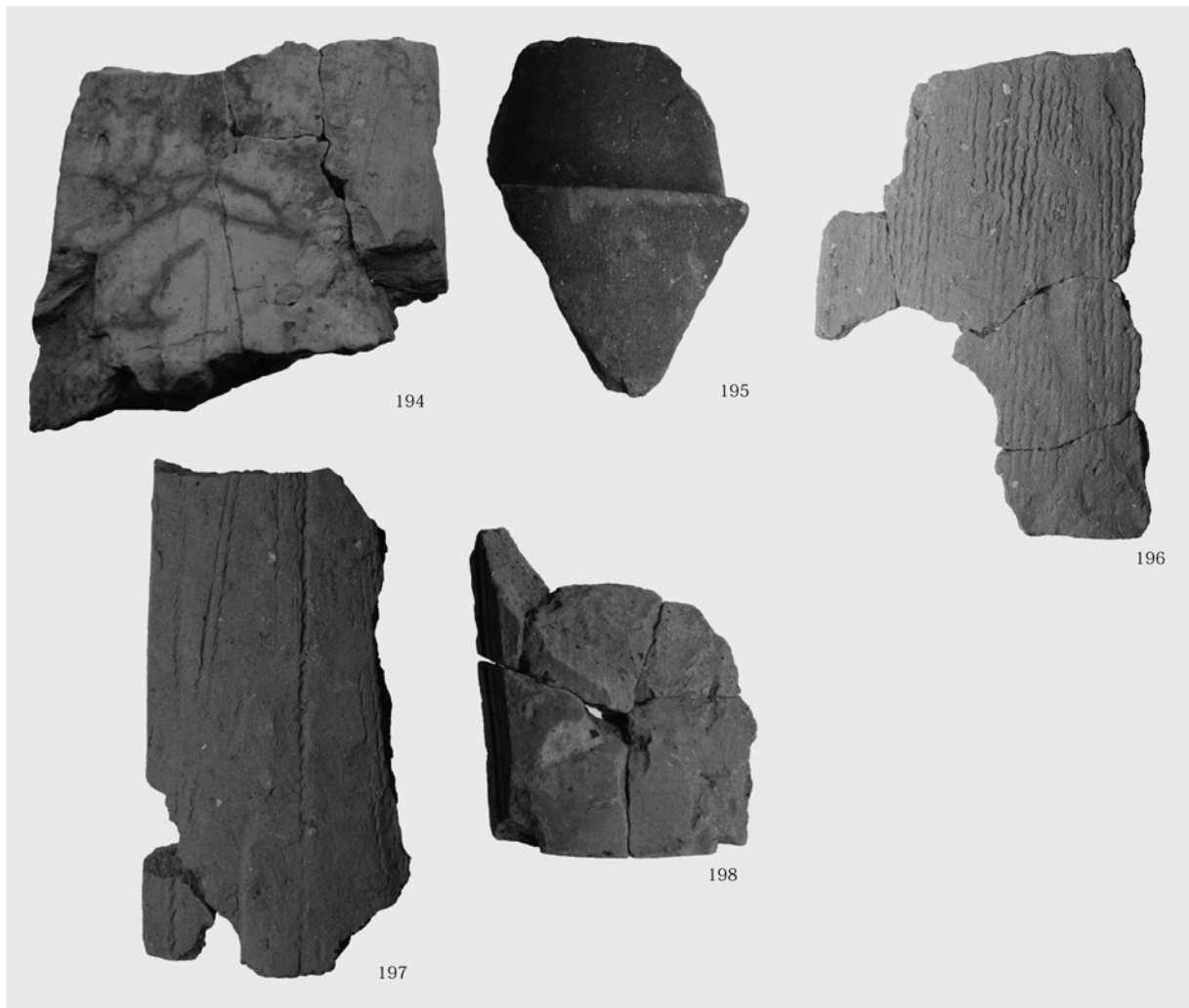
溝状落込み (98,99,101,107,113~119,123~133,140,141,144)



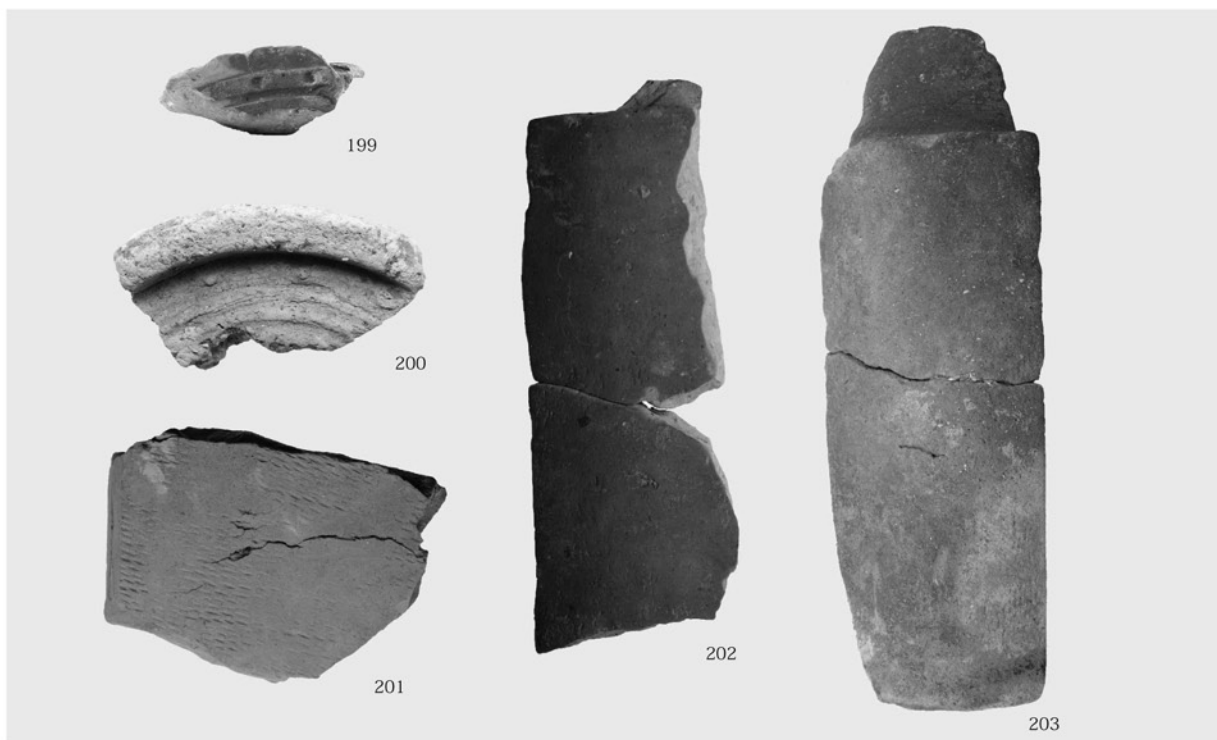
溝状落込み (145 ~ 148, 150) 整地層下層 (151 ~ 157, 159 ~ 177) 土坑 52 (178, 179) 溝 47 (180 ~ 185)



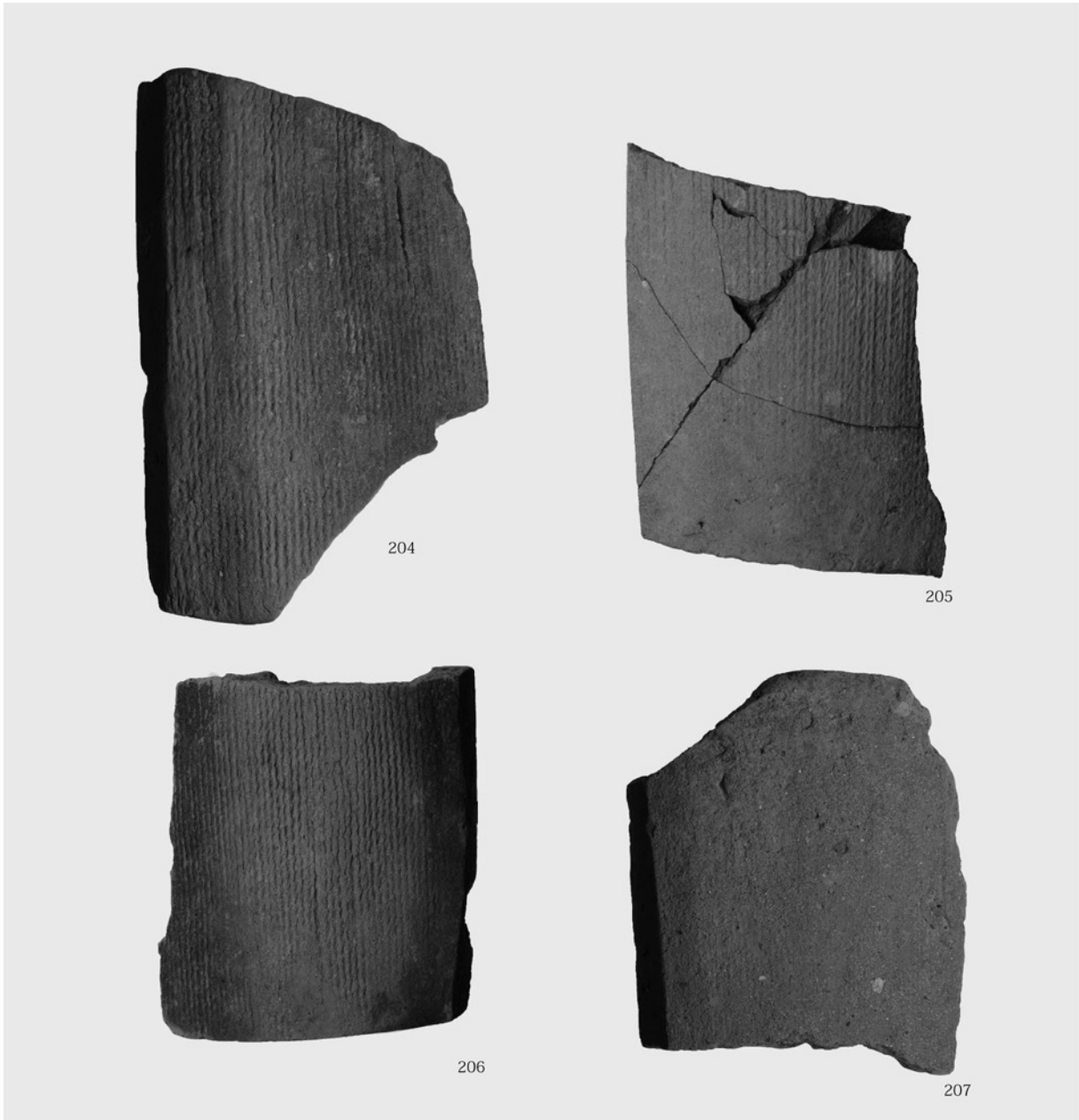
柱穴 43 (186) 整地層上層 (187 ~ 193)



溝状落込み (194 ~ 198)



整地層下層 (199 ~ 203)



整地層下層 (204 ~ 207)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	へいあんきょううきょうしじょういちぼうななちょう（すざくいん）あと							
署 名	平安京右京四条一坊七町（朱雀院）跡							
副 署 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	京都平安文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第 1 集							
編 著 者 名	卜田健司・河野凡洋							
編 集 機 関	有限会社 京都平安文化財							
所 在 地	〒 612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後 20-4							
発行年月日	西暦 2013 年 10 月 31 日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード				調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
へいあんきょううきょうしじょう 平安京右京四条 いちぼうななちょう 一坊七町 すざくいん あと （朱雀院）跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 みぶあまがいけちょう 壬生天池町 23-1	26104	1	35 度 00 分 24 秒	135 度 44 分 24 秒	2013 年 4 月 5 日 ～ 2013 年 5 月 31 日	266.59㎡ 本調査 220.24㎡ 確認調査 46.35㎡	老人健康福祉 施設建設
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記記事
平安京右京四条 一坊七町 （朱雀院）跡	都城跡	平安時代 前期		掘立柱建物跡		土師器・黒色土器 須恵器・緑釉陶器 灰釉陶器・瓦 土製品		嵯峨上皇により造 営された朱雀院の 主要建物群を構成 する建物を検出。
		中世		土坑・溝		土師器・須恵器 磁器・植物種子		朱雀院廃絶後の耕 作地に関連する土 坑・溝の検出。 中世の植生に関す る種子が出土。
		近世～現代		耕作溝		陶器・磁器・瓦 土製品・金属製品 ガラス製品		中世以降続く耕作 地に関連する溝を 検出。

平成 25 年（2013 年）10 月 31 日 発行

平安京右京四条一坊七町(朱雀院) 発掘調査報告書

編集 有限会社 京都平安文化財
発行 〒612-8018 京都府京都市伏見区桃山町丹後20-4
電話 075-644-6600

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル弁財天町300
電話 075-256-0961